福岡市埋蔵文化財調査報告書第1029集

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書　Ⅵ

五十川遺跡 6

―五十川遺跡第13次・14次調査の報告―

２００９

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1029集

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書　Ⅵ

五十川遺跡 6

ご　じゅっ　かわ

—五十川遺跡第13次・14次調査の報告—

遺 跡 略 号　GJK－13・14
遺跡調査番号　0444・0481

2 0 0 9

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

古来より文化交流の窓口の役割を果たしてきた福岡市域には、大陸や朝鮮半島との交流を示す多くの文化財が各所に残されており、発掘調査によって数多くの文物が次々と発見されています。これらを守り伝え、先人の遺産として活用していくことは現代に生きる私たちの責務ですが、これらの大半が市街地の再開発にともなって発見されることから、その保護は困難な状況にあります。

福岡市教育委員会では、埋蔵文化財を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。本書は市道御供所井尻線建設に伴って実施した五十川遺跡第13次・第14次調査の成果について報告するものです。発掘調査では、弥生時代から中世にわたる各時代の遺構を確認し、これまで知られていた五十川遺跡の内容を大きく書き変える知見を得ることができました。

この報告書が市民の皆様の文化財保護への理解を深める手助けとなり、また学術研究や社会教育の分野においても幅広く活用されれば幸いと考えます。

最後になりましたが、調査に際してご協力頂きました地元作業員の方々をはじめ、道路下水道局をはじめとする関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成21年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　山 田 裕 嗣

例　　言

1．本書は平成16～17（2004～2005）年度に福岡市教育委員会が行った、福岡市南区五十川二丁目地内所在の五十川遺跡第13・14次発掘調査の報告書である。
2．発掘調査及び整理報告書作成は、市道御供所井尻線新設に伴う土木局（現在は道路下水道局）の令達事業として実施した。本報告書は同事業に係る調査報告書の第６分冊である。
3．発掘調査及び整理報告書作成は福岡市教育委員会の吉武学が担当した。発掘調査は道路用地買収後に家屋が解体され調査可能となった部分から順次行い、調査区は第13次調査をＨ区、第14次調査をＩ区と呼称した。
4．検出遺構には、調査区ごとに４桁の連番号を付した（Ｈ区；8001～、Ｉ区；9001～）。
5．遺構番号の頭には、遺構の性格を示す記号としてSB（掘立柱建物）・SD（溝状遺構）・SE（井戸）・SK（貯蔵穴・土坑）・SX（性格不明遺構）・SP（柱穴・ピット）を付した。
6．本書に使用した遺構実測図の作製は、調査担当者のほか、坂口剛毅（技能員）が行った。
7．本書に使用した遺物実測図の作製は、調査担当者のほか、田中克子（技能員）が行った。
8．本書に使用した図の製図は田中が行った。
9．本書に使用した写真の撮影は吉武が行った。
10．本書に使用した方位は全て磁北である。
11．本書の執筆・編集は吉武が行った。
12．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺　跡　名	五十川遺跡第13次調査		遺跡調査番号	0444	
遺跡略号	GJK －13		調査地地籍	南区五十川２丁目地内	
開発面積	－㎡	調査対象面積	－㎡	調査面積	129㎡
調査期間	2004年（平成16年）８月２日～2004年（平成16年）８月31日				

遺　跡　名	五十川遺跡第14次調査		遺跡調査番号	0481	
遺跡略号	GJK －14		調査地地籍	南区五十川２丁目地内	
開発面積	－㎡	調査対象面積	－㎡	調査面積	960㎡
調査期間	2005年（平成17年）１月24日～2005年（平成17年）６月３日				

本　文　目　次

第一章　はじめに …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．発掘調査の方法と経過 …… 2
第二章　遺跡の地理的位置と歴史的環境 …… 3
　1．　五十川遺跡の位置と周辺遺跡 …… 3
　2．　五十川遺跡のこれまでの調査 …… 4
第三章　H区の調査 …… 9
　1．調査の概要 …… 9
　2．検出遺構と出土遺物 …… 11
　　⑴　溝状遺構 …… 11
　　⑵　井戸状遺構 …… 16
　　⑶　地下式壙 …… 19
　　⑷　その他の出土遺物 …… 21
　3．小結 …… 22
第四章　Ⅰ区の調査 …… 27
　1．調査の概要 …… 27
　2．検出遺構と出土遺物 …… 28
　　⑴　掘立柱建物 …… 28
　　⑵　溝状遺構 …… 32
　　⑶　井戸状遺構 …… 33
　　⑷　貯蔵穴 …… 34
　　⑸　落とし穴状遺構（土坑） …… 35
　　⑹　その他の土坑 …… 39
　　⑺　その他の出土遺物 …… 42
　　⑻　旧石器時代包含層の調査 …… 44
　3．小結 …… 44
第五章　F・G区の調査（補遺） …… 51
　1．調査の概要 …… 51
　2．黒曜石製石器 …… 51
　3．その他の石器 …… 65
第六章　おわりに －都市計画道路 御供所井尻線建設地内の調査から－ …… 66

挿　図　目　次

Fig. 1　御供所井尻線予定地内の調査区割り(1/2,000) …… 2
Fig. 2　周辺遺跡分布(1/25,000) …… 5
Fig. 3　五十川遺跡のこれまでの調査地点(1/4,000) …… 6
Fig. 4　調査区周辺の古地図(1/4,000) …… 7
Fig. 5　第10・11・13・14次調査区の位置(1/500) ……（折り込み）

Ｈ区

Fig. 6　第13次調査区(Ｈ区)の位置(1/300) …… 9
Fig. 7　Ｈ区の遺構配置(1/100) …… 10
Fig. 8　溝状遺構 SD−8002・8003(1/40) …… 12
Fig. 9　SD−8003出土土器(1/3) …… 12
Fig. 10　溝状遺構 SD−8010土層図・断面図(1/40) …… 14
Fig. 11　SD−8005・8010出土土器(1/3) …… 15
Fig. 12　井戸状遺構 SE−8001・8007・8009(1/40) …… 17
Fig. 13　SE−8001・8007出土土器(1/3) …… 18
Fig. 14　SE−8009出土土器(1/3) …… 19
Fig. 15　地下式壙 SK−8008(1/40) …… 20
Fig. 16　SK−8008出土土器(1/3) …… 20
Fig. 17　その他の出土土器(1/3) …… 21
Fig. 18　Ｈ区出土の鉄製品・石器(58・59は1/2、他は1/3) …… 21

Ｉ区

Fig. 19　第14次調査区(Ｉ区)の位置(1/300) …… 27
Fig. 20　Ｉ区の遺構配置(1/150)と土層略測(1/40) ……（折り込み）
Fig. 21　Ｉ区の主要遺構配置(木根を除く)(1/200) …… 29
Fig. 22　掘立柱建物 SB−9020(1/60) …… 30
Fig. 23　掘立柱建物 SB−9024・9055(1/60) …… 31
Fig. 24　SB−9020・9055出土土器(1/3) …… 32
Fig. 25　溝状遺構 SD−9002出土土器(1/3) …… 32
Fig. 26　井戸状遺構 SE−9053(1/40) …… 33
Fig. 27　SE−9053出土土器(1/3) …… 33
Fig. 28　貯蔵穴 SK−9010(1/40) …… 34
Fig. 29　SK−9010出土土器(1/3) …… 34
Fig. 30　落とし穴状遺構の配置(1/200) …… 36
Fig. 31　落とし穴状遺構 SK−9008・9009・9011・9016・9017・9022(1/40) …… 37
Fig. 32　SK−9008・9016出土土器(1/3) …… 38
Fig. 33　土坑 SK−9001・9014・9018・9019・9023・9051・9052(1/40) …… 40
Fig. 34　SK−9001・9019・9052出土土器(1/3) …… 41
Fig. 35　その他の出土土器(1/3) …… 43
Fig. 36　Ｉ区出土の石器・銅製品(67は1/2、他は1/1) …… 43

Fig. 37　旧石器時代遺物の出土位置(1/150) …… 45
Fig. 38　旧石器(1/1) …… 46
Ｆ・Ｇ区（補遺）
Fig. 39　黒曜石製石器Ⅰ(1/1) …… 52
Fig. 40　黒曜石製石器Ⅱ(1/1) …… 53
Fig. 41　黒曜石製石器Ⅲ(1/1) …… 54
Fig. 42　黒曜石製石器Ⅳ(1/1) …… 55
Fig. 43　黒曜石製石器Ⅴ(1/1) …… 56
Fig. 44　黒曜石製石器Ⅵ(1/1) …… 57
Fig. 45　黒曜石製石器Ⅶ(1/1) …… 58
Fig. 46　黒曜石製石器Ⅷ(1/1) …… 59
Fig. 47　黒曜石製石器Ⅸ(1/1) …… 60
Fig. 48　黒曜石製石器Ⅹ(1/1) …… 61
Fig. 49　黒曜石製石器Ⅺ(1/1) …… 62
Fig. 50　黒曜石製石器Ⅻ(1/1) …… 63
Fig. 51　その他の石器(1/1) …… 65
おわりに
Fig. 52　各時期の遺構配置(1/1,000) …… 68
Fig. 53　中世の遺構配置と古地図との対比(1/1,000) …… 69
Fig. 54　Ｃ区・Ｅ区方形周溝墓合成図(1/150) …… 70

図　版　目　次

PL. 1　Ⅰ区から井尻Ｂ遺跡方面を望む（北西から）

Ｈ区（P23～ P26）

PL. 2　1. Ｈ区全景（南から）　2. Ｈ区北半部（南から）
PL. 3　1. Ｈ区南半部（北から）　2. 溝 SD−8010東壁土層（西から）
PL. 4　1. 溝 SD−8003土層（西から）　2. 溝 SD−8010（西から）
3. 井戸 SE−8001（南から）　4. 井戸 SE−8007（東から）
5. 井戸 SE−8009（北西から）　6. 井戸SE−8009・地下式壙SK−8008（北西から）
PL. 5　1. 地下式壙 SK−8008（北西から）　2. Ｈ区出土遺物（縮尺不同）

Ⅰ区（P47～ P50）

PL. 6　1. Ⅰ区南半部全景（北西から）　2. Ⅰ区北半部全景（北西から）
PL. 7　1. 掘立柱建物SB−9020北半部（北西から）　2. 掘立柱建物 SB−9020南半部（北西から）
3. 井戸 SE−9053（南西から）　4. 貯蔵穴 SK−9010（東から）
5. 土坑 SK−9001（北から）　6. 土坑 SK−9052（東から）
PL. 8　1. 落とし穴状遺構 SK−9008（南東から）　2. 落とし穴状遺構 SK−9009（北西から）
3. 落とし穴状遺構 SK−9011（北西から）　4. 落とし穴状遺構 SK−9016（北西から）
5. 落とし穴状遺構 SK−9017（北西から）　6. 土坑 SK−9019（南西から）
PL. 9　1. 旧石器時代包含層グリッド（北から）　2. 旧石器時代包含層グリッド（北から）
3. Ⅰ区南端のトレンチ調査（南東から）　4. Ⅰ区作業風景（北西から）
5. Ⅰ区出土遺物（縮尺不同）

表　目　次

Tab. 1　御供所井尻線建設に伴う五十川遺跡調査一覧 …… 3
Tab. 2　五十川遺跡発掘調査一覧 …… 8

第一章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡市では文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、公共・民間の各種開発事業に対する事前審査を行い、開発によって埋蔵文化財が損なわれる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。平成13年８月１日、福岡市土木局道路建設部南部建設課より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課あてに、福岡市南区五十川２丁目の「都市計画道路御供所井尻線道路整備事業」地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査依頼があった。申請地は福岡市文化財分布地図では五十川遺跡に含まれており、かつ周辺部では過去に数度の発掘調査を行っていたことから、埋蔵文化財課では遺跡が存在する可能性が高いものと考えて、確認調査が必要な旨を土木局に対して回答した。その後、家屋撤去等が終了して確認調査が可能となった部分に対し、平成13年10月31日、平成14年１月23日、７月23日に順次トレンチ調査を実施した結果、地表下50㎝以下で遺構・遺物を検出し、申請地のうちの台地部分については発掘調査が必要となると判断した。この結果を踏まえて土木局と協議を行い、用地買収後、既存建物の解体が終了し、発掘調査可能なまとまった面積が確保できた段階で順次発掘調査を行っていくこととした。これに基づき、五十川遺跡の調査を平成14年８月19日より開始し、その後、断続的に平成17年６月３日まで第10次・11次・13次・14次の４次にわたって発掘を行い、未買収地300㎡を残して中断している。また、整理報告書作成は、同一事業地内で行った井尻Ｂ遺跡発掘調査の整理報告が完了した後の平成19年度から開始し、第10次・第11次調査については同年度に報告書を刊行した。

本書で報告する発掘調査は、第13次調査を平成16年８月２日～８月31日に、第14次調査を平成17年１月24日～６月３日に行った。調査にあたり地元の皆様にご理解とご協力を頂いた。また、整理報告書作成は平成20年度に行い、いずれも道路下水道局の令達事業として埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第１課）が実施した。

２．調査の組織

調査時（平成16～17年度）、及び整理報告時（平成20年度）の組織は以下の通りである。

調査委託　福岡市土木局道路建設部南部建設課（現在は道路下水道局道路整備部南部道路整備課）

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　植木とみ子（調査時）、山田裕嗣

調査総括　埋蔵文化財課長　山口譲治（現埋蔵文化財第１課長）

調査第２係長　池崎譲二（調査時）、米倉秀紀（現調査係長）

調査庶務　文化財整備課管理係　鈴木由喜（調査時）、井上幸江（現文化財管理課）

調査担当　事前審査係（試掘・協議担当）　井上繭子（調査時）、星野恵美

調査第２係　吉武　学

調査協力　坂口剛毅（技能員）、池田省三、上野龍夫、江島光子、加藤常信、唐島栄子、坂下達男、佐藤俊治、嶋ヒサ子、清水　明、大長正弘、高野瑛子、谷　英二、谷　正則、徳永静雄、中村尚美、西田文子、布江孝子、野口ミヨ、野田淳一、平川正夫、廣田安平、松永重子、三浦　力、宮崎タマ子、持丸玲子、森田祐子、山内　恵、山崎光一、山下智子、結城フヂ子、吉住政光、吉田恭子、吉田米男（五十音順、敬省略）

整理協力　田中克子（技能員）、青木悦子、四反田美香子、下山慎子、萩尾朱美、森　寿恵

（五十音順、敬省略）

3．発掘調査の方法と経過 （Fig. 1、Tab. 1）

五十川遺跡は南北約800m、東西約240m、標高９～11mほどの洪積中位段丘面上に立地し、北は鞍部を介して那珂遺跡群の立地する段丘面に連続するが、その他は沖積地に囲まれて独立した台地となっている。今回の「都市計画道路御供所井尻線道路整備事業」はこの台地の南西端を斜めに貫通するよう計画されている。事業前の用地の状況は戸建てを主とする住宅地であり、これらの用地買収と解体が順次終了していき、ある程度まとまった面積が確保された段階で発掘調査に着手していった。調査は平成14年度に開始したが、その後の用地買収の進捗状況等から断続的となり、平成17年度までの４年にわたり都合４回の発掘調査を実施した。

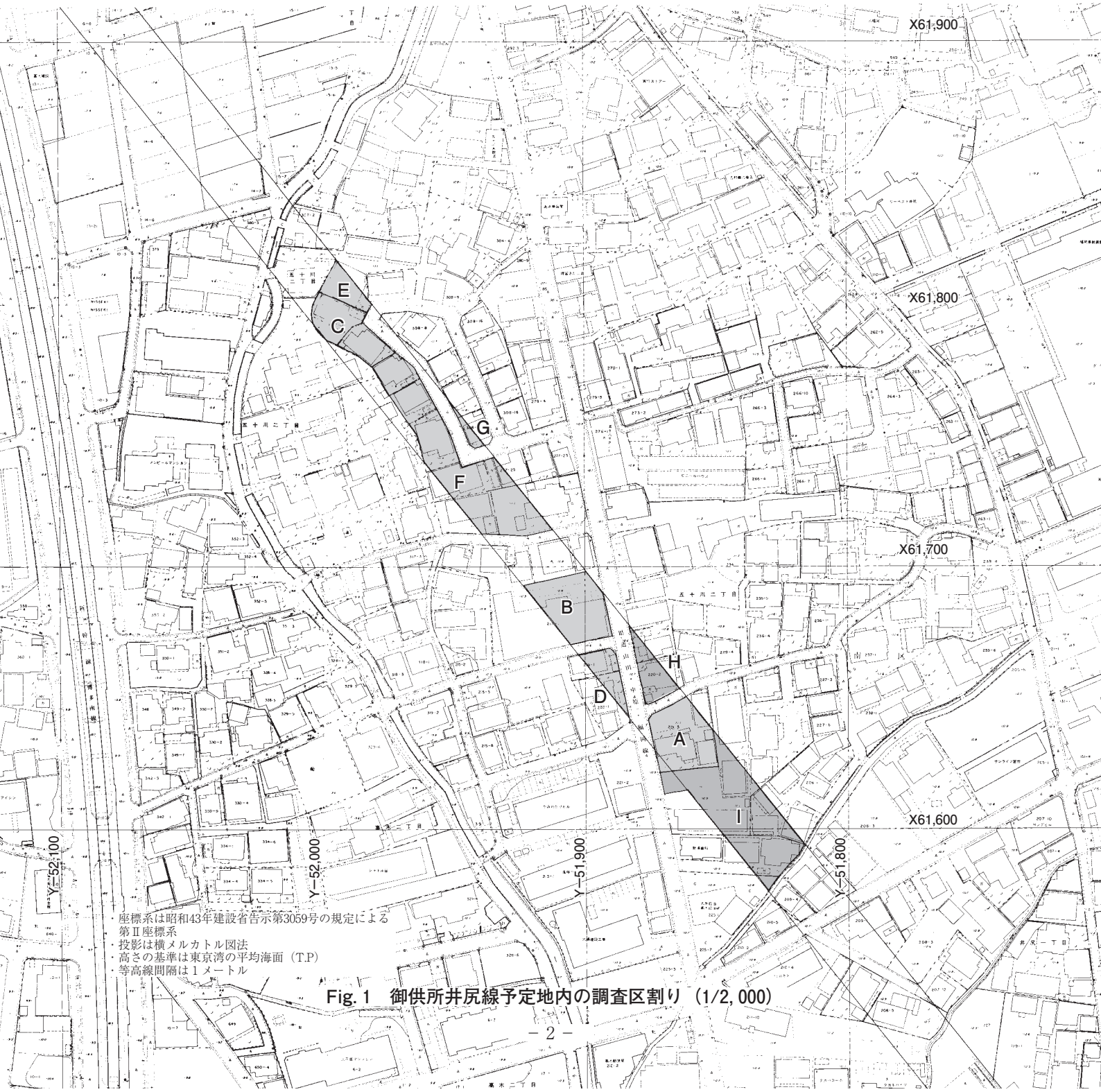


Fig. 1　御供所井尻線予定地内の調査区割り（1/2, 000）

Tab. 1　御供所井尻線建設に伴う五十川遺跡調査一覧

調査年度	調査番号	次数	調査期間	調査区	調査面積	担当者	調査の概要
平成14	0229	10	2002. 8. 19 ～ 2003. 3. 26	A	1100㎡	横山	弥生時代－土坑、古墳時代－竪穴住居１＋溝２＋井戸１＋円墳１＋土坑、鎌倉時代－溝１＋土坑
				B		上角	弥生時代前期－溝１＋貯蔵穴３、奈良時代－溝１、室町時代－溝２、時期不詳－掘立柱建物３、旧石器時代遺物
				C		横山	弥生時代－竪穴住居３＋貯蔵穴４＋土坑３、古墳時代－方形周溝墓２＋石棺墓１、平安時代－土壙墓１＋土坑１、室町時代－大溝２、時期不詳－土坑１
				D			弥生時代－溝１、室町時代－溝４・土坑１
平成15	0314	11	2003. 5. 15 ～ 2004. 1. 31	E	202㎡	吉武	弥生時代－貯蔵穴３、古墳時代前期－方形周溝墓２、室町時代－溝２
				F	1134㎡		弥生時代前～中期－竪穴住居４＋溝３＋木棺墓３＋土壙墓２＋甕棺墓９＋貯蔵穴20＋土坑17、古墳時代前期－竪穴住居４、弥生～古墳時代－竪穴住居１＋土坑４＋性格不明遺構１＋柱穴多数、奈良時代－溝１、中世－柵１＋掘立柱建物１＋溝７＋土坑２
				G	32㎡		弥生時代前期－竪穴住居１、室町時代－溝１
平成16	0444	13	2004. 8.　2 ～ 2004. 8. 31	H	129㎡		奈良時代－井戸１、室町時代－井戸１＋大溝１＋地下式壙１＋土坑１
平成16 / 平成17	0481	14	2005. 1. 24 ～ 2005. 6.　3	I	960㎡		旧石器時代－包含層、弥生時代－貯蔵穴１、古墳時代前期－土坑６＋井戸１、平安時代－土坑１、室町時代－土坑１＋掘立柱建物３

調査次数は各年度で区別した。対象地は生活道路等によって寸断されるため、区画ごとに調査区を設定したが、調査区の呼称は調査次数を問わず着手順にＡからＩまでアルファベットを付した。平成14年度（調査番号0229）の第10次調査ではＡ～Ｄ区、同15年度（0314）の第11次調査ではＥ～Ｇ区、同16年度（0444）の第13次調査ではＨ区、同16～17年度（0481）の第14次調査ではＩ区を対象とした。遺構番号は調査区ごとに４桁の連番号を付した（Ａ区；1001～、Ｂ区；2001～、・・・Ｈ区；8001～、Ｉ区；9001～）。本書はＨ区とＩ区についての報告である。

遺構実測の基準線は計画道路軸線をもとに設定し、土木局より国土座標データの提供を受けた。ただし埋蔵文化財課保管の『博多区・南区内（那珂～井尻地区）遺跡基準点測量委託　四級基準点測量成果簿（平成６年２月）』の成果データとは若干の誤差があったため、後者の数値を使用して国土座標（第Ⅱ系）に位置づけている。

第二章　遺跡の地理的位置と歴史的環境

１．五十川遺跡の位置と周辺遺跡　(Fig. 2)

背振山系と東平尾丘陵に挟まれた福岡平野中央部には、御笠川・那珂川等の河川により形成された洪積中位段丘面の断続的な連なりが東西に２列認められる。福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川、井尻、寺島、春日市須玖、下白水を経て那珂川町安徳にのびる面と、福岡市博多区板付から諸岡、麦野、元町を経て春日市春日原に達する面で、これらは地質学上須玖面と呼ばれ、主に阿蘇山起

源の広域テフラであるAso－4火砕流堆積物によって構成され、沖積低地から3～20mの比高差を有する平坦な台地となっている。五十川遺跡はこのような低平な独立台地のひとつに立地するが、この台地は南北約800m、東西240mほどの広さを持ち、標高9～11mで北へ緩やかに傾斜している。周囲は沖積低地に囲まれているが、北端は鞍部を介して更に北へ台地が広がり、ここには那珂・比恵遺跡群が立地している。他方、狭い谷を挟んだ南側の台地上には井尻Ｂ遺跡が隣接する。

北方の那珂・比恵遺跡群は、水稲耕作の始まりとともにまず台地縁辺部に集落が営まれ、以後、弥生時代中期、古墳時代前期、古代をピークとして遺構が営まれる。特に弥生時代中期には樹林を伐採して台地中央部に集落が拡大するが後期には一旦衰え、終末にかけて新たな大規模開発が始まり、那珂八幡古墳を中軸に据えた意図的な墓地エリアや集落エリアの配置が認められる。5～6世紀には集落が減少するが、6世紀中葉に東光寺剣塚前方後円墳が営まれたのち、後半～末にかけて集落が再び拡大する。これらの一部では強制的に集落が撤去され、那津宮家や那珂評衙・郡衙などの官衙とも推定される大型掘立柱建物群や柱列、溝などが規則的に配置されるようになる。

南方の井尻Ｂ遺跡では先土器時代や弥生時代前期の遺物が台地縁辺部で出土するが、弥生時代後期前半までの遺構・遺物はさほど多くなく、後期後半になって青銅器生産を伴う集落が大規模に営まれる。集住の状況は古墳時代前期まで続き、中期には古墳群が営まれる。7世紀末から奈良時代には台地北部を縦横に走る正方位の溝が確認され、瓦や「寺」と刻んだ須恵器等が出土するなど、寺院跡もしくは官衙が存在した可能性が指摘されている。

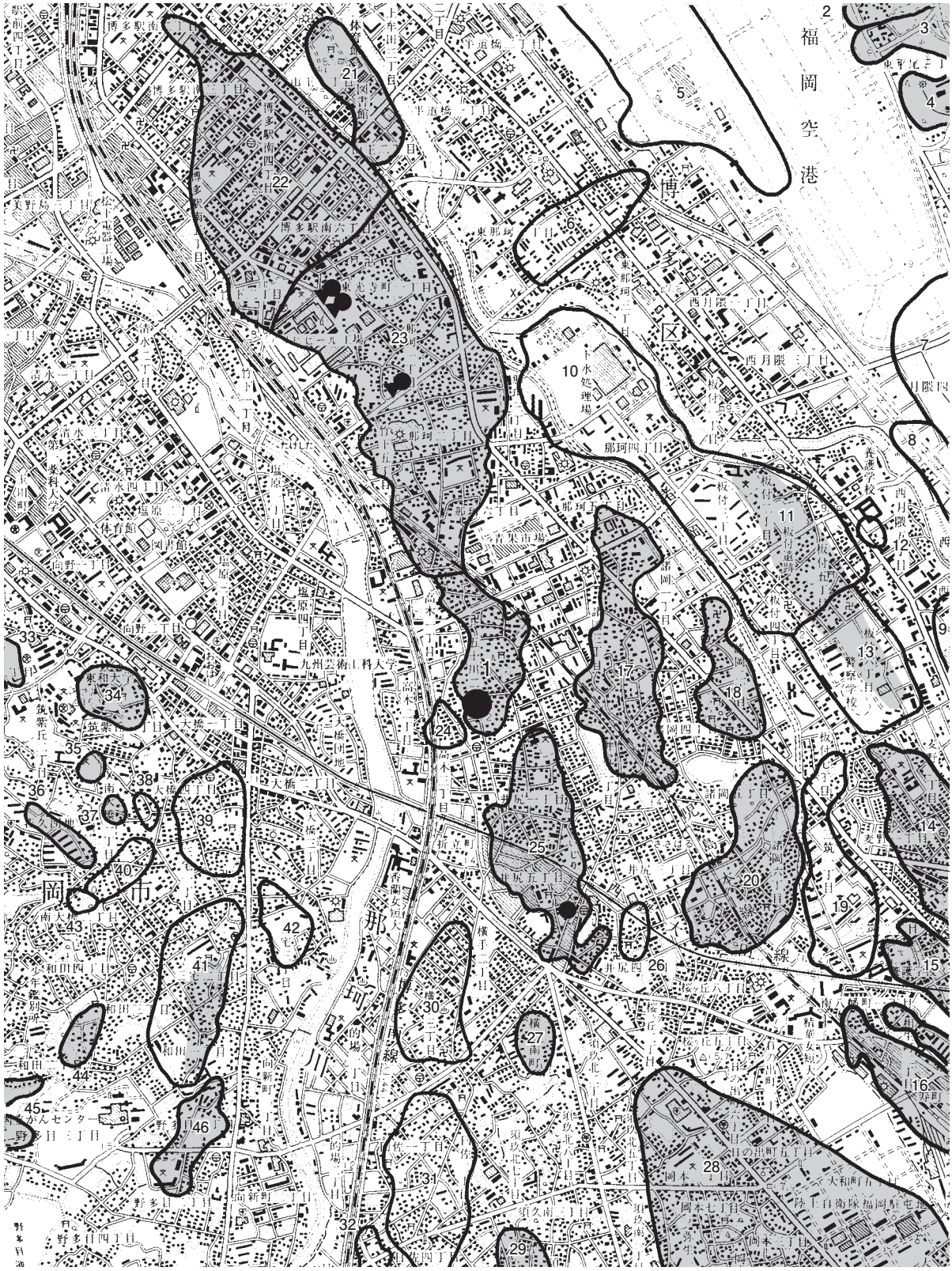
東方には諸岡Ａ遺跡、次いで同Ｂ遺跡が位置し、ナイフ形石器など先土器時代包含層、縄文時代晩期住居、弥生時代の貯蔵穴・甕棺墓地、古墳時代墓地、諸岡館跡をはじめとする中世集落や地下式壙等を確認しており、これらに伴ってゴホウラ製貝輪や朝鮮系無文土器が出土したほか、台地縁辺部では突帯文土器が出土することがこれまでの調査で判明している。

一方、西方は河川氾濫原となり、那珂川西岸の丘陵部あたりまで広く遺跡の空白地域となっている。

2．五十川遺跡のこれまでの調査（Fig. 3～5、Tab. 2）

五十川遺跡では現在16次までの発掘調査が終了しているが、今回の道路予定地と第1次調査を除けば、いずれも民間宅地開発に伴う1,000㎡以下の小規模な調査に留まっている。五十川遺跡ではこれまでに旧石器時代から中・近世までの遺物・遺構を確認しているが、集落が連続して営まれず、各時期の遺構が散発的に点在しているという印象が強い。以下、五十川遺跡の概要を見てみたい。

今回の第14次や第11次において、ナイフ形石器と原の辻型台形石器、細石刃？などが出土した。後期旧石器時代後期が五十川遺跡の始まりと位置付けられよう。縄文時代の遺物は打製石鏃などの出土に留まる。弥生時代前期には、南西部（第10・11次）と中央東部（第1・2次）で前期前葉以降の集落遺構を確認したほか、第16次でも溝を確認したが、これらはいずれも低地に面した台地端部が立地に選ばれている。その後、南西部では中期前葉まで集落と墓地が継続し、北東部では中期後葉までの土器が出土するものの遺構はない。これらの集落では黒曜石製石器の利用が顕著である。第3次で弥生時代中期貯蔵穴と後期の住居・建物を確認しているが、中～後期の遺構はこれまで検出例が少ない。古墳時代に入ると、第1～4次と本道路予定地の調査で前期の集落・墓地を確認しており、台地上に広く遺構が展開している可能性がある。古墳時代中期の遺構・遺物はなく、後期になると再び集落が前期程度の広がりを示すとみられるが希薄である。古代には台地上の各所で溝等の遺構が確認でき、瓦が出土する地点もある。中世前半の遺構は希薄だが、後半になると溝を中心とする遺構が多くみられるようになり、これらは室町期から戦国期の居館に関連する濠と考えられている。



1．五十川遺跡（●は調査地点）、2．久保園遺跡、3．席田大谷遺跡、4．宝満尾遺跡、5．雀居遺跡、6．東那珂遺跡、7．下月隈Ｃ遺跡、8．立花寺Ｂ遺跡、9．井相田Ｃ遺跡、10．那珂君休遺跡、11．板付遺跡、12．板付東遺跡、13．高畑遺跡、14．麦野Ａ遺跡、15．麦野Ｂ遺跡、16．南八幡遺跡、17．諸岡Ａ遺跡、18．諸岡Ｂ遺跡、19．三筑遺跡、20．笹原遺跡、21．山王遺跡、22．比恵遺跡群、23．那珂遺跡群、24．井尻Ａ遺跡、25．井尻Ｂ遺跡、26．井尻Ｃ遺跡、27．寺島遺跡、28．須玖遺跡群、29．弥永原遺跡、30．横手遺跡、31．曰佐遺跡、32．警弥郷Ｂ遺跡、33．野間Ａ遺跡、34．野間Ｂ遺跡、35．大橋Ａ遺跡、36．大橋Ｂ遺跡、37．大橋Ｃ遺跡、38．大橋Ｄ遺跡、39．大橋Ｅ遺跡、40．三宅Ａ遺跡、41．三宅Ｂ遺跡、42．三宅Ｃ遺跡、43．和田田蔵池遺跡、44．和田Ａ遺跡、45．和田Ｂ遺跡、46．野多目Ａ遺跡　※アミは台地・丘陵上の遺跡

Fig. 2　周辺遺跡分布（1/25,000）

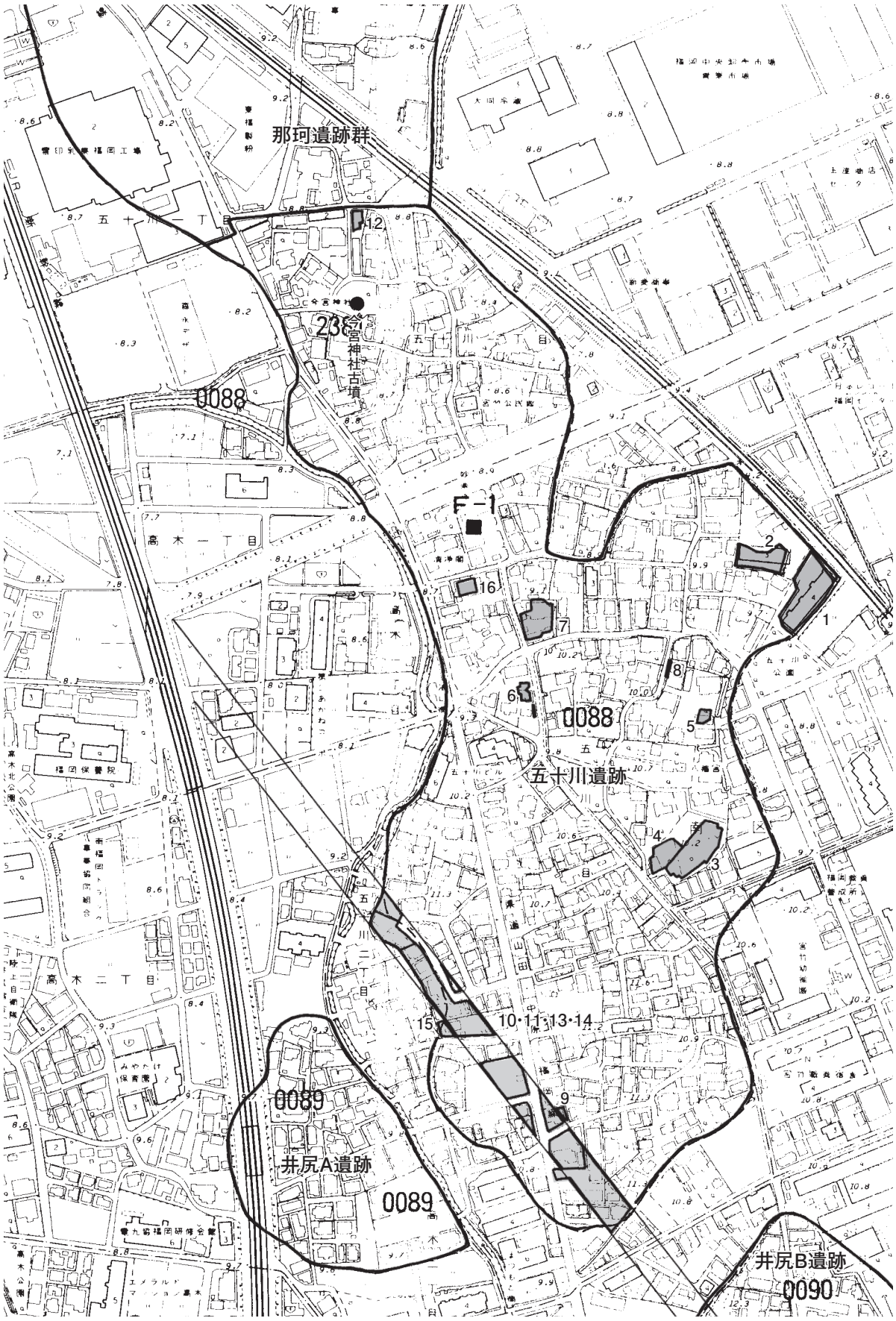


Fig. 3　五十川遺跡のこれまでの調査地点（1/4,000）

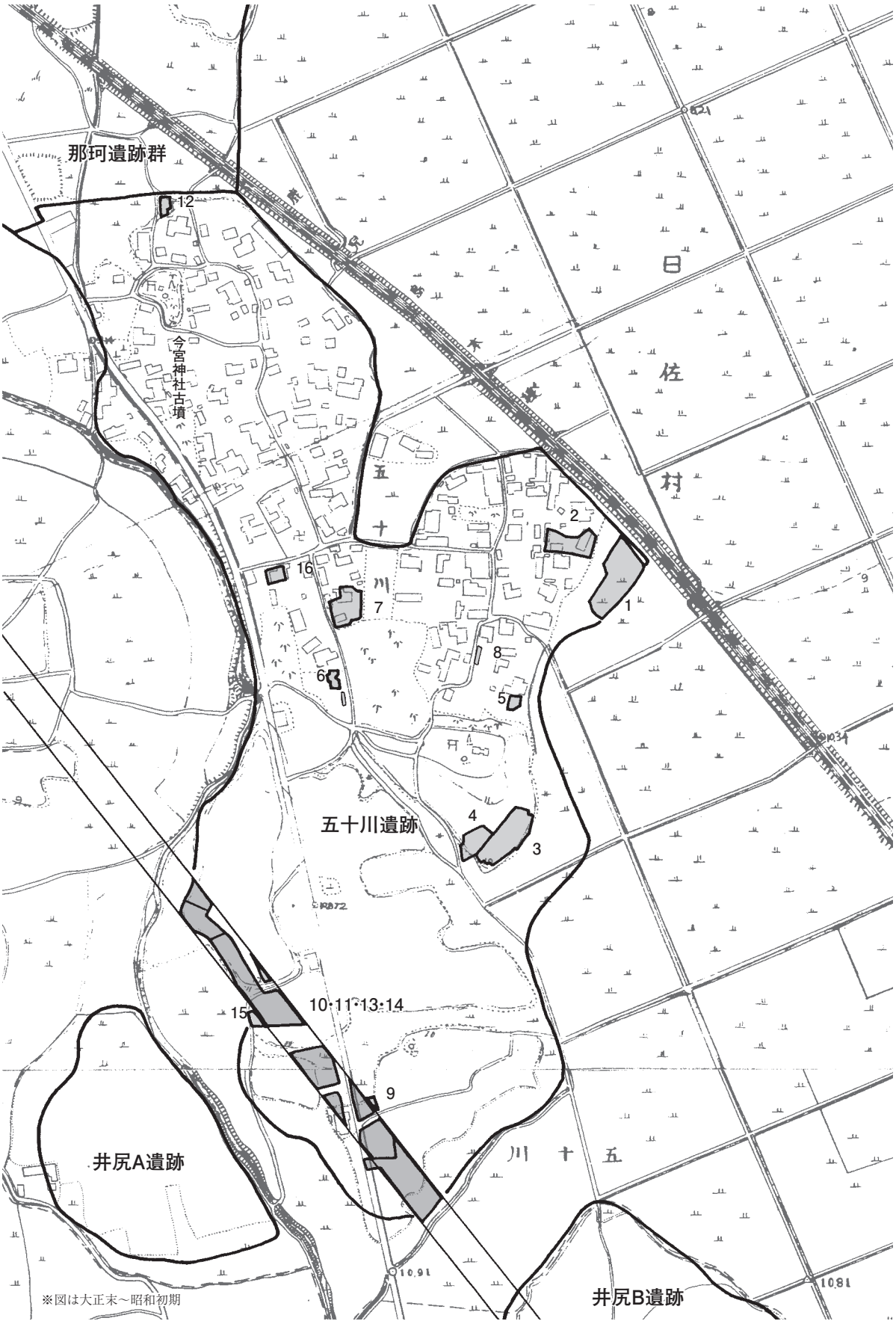
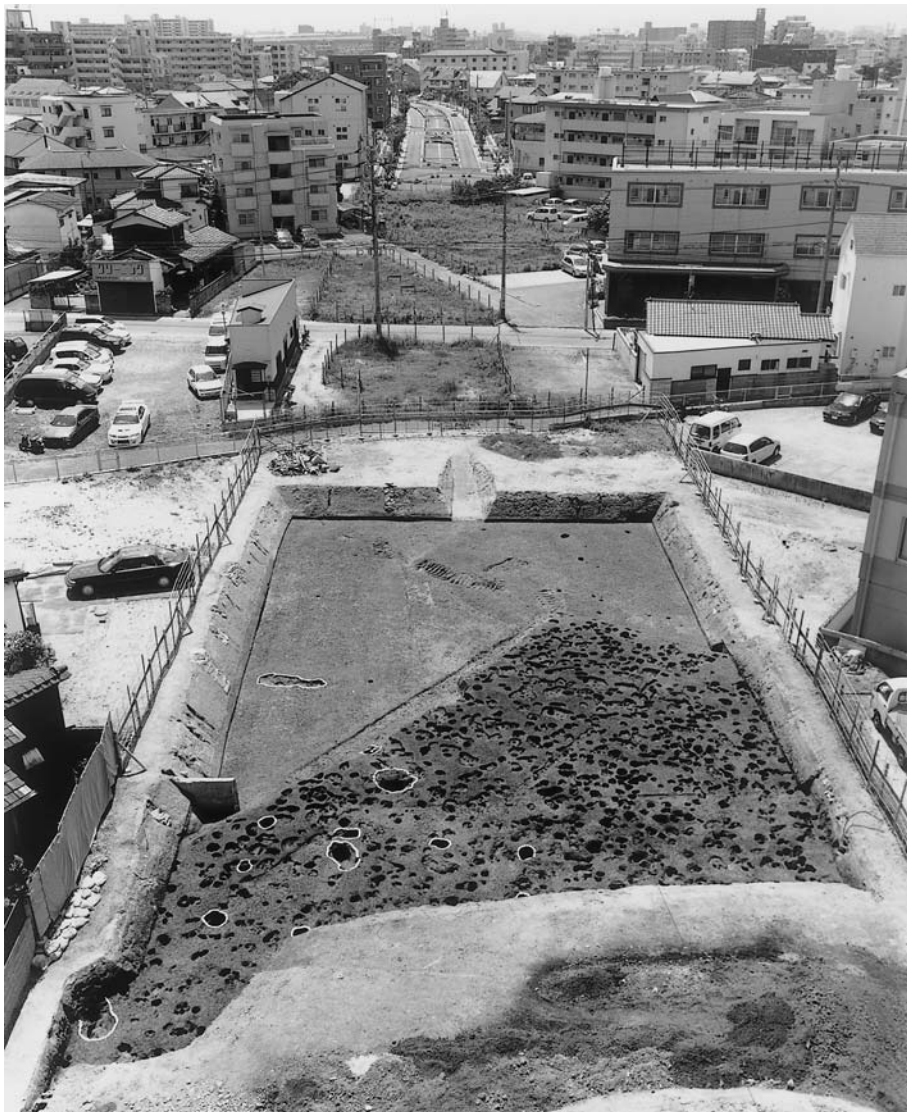


Fig. 4　調査区周辺の古地図（1/4, 000）

Tab. 2　五十川遺跡発掘調査一覧

□は御供所井尻線建設に伴う調査

調査次数	調査番号	調査面積（㎡）	調査期間	主な検出遺構／特記すべき出土遺物	報告書
1	7809	1,449	1979. 1. 22～3. 10	弥生・古墳・古代－溝＋土坑、中世前半－井戸／古代瓦＋黒曜石碁石	市報363集
2	8338	660	1983. 4. 25～6. 18	弥生前末－住居、古墳前期－住居＋井戸、古墳後期－住居、古代－建物＋溝、中世－建物＋溝	市報111集
3	9538	905	1995. 11. 6～1996. 1. 9	弥生中期－貯蔵穴、後期－住居＋建物、古墳前期－土坑、後期－建物、古代－井戸＋土坑＋土壙墓、中世後半－溝＋井戸＋土坑（土坑墓含む）＋建物	市報570集
4	9704	285	1997. 4. 8～5. 6	古墳前期－井戸、中世（14～15c）－溝＋建物＋土坑	市報570集
5	9757	96	1997. 12. 4～12. 11	古墳後期－溝＋住居＋建物	市報720集
6	9835	127	1998. 9. 24～9. 30	古代－建物、近世－土坑	市報720集
7	9837	510	1998. 10. 1～11. 10	古墳－土坑、中～近世－建物＋土坑＋溝	市報720集
8	9846	19	1998. 11. 6～11. 10	時期不詳－土坑	市報720集
9	0215	42	2002. 5. 10～5. 20	弥生－木棺墓、中世－溝＋井戸？／古代瓦	市報793集
10	0229	1,100	2002. 8. 19～2003. 3. 28	弥生前期－住居＋溝＋貯蔵穴＋土坑、中期－住居＋溝、古墳前期－円墳＋方形周溝墓＋石棺墓、後期－住居＋溝、古代－溝＋土壙墓、中世後半－溝＋土坑	市報1019集
11	0314	1,368	2003. 5. 15～2004. 1. 31	弥生前～中期－住居＋溝＋貯蔵穴＋土坑＋木棺墓＋土壙墓＋甕棺墓、古墳前期－住居＋方形周溝墓、後期－土坑、古代－溝、中世後半－建物＋溝＋土坑	
12	0407	150	2004. 4. 5～5. 10	古墳後期－土坑、古代－溝、中世－溝ほか	年報19
13	0444	129	2004. 8. 2～8. 31	古代－井戸、中世後半－溝＋地下式壙＋井戸＋土坑	本　書
14	0481	960	2005. 1. 24～6. 3	先土器－包含層、弥生－貯蔵穴、古墳前期－土坑＋井戸、古代－土坑、中世－建物＋土坑	
15	0610	56	2006. 4. 24～5. 31	弥生－竪穴住居、中世後期－溝ほか	市報978集
16	0766	150	2008. 3. 3～3. 21	弥生－溝、中世後期－溝ほか	未報告



PL. 1　Ⅰ区から井尻Ｂ遺跡方面を望む（北西から）

Fig.5　第10・11・13・14次調査区の位置（1/500）

座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系

第三章　H区の調査

1．　調査の概要　(Fig. 6・7、PL. 2・3)

平成16（2004）年度に第13次調査として実施した調査区で、道路を挟んで南が第10次調査A区、西が同D区である。御供所井尻線建設にかかる五十川遺跡の要調査範囲のほぼ中央部に位置する。

調査に先立って地元住民への挨拶回りを行い、8月2日から重機による表土剝ぎを開始し、2日間を要した。3日には現場養生等の条件整備を行い、翌4日から遺構検出作業を開始した。調査は北側から順次進め、盆休みを挟んで18日に全景撮影を行い、平板測量、遺構実測などの記録作成を含めた全ての調査を20日に終了した。23日に重機で埋め戻した後、出土土器の洗浄作業等の整理作業を行い、8月31日に全ての作業を終了した。

H区は北に尖った三角形をなす調査区で、南北25.5m、東西最大長12mを測る。中央部は隣接店舗への出入り通路を確保する必要から調査ができず、トレンチ調査に留めざるを得なかったため、調査区が南北に二分された。調査区の面積は上端で合わせて202㎡を測る。南と西側は現道路に面しており、東側は新設道路境界である。標高は地表面が10.6～11.0mで、遺構面は南側に比べて北側が60㎝ほど低くなっているが、Fig. 4の古地図からも北側が一段低い水田であったことをうかがうことができる。また、南北調査区間で行ったトレンチ調査で北側へ落ちる段差を確認した。北側の調査区は、遺構面までの深さが1.1m強で、遺構面は八女粘土層が露呈しており強い削平を受けている。遺構面

Fig. 6　第13次調査区（H区）の位置（1/300）

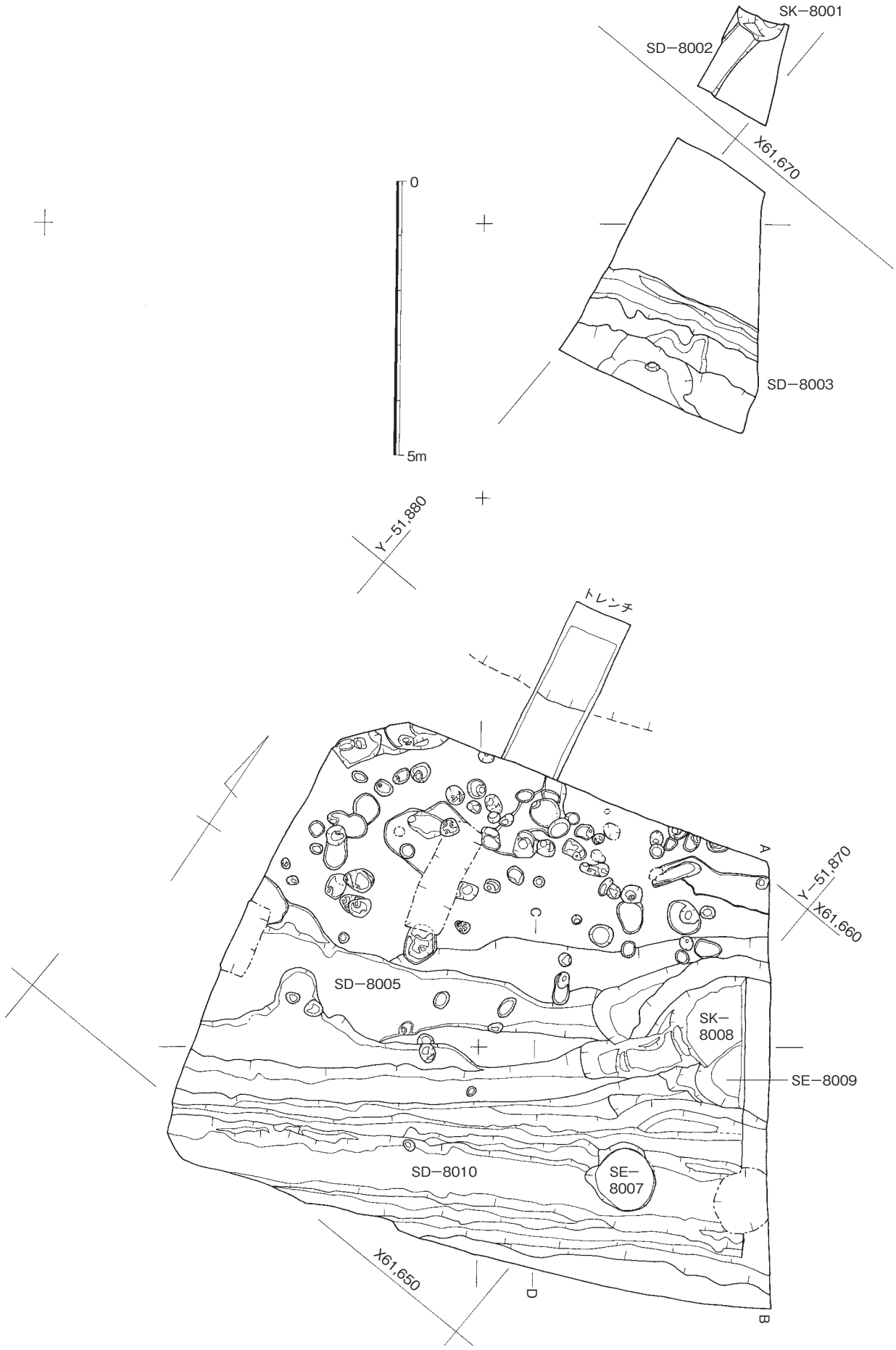


Fig. 7　H区の遺構配置（1/100）

上には厚さ30cmの灰青色粘質土（水田耕作土）が堆積し、これを80cm厚のマサ土が覆う。南側の調査区は、遺構面までの深さが0.5mで、遺構面は暗褐色粘質土の鳥栖ロームとなり削平は少ない。上面には15cm前後の暗褐色粘質土（遺物包含層）と、10cm前後の灰褐色粘質土（畑耕作土か）が堆積し、これを30cm前後の客土が覆っている。

検出した遺構は、古代の井戸１基、中世の溝３条・井戸２基・地下式壙１基で、他に近世以降の溝１条・コンクリート井戸１基がある。また、南側の調査区ではピット少数を確認したが、大半は木根とみられる不整形なもので、掘立柱建物は確認できなかった。出土遺物はコンテナケース６箱。

遺構実測の基準線は予定道路軸線を基準に設定し、後に『博多区・南区内（那珂～井尻地区）遺跡基準点測量委託　四級基準点測量成果簿（平成６年２月）』の成果データから公共座標に位置付けた。

２．検出遺構と出土遺物

⑴　溝状遺構

溝状遺構は４条確認した。SD−8002は遺物が出土せず時期不詳であるが、他の３条は全て中世である。

溝状遺構 SD－8002（Fig. 8）

調査区の北端部に検出した。主軸方位は磁北から6°東偏し、ほぼ南北方向に伸びている。北側は井戸SE−8001に切られ、南側は調査区外へ伸展する。長さ130cmを確認した。幅50cm、横断面形は逆台形で、深さ10cm未満。

遺物が全く出土せず詳細時期不明であるが、井戸SE−8001に先行する遺構である。

溝状遺構 SD－8003（Fig. 8、PL. 4）

北側調査区の南壁際に検出した。東西方向に伸びる溝状の落ち込みで、主軸方位はN－81°－Eにとる。現状で幅２ｍを測るが、底面は南壁に向かって更に落ちており、溝幅は最低でも４ｍを超えよう。北側の溝斜面に幅40cm前後、深さ10cmほどの浅い小溝が併走し、小溝の南側では傾斜が緩く、内側1.4mのあたりから急に落ちる。この深い部分には暗灰褐色粘質土が堆積し、水成堆積層と考えられる。遺構検出面から底面まで60cmで、底面は僅かに東が低いがほぼ平坦で、中央部に深さ10cm未満の浅い窪みがある。Fig. 3の旧地形図にはこの部分は段落ちとなっており、段下は昭和初期まで水田であったとみられる。よって、この溝は段下に掘られた水田水路と考えられる。

SD－8003出土遺物（Fig. 9、PL. 5）

弥生土器、須恵器、土師器（小皿・坏・甕類）、瓦質土器、中国産陶磁器（白磁、明代竜泉窯系青磁、青白磁、陶器）、土製品、石製品、鉄製品が少量出土した。

1は土師器坏の摩滅した小片で、底部糸切りか。淡橙褐色を呈し、胎土精良で雲母粒を含み、焼成やや不良。**2**は青白磁合子身の小片である。胎土は白色で精良磁質、淡い水色透明釉で、体外面のみ施釉する。**3**は明代竜泉窯系青磁碗の小片で、口縁はやや外反し端部は丸くおさめる。胎土は淡灰白色で精良磁質。白濁した淡い緑黄色不透明釉で、釉層が厚い。**4**も明代竜泉窯系青磁碗小片で、口縁内外面に雷文帯が巡る。胎土は灰味を帯びた白色で磁質、緑色の半透明釉をかける。**5**は南宋施釉陶器の鉢で、低い高台が付く小片。胎土は淡橙褐色を呈する。釉は剝落するが、高台露胎。焼成不良。**6**は板状の土製品で、側面は面取りする。摩滅して調整不明。淡灰白色で、胎土に細かい白色砂粒を極く少量含む。きめ細かく、素地土の練りが白色の縞となって残る。焼成良好。

出土した陶磁器からみて15世紀代の溝と考えられる。

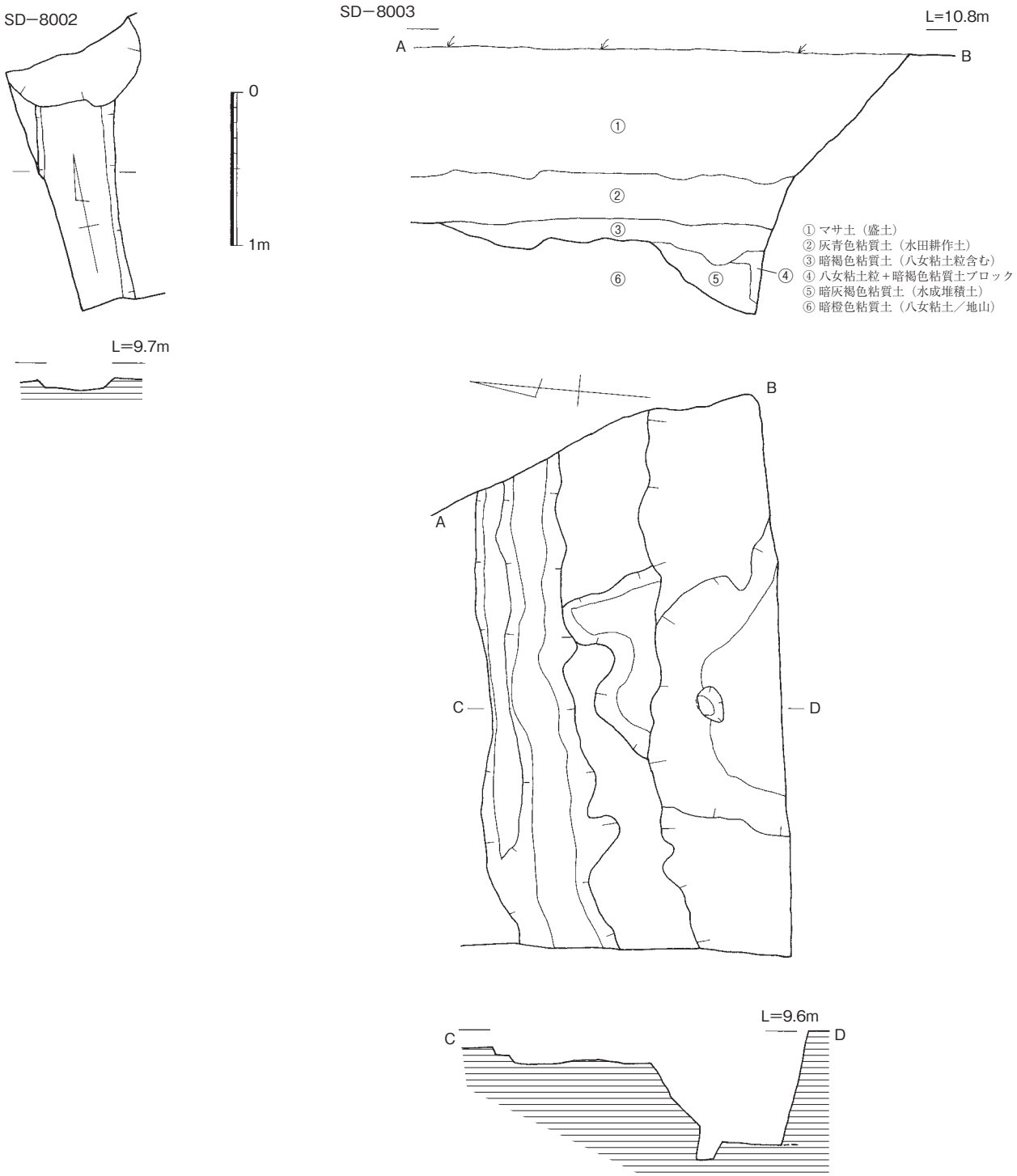


Fig. 8　溝状遺構 SD−8002・8003（1/40）

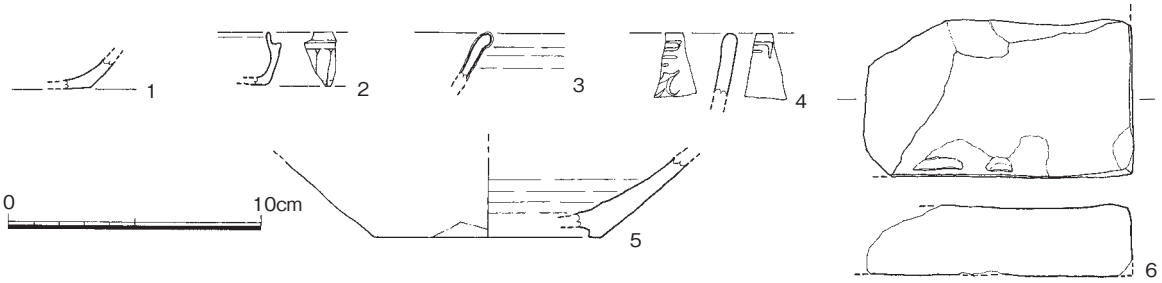


Fig. 9　SD−8003出土土器（1/3）

溝状遺構SD－8005(Fig. 7)

南側調査区の中央部に検出した。東西方向に伸びる浅い溝状遺構である。SD−8010に平行し、覆土も近似しており、落ち際に掘られた附属する溝の可能性が強い。幅0. 6〜1. 5mで、深さ10cm前後と浅い。

SD－8005出土遺物(Fig. 11)

図示した須恵器１点が出土した。**7**は須恵器坏身で、小片のため図の傾きは不確実である。蓋受けの返りはかなり低く退化する。横ナデで受け部に沈線が巡る。淡灰色で、胎土精良、焼成良好。

古墳時代の須恵器のみが出土したが、上に述べたようにSD−8010と同じ中世の溝であろう。

溝状遺構SD－8010(Fig. 7・10、PL. 3・4)

南側の調査区の南半分を占める大溝である。主軸方位は磁北から60° 東偏しており、現在の街区に近い。調査区の半ば以上から溝に向かって緩く落ちており、対岸の南落ち際は調査区外にある。従って上ばの最大幅は７ m以上と計測されるが、正味の溝幅は３ m強で他は溝への緩斜面である。南北壁とも複数の小さな段と斜面をなして落ちていき、溝底は箱状に20〜30cm掘りくぼめて幅80cmほどの平坦面をつくる。遺構検出面から底面まで１ m強を測る。東壁際は家屋が隣接するため引きを取り、段を残して掘削したため土層断面図に一部不連続部分があるが、東壁の北よりの部分には切り合いが認められ、最低一回は掘り直しがあったことを示す。覆土は粘質土主体で、遺構面を覆う包含層が溝上面に落ち込んでおり、埋没後も窪みが残っていたと考えられる。

SD－8010出土遺物(Fig. 11、PL. 5)

弥生土器、須恵器、土師器（小皿・坏・甕類)、瓦質・須恵質土器、瓦、中国産陶磁器（明代白磁、同安窯系青磁、宋〜明代竜泉窯系青磁、陶器)、石製品、鉄滓がコンテナ２箱分出土した。

8〜**10**は土師器甑把手である。把手はヘラ整形、内面ヘラ削り。８は橙褐色で、胎土に細砂粒を含み、焼成良好。９は黒色で、細砂粒・雲母粒を含み、焼成良好。10は淡橙褐色で、胎土精良、焼成やや不良。**11**は土師器小皿。小片で摩滅する。底部糸切り。淡橙褐色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。**12**も土師器小皿で、底部糸切り。内面にロクロ目が残る深めの器形で、大内系土師器か。淡橙褐色、胎土精良、焼成良好。**13**は土師器坏の小片。摩滅しており、底部切り離し手法は不明。

14は東播系須恵器鉢の口縁部で、断面三角形に肥厚する。小片。横ナデ調整。灰青色で、胎土に細砂粒を少量含み、焼成良好。**15**は瓦質土器鉢の小片。口縁が肥厚する。外面は指押さえ→縦刷毛目→工具によるナデ→口縁横ナデ。内面は横〜斜の刷毛目。淡灰青色で、細砂粒を少量含み、焼成良好。**16**は瓦質土器鉢の口縁部小片。摩滅が著しく口縁内面に刷毛目が若干残るのみ。淡黄褐色、細砂粒を少し含むが精良で、焼成良好。**17**も瓦質土器鉢で、底部小片。摩滅するが内面工具によるナデ。淡黄灰色、胎土精良で暗赤色粒を含み、焼成良好。**18**は瓦質土器深鉢で、球形体部に直立する口縁が付く。外面は胴が幅広の工具によるミガキ、口縁横ナデ。内面は胴ヘラ削り、口縁刷毛目の上からミガキ。

19は明代白磁端反り皿。胎土は白色で精良磁質。やや水色がかった半透明釉を全面に施し、畳付を釉剝ぎする。**20**は白磁皿の小片。内面に圏沈線が入る。胎土は白味の強い淡黄白色、精良で軟陶質。青味のある乳白色不透明釉で全釉。朝鮮王朝陶磁器か。**21**は同安窯系青磁碗の小片。体内面に圏沈線が入る。胎土は淡灰褐色で精良磁質。淡いオリーブ色の透明釉を施す。**22**は明代竜泉窯系青磁碗か。底部残欠で、体外面に蓮弁文、見込みに印花文を施す。胎土は灰味を帯びた白色で精良磁質。淡青灰色透明釉で、畳付から外底は露胎。外底に径2. 7cmの円形の窯具痕が残る。**23**は明代竜泉窯系青磁碗の底部片。見込みに印花文を入れる。胎土は淡灰白色で、精良磁質。淡い灰青色不透明釉で、全面施

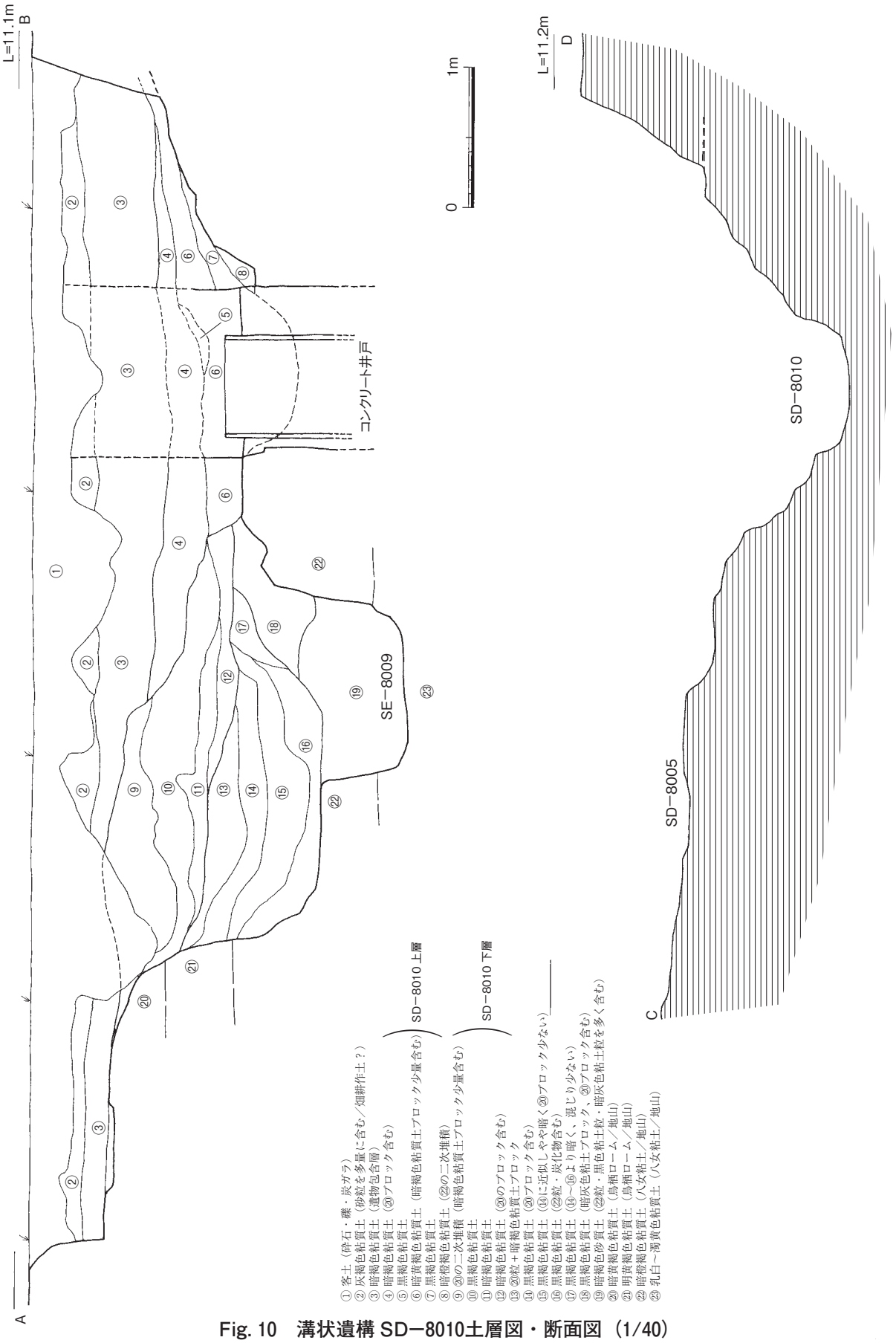


Fig. 10　溝状遺構 SD−8010土層図・断面図（1/40）

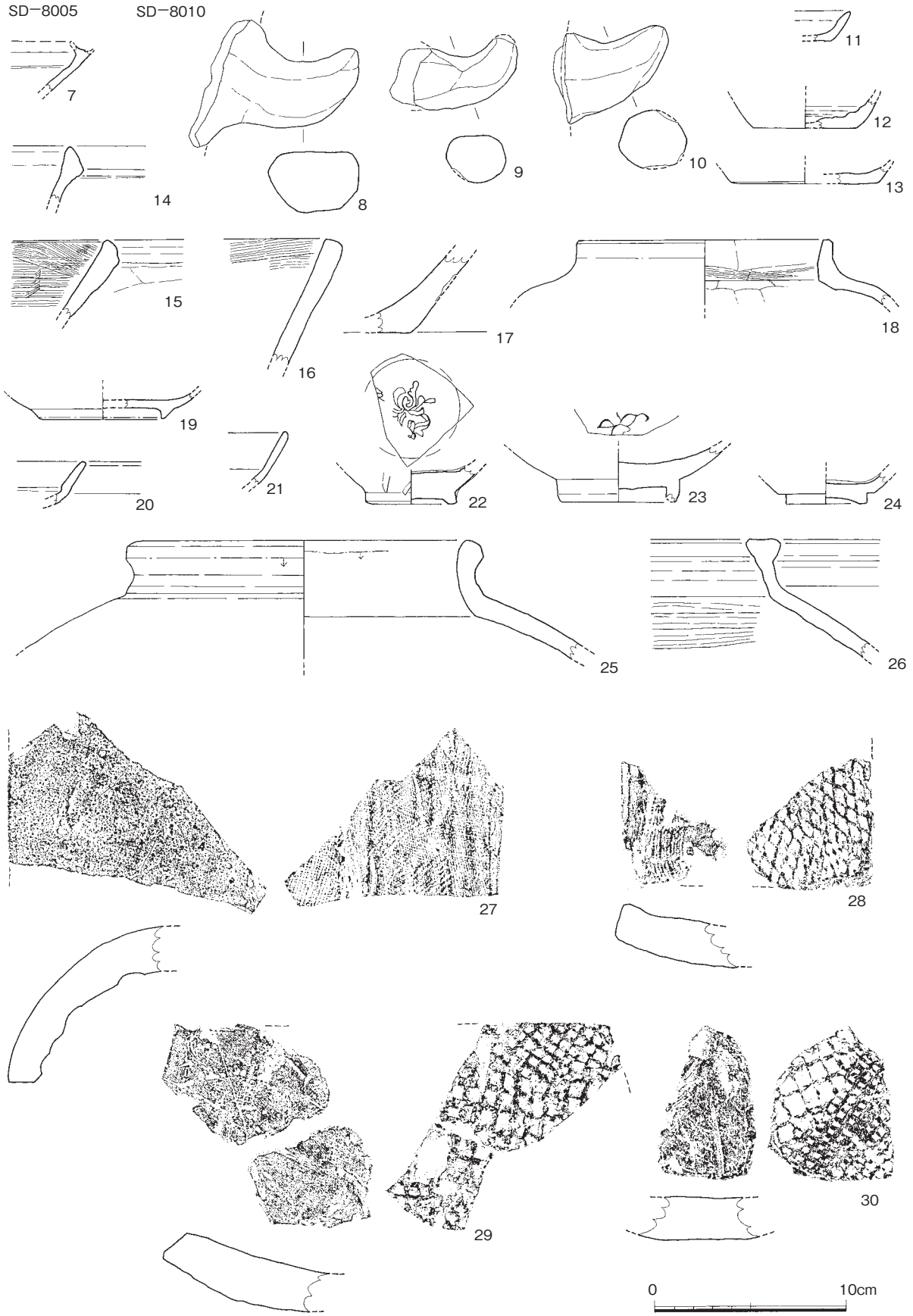


Fig. 11　SD−8005・8010出土土器（1/3）

釉後、外底を輪状に釉剝ぎする。焼成不良。**24**は禾目天目碗で、底部小片。明瞭な高台ではなく、アーチ状に凹む。胎土は淡灰白色で夾雑物を含まないが粗く、硬陶質。内面に黒色不透明釉が厚く掛かる。**25**は陶器壷で、備前焼か。口縁が短く立ち、端部は肥厚する。胎土は赤味がかった淡灰褐色で、細かな白色砂粒を多く含み、粗い。焼成良好で、よく焼締まる。外面から口縁内面に降灰があり、胴内面にも灰が散る。**26**は中国産施釉陶器か。壷の口縁部小片で、口縁は短く内傾し、端部を内外に肥厚させて面取りし、平坦面とする。内面は板状工具によるナデ調整か。胎土は暗赤褐色で、暗赤色細粒を少量含み、きめが細かい。淡黄緑色の不透明釉が内外に掛かるが剝落する。焼成良好。

27は丸瓦小片で、凹面に竹状の模骨痕と粗い布目痕が残る。凸面は丁寧なナデ。側面は面取りする。黒色で、胎土に細砂粒を少量含み粗く、焼成良好で須恵質。凸面に降灰がある。**28**は平瓦小片。凹面は布目痕の上からヘラ削りを加え、凸面は斜格子タタキ。側面は面取り。灰青色で、細砂粒を少し含み、焼成良好で須恵質。**29**も平瓦片。凹面は布目の上からヘラ削り、凸面は大小２種類の格子タタキがあり、大格子は不鮮明である。側面は面取り。灰青～灰黒色で、細砂粒を少量含み、焼成良好で瓦質。**30**も平瓦小片。凹面は模骨痕が僅かに残るが摩滅しており、凸面は大小２種類の格子タタキで、大→小の順に施す。灰青色で、砂粒はほとんど含まず、焼成不良だが一部が須恵質をなす。

中世後半期の溝である。少なくとも15世紀以降で、16世紀まで下ろうか。

⑵　井戸状遺構

井戸状遺構SE－8001（Fig. 12、PL. 4）

調査区の北端に検出した。溝状遺構 SD−8002を切る。調査区北壁にかかっており全体の約1/2を調査した。現状で楕円形プランを呈し、長径90㎝を測る。断面逆台形をなすが底面は東へ偏っており、西壁はテラス状をなす。検出面からの深さは90㎝で、底面のレベルは標高8.7m。井戸と報告したが、土坑もしくは柱穴の可能性もある。

SE－8001出土遺物（Fig. 13）

弥生土器、須恵器、土師器、須恵質土器、石製品が少量出土した。

31は須恵器坏蓋の小片である。端部は下に折れ、断面三角形をなす。赤味のある灰色で、胎土精良、焼成良好。**32**は東播系須恵器片口鉢で、口縁部小片。端部が内屈肥厚する。体部内面が使用により摩滅する。灰青色で、胎土に細砂粒を少量含み、焼成良好。口縁外面から体内面に降灰を被る。

中世後半の遺構であろう。

井戸状遺構SE－8007（Fig. 12、PL. 4）

溝 SD−8010に重複する井戸である。最終的には SD−8010の底面で平面を確認したが、溝の掘削中からこの部分の覆土が軟弱で陥没がみられた。底面まで非常に深く、途中で掘削を断念した。プランは円形で、径1.1m前後である。遺構面の標高は10.4mで、7.5mまで人力で掘削し、最終的に6.35mまで重機で掘り下げたが底面に到らなかった。従って、遺構検出面からの深さは４ m以上となる。井戸側は確認していない。覆土は溝 SD−8010に近似する。

SE－8007出土遺物（Fig. 13、PL. 5）

弥生土器、須恵器、土師器、瓦、中国産白磁、石製品が少量出土した。

33は弥生土器甕の底部片である。脚状に分厚く、外底が窪む。摩滅して調整痕は残らない。橙褐色で、細砂粒を多量に含み、焼成やや不良。**34**は土師器甑把手で、摩滅するが外面ヘラ整形。先端部を欠く。橙褐色で、粗大石英粒等径３㎜以下の砂粒を少量含み、焼成良好。**35**も甑把手で、摩滅するが

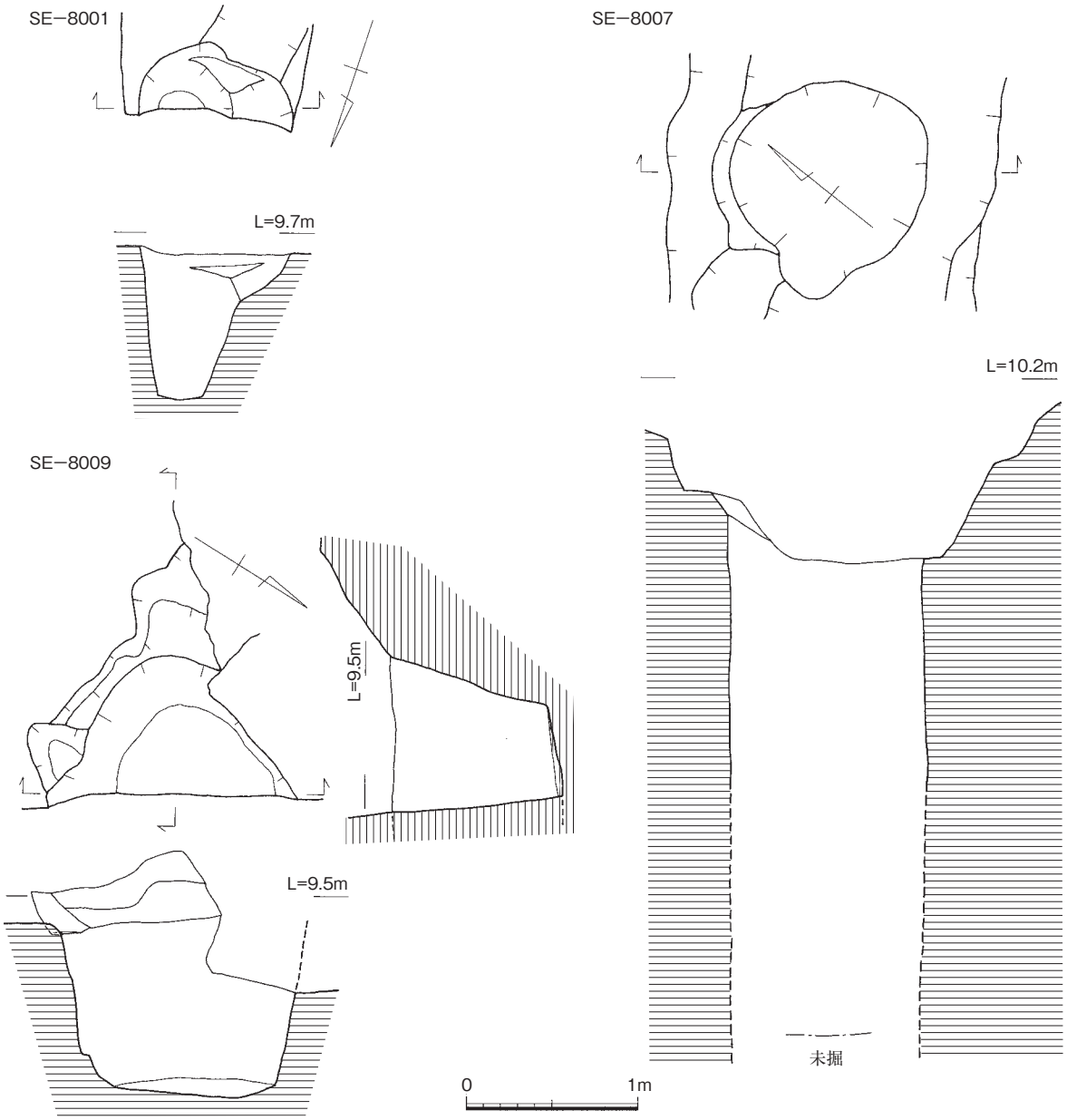


Fig. 12　井戸状遺構 SE−8001・8007・8009（1/40）

外面ヘラ整形。橙褐〜灰褐色で、細砂粒・雲母粒を含み、焼成不良。**36**も甑把手で、かなり扁平である。摩滅して調整不明。橙褐色で、径３㎜以下の砂粒と雲母粒を含み、焼成良好。**37**は白磁で、口禿碗の小片。胎土は白色で精良磁質。やや緑味を帯びた乳白色不透明釉をかけ、口唇部を釉剝ぎする。

38は平瓦の小片。凹面に竹状の模骨痕と布目痕、紐の圧痕が残り、縁辺部はヘラ削りする。凸面はナデ消しており、タタキは不明。側面は面取りする。灰黒色で、細砂粒を多量に含み、焼成良好で須恵質をなす。**39**も平瓦小片。凹面はヘラ削りし、布目痕は残らない。凸面は斜格子タタキ。灰黒〜黒色をなし、細砂粒・白色粒を含み、焼成不良で歪みがある。

40は滑石製石鍋で、横鍔が付く。鍔以下に煤が付着する。小片のため不正確だが復元口径32.6㎝。

出土遺物は少ないが溝 SD−8010より古く、口禿白磁からすれば13世紀〜14世紀前半頃か。

井戸状遺構SE−8009（Fig. 12、PL. 4）

中世の地下式壙 SK−8008の底面で確認した古代の井戸である。SK−8008及び上面の溝 SD−8010の

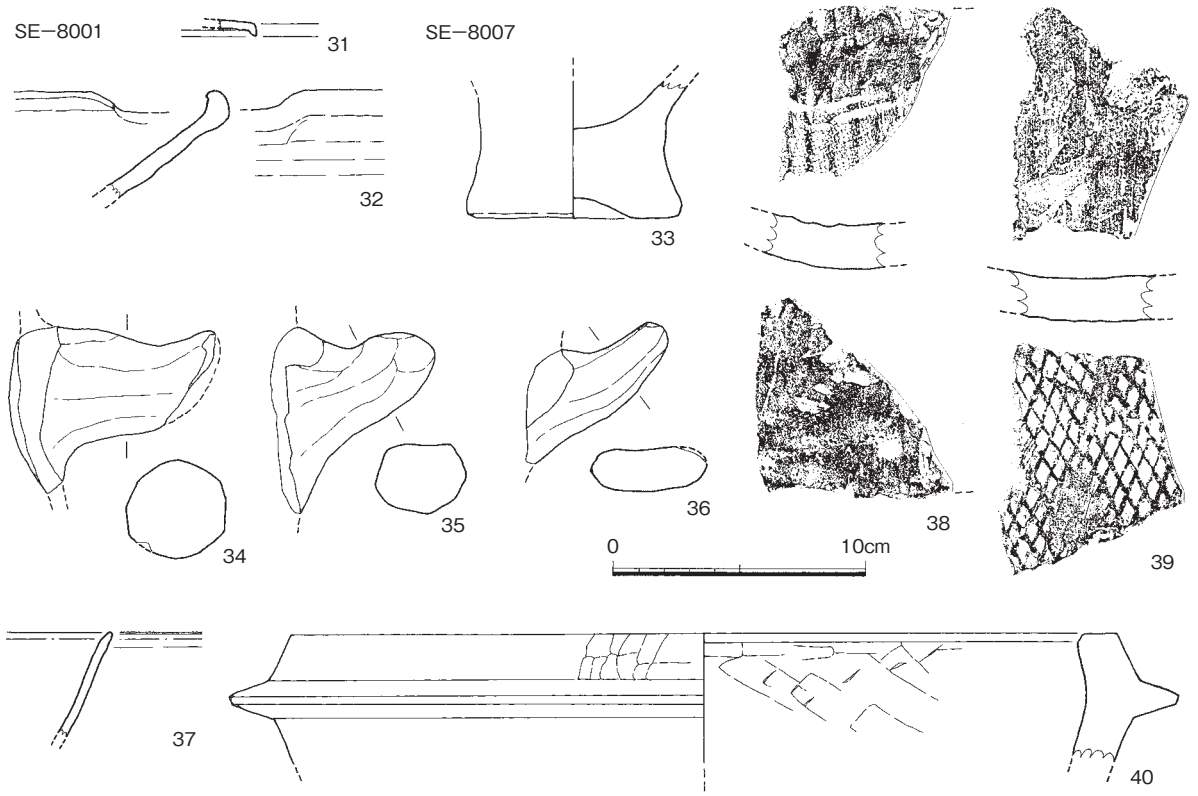


Fig. 13　SE−8001・8007出土土器（1/3）

ため残りが悪い。調査区東壁際に位置し、壁面保護のため段を設けて掘り下げたため、約 1/2 は調査不能である。現状で楕円形プランをなし、径は1.5m 以上となろう。断面逆台形をなし、乳白色の八女粘土層に達したレベルまで掘削を行っている。遺構上部の残りが悪いが、底面までの深さは2.1m となる。底面の標高は8.3m で、湧水はない。

SE−8009出土遺物(Fig. 14、PL. 5)

土師器、須恵器がコンテナ１箱出土した。

41は須恵器の平瓶で、把手と口縁の一部を欠くが、ほぼ完存する。体部は円形扁平で、断面逆台形をなす。上面は少し膨らみがあり、縁辺に寄せて口縁を取り付け、他方には断面楕円形の橋状把手を付ける。上面に４条の沈線が同心円状に巡る。平底で、外底はヘラ切り後、板状工具による粗いナデ調整を加えるが、指押え痕が残る。

42は土師器甕で、口縁部と底部は同一個体だが接合しない。口縁は「く」字形に強く屈曲して開き、丸底。胴外面は摩滅するが縦刷毛目調整。胴内面ヘラ削りで、内底ナデ。口縁横ナデ仕上げ。橙褐色で、径３㎜までの砂粒を多量に、雲母粒を僅かに含み、焼成不良。**43**も土師器甕。頸部と底部があるが接合しない。口縁の屈曲は緩く、底部は分厚い丸底。胴外面縦刷毛目、外底ナデ。胴内面ヘラ削り、内底ナデ調整。口縁横ナデ仕上げ。外面淡褐色、内面淡灰褐色。胎土に径４㎜までの砂粒を多量、雲母粒を僅かに含み、焼成良好。胴外面に黒斑がある。**44**は土師器甕の頸部から底部の破片で、扁平な丸底。外面は胴が縦～斜の刷毛目、頸部が横ナデ。内面ヘラ削り。暗橙褐～黒色で、径４㎜までの砂粒をかなり多く含む他雲母粒を含み、焼成不良。**45**は土師器甑で、口縁部と把手の付いた胴部があり、同一個体だが接合しない。口縁は丸く屈曲して開き、なで肩。把手は牛角状に強く反る。胴外面縦刷毛目、内面ヘラ削り、口縁内外を横ナデ調整仕上げ。橙褐色、細砂粒・雲母粒を含み、焼成良好。

奈良時代の井戸であろう。

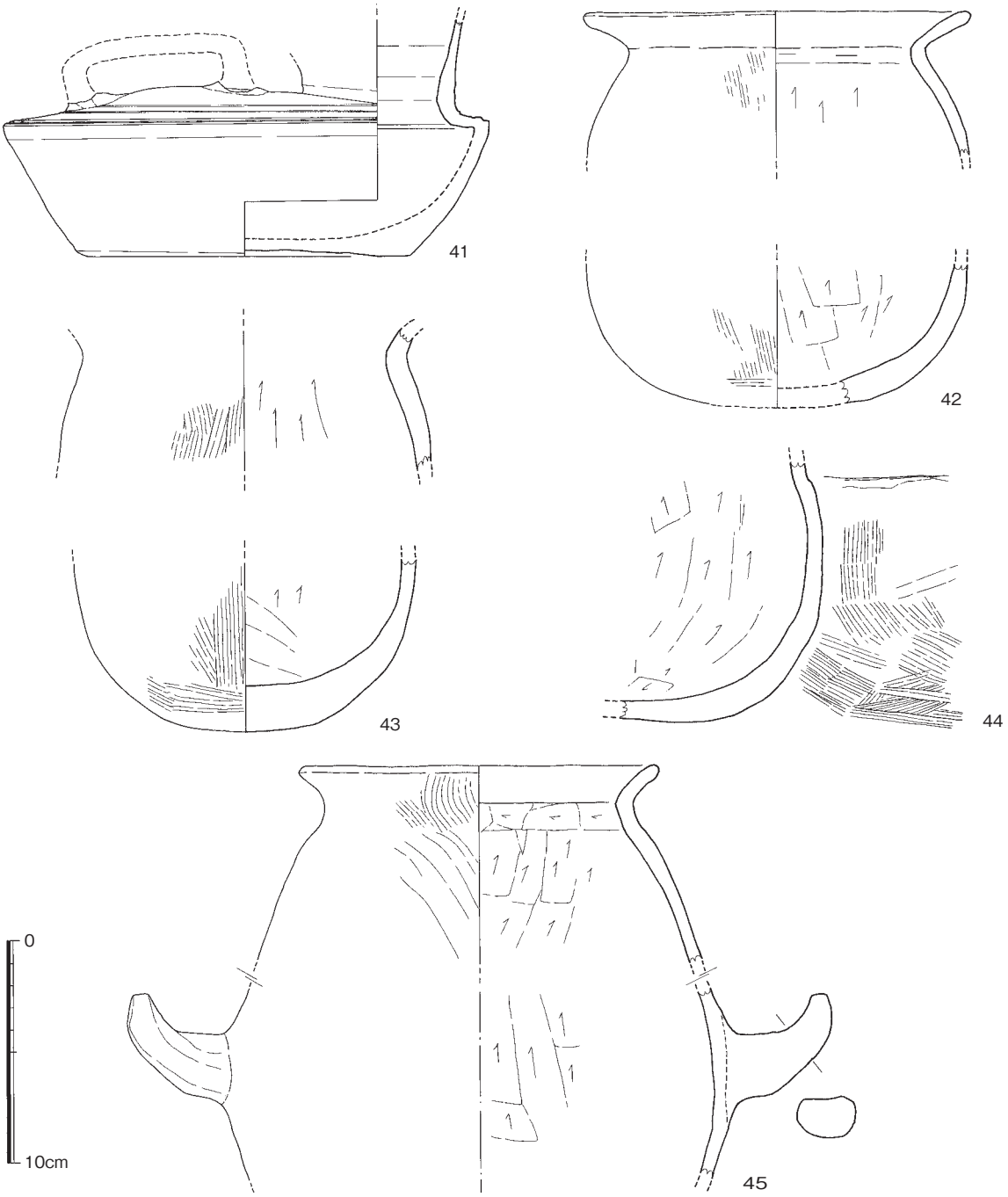


Fig. 14　SE－8009出土土器（1/3）

(3)　地下式壙

地下式壙SK－8008（Fig. 15、PL. 4・5）

南側の調査区の東壁際に検出した。中世の地下式壙とみられる遺構である。埋没後に溝 SD−8010に切られている。調査時に古代井戸 SE−8009を同一の遺構として掘り下げたため、南東部の形状は明確でない。主体部は径2.5m 前後の楕円形プランをなそう。遺構検出面からの深さは1.5m を測り、底面は平坦である。西壁に出入り施設とみられる隅丸長方形の遺構が取り付いており、長2.0m、幅0.7mで、断面逆台形をなす。底面は本体部に向かって段状に下降しており、底面長1.6mの中に４段を設けて約30㎝降下し、最下段から約20㎝降りて底面に至る。覆土は暗褐色粘質土が主体で、自然に埋没した状況を示している。あるいは溝 SD−8010掘削時に天井が削り取られたのであろうか。

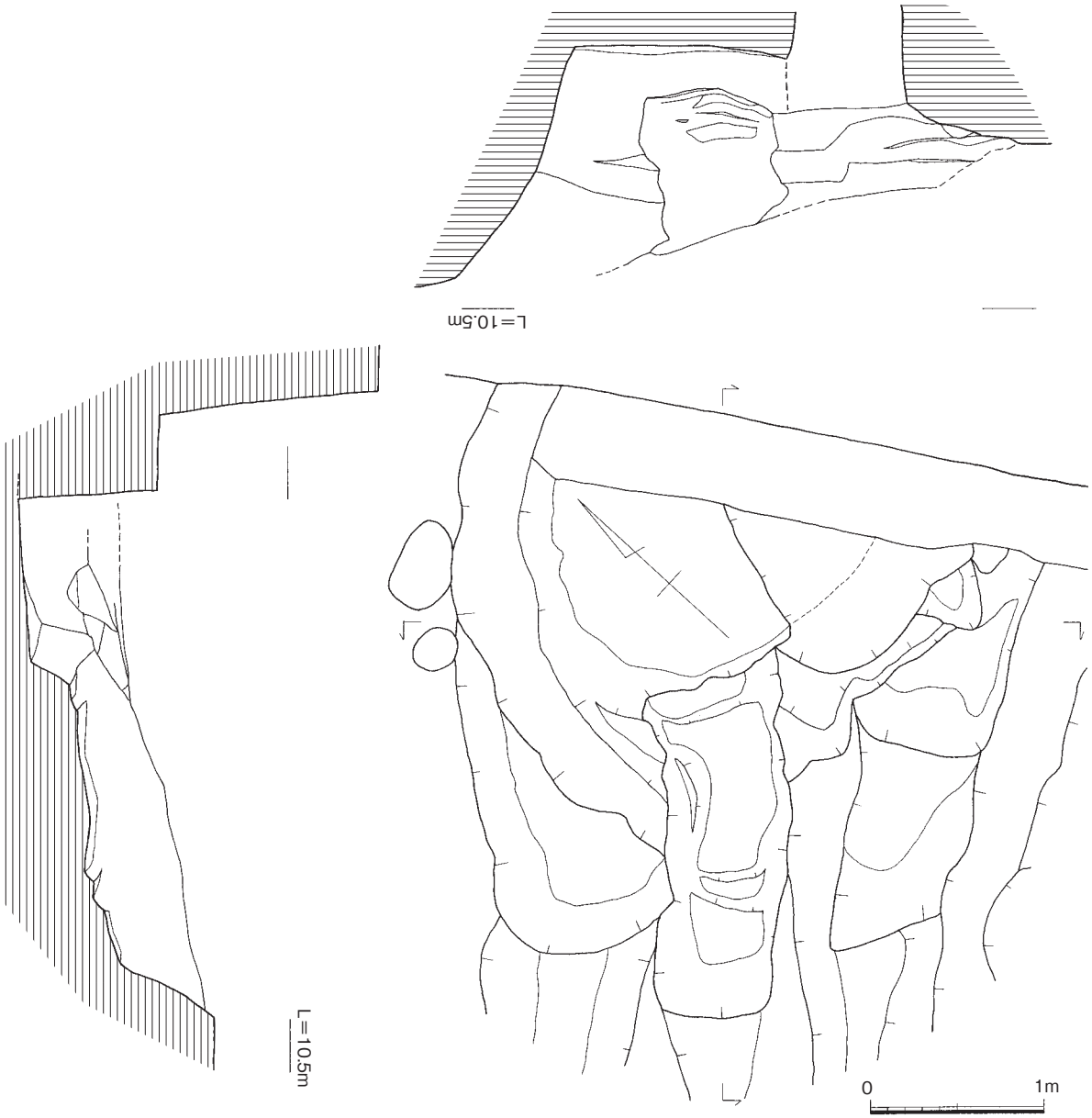


Fig. 15　地下式壙 SK－8008（1/40）

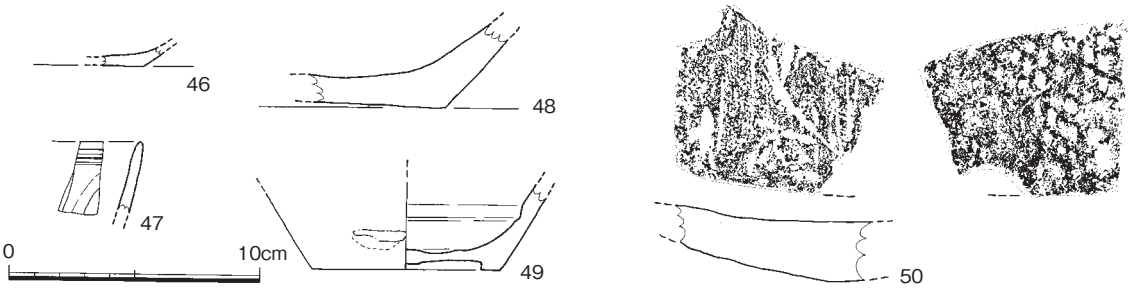


Fig. 16　SK－8008出土土器（1/3）

SK－8008出土遺物(Fig. 16)

弥生土器、土師器（小皿・坏・甕類）、須恵器、土師質土器、中国産陶磁器（南宋竜泉窯系青磁、陶器）、瓦、石製品が少量出土した。

46は土師器小皿か。小片で摩滅するが、底部糸切りか。橙褐色で、細砂粒を含み、焼成良好。

47は南宋竜泉窯系青磁碗の小片。内面に劃花文を施す。胎土は淡灰白色で精良磁質、オリーブ色透明釉を全体に施す。**48**は中国産施釉陶器鉢の底部小片で、平底。胎土は橙褐色で、細い白色砂粒を多く含み、きめが粗い。釉は剝落するが、外底露胎。内面は使用により摩滅する。焼成不良。**49**は中国産施釉陶器壷の底部小片。底部回転ヘラ削り。胎土はあずき色で精良、硬陶質。緑味のある灰白色不透明釉を全釉し、高台畳付は釉剝ぎ。胴外面の底部近くに白色の目土が付着する。

50は平瓦の小片で、摩滅が著しい。凹面は布目痕の上からヘラ削り、凸面は斜格子タタキ。側面は面取りする。灰青色で、径２㎜以下の白色粒を多く含み、焼成良好で瓦質。

中世後半の地下式壙で、溝 SD－8010より先行しよう。

⑷　その他の出土遺物(Fig. 17・18、PL. 5)

51は須恵器坏蓋で、小片のため図の傾きは不確実。端部は丸い。灰黒色で胎土精良、焼成やや不良。**52**は須恵器坏身で、小片のため図の傾きは不確実。蓋受けの返りは短く内傾する。灰青色で白色粒を少量含み、焼成良好。外面に降灰がある。**53**は須恵器高台付き坏の小片。高台はやや高く、断面方形をなす。黒色で胎土精良、焼成良好。**54**は須恵器高坏の脚片。縦長の透孔が三方に入るが、貫通しな

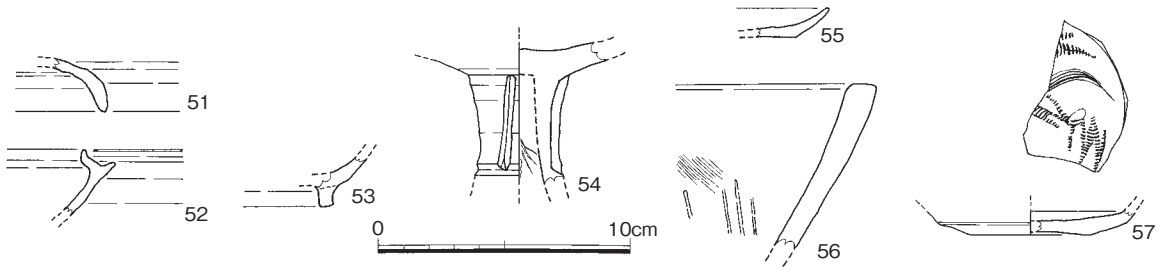


Fig. 17　その他の出土土器（1/3）

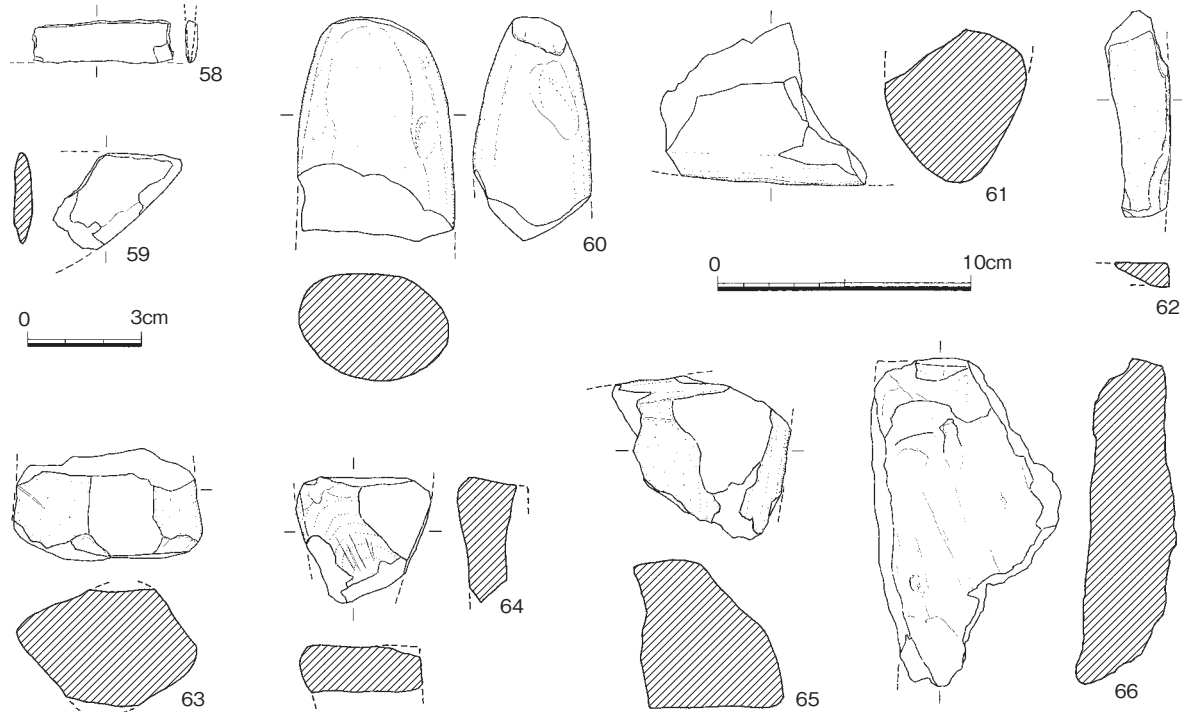


Fig. 18　H区出土の鉄製品・石器（58・59は1/2、他は1/3）

い。透孔下に沈線が巡り、長脚二段透孔となろう。外面淡灰青色、内面灰青色。胎土精良、焼成不良。**55**は土師器小皿で、小片で摩滅しており底部切り離し手法は不明。橙褐色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。**56**は瓦質土器スリ鉢の小片。摩滅が著しく、内面に刷毛目とスリ目が僅かに残る。淡橙褐色で径４㎜までの砂粒を含み、焼成良好。**57**は同安窯系青磁皿の底部片である。胎土は淡灰白色を呈し精良磁質、淡オリーブ色ガラス質透明釉を全釉し、外底の釉は掻き取る。51～56は攪乱坑SK−8004から、57はコンクリート現代井戸SE−8006から出土した土器である。

58は鉄製品で、刀子の一部か。刃部のみ残る。SD−8003出土。**59**は石庖丁片であろう。砂岩系の石材を用いた残欠である。SD−8010出土。**60**は磨製石斧で、基部のみの残欠。今山産の玄武岩質安山岩製。SK−8008出土。**61**は扁平円礫の一部で、下端に磨った痕跡があり、磨石か。SD−8010出土。**62**は砥石の一部で、上面と右側面が使用により磨れており、他は割れている。頁岩製で、風化が著しい。SK−8008出土。**63**は扁平な六角柱形の砥石の一部であろう。表裏面は剝落しており、他の四側面に使用した研磨痕が残る。砂岩系石材を用いる。SD−8010出土。**64**も砥石で、正面と右側面を使用する。正面は使用により窪み、刃物傷が残る。硬質砂岩製。SD−8010出土。**65**も砥石片。正面と右側面に使用痕があり、上面は自然面である。硬質砂岩製。SD−8010出土。**66**は滑石片である。上面を加工して面取りする。左側面も面取りするが、不整である。未製品または何らかの素材か。SE−8007出土。

３．小結

Ｈ区は現道路に囲まれた三角形の狭い調査区で、中央部分は店舗への出入り口を確保する必要からトレンチ調査に留めざるを得ず、調査区が南北に分かれた。南と北の調査区では遺構面に0.9mのレベル差があって北側が低くなっており、南北間にトレンチを設けて落ち際を確認した。大正末～昭和初期の地図（Fig.4）を見ると、ここに水田の段差が記されており、本来北側へ下がっていた自然地形に手を加えて水田を造ったものと考えられる。ただし、道路を挟んだ西側の第10次調査Ｄ区では北側の遺構面がやや低いが顕著な段差は認められず、西側では段の比高差が小さくなっていくと想定される。

検出した遺構は奈良時代の井戸１基と、中世後半の溝３条・井戸２基・地下式壙１基である。うち中世井戸SE−8007は他の中世遺構よりやや古く位置付けられる。遺物が出土せず時期不詳のSD−8002は、削平により残りが悪いが断面逆台形をなし、他の遺構に切られており古い。西側Ｄ区では弥生時代前期の溝SD−4004を検出しているが、断面逆台形で溝底のレベルが近似しており（報告書ではSD−4004のレベルにH=9.50mとあるがH=10.5mの誤り）、一連の溝である可能性も考えられる。

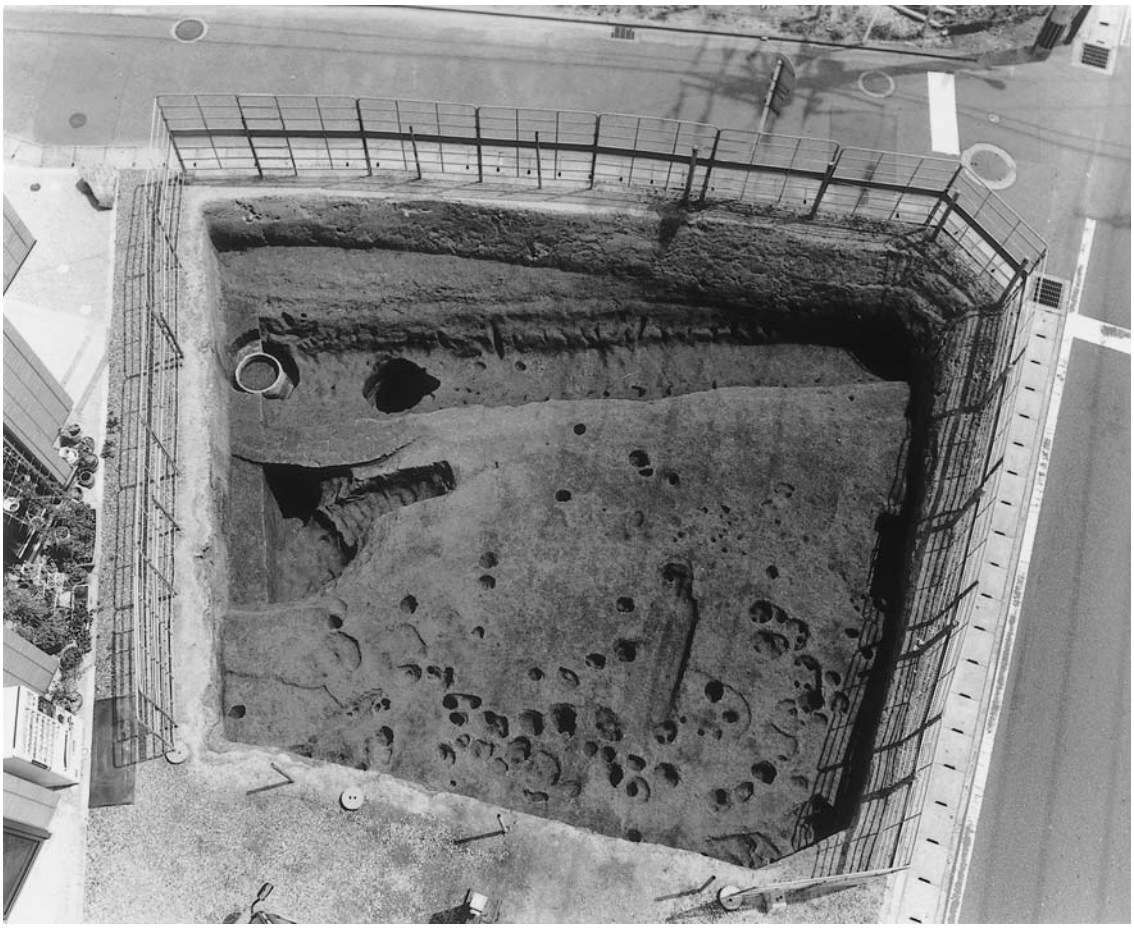
本次調査の主体をなすものは中世遺構、特に大溝SD−8010である。溝幅３ｍ強で、断面逆台形、深さ１ｍ強。東隣の第９次調査SD−01、及び道路を挟んで西側に隣接するＤ区のSD−4012に連続し、東西に長く伸びる溝と考えられる。Fig.4の古地図には、この溝の痕跡が道となって残っている。五十川遺跡では他の調査区でも当該期の溝を多数確認しており、特に第10次・11次調査では台地縁に沿って南北77m以上、東西20m以上にＬ字形に巡る溝と、これと陸橋を挟んで南北に伸びる大溝、及びこの陸橋に進入していく道路状の溝などを確認している。これらの溝は15～16世紀頃のものと考えられるが、出土遺物が極端に少なく、詳細な時期を把握しづらい。今回の溝はこのＬ字溝の南約110mに位置し、これらと同様、中世後期に台地全域に掘り巡らされた堀の一部と考えられられる。また、北側に検出した溝SD−8003は段直下を巡る水路の可能性があり、Ｄ区の溝SD−4003あるいはSD−4002に連続しよう。

PL. 2

1．H区全景（南から）

2．H区北半部（南から）

PL. 3



1．Ｈ区南半部（北から）

2．溝 SD－8010東壁土層（西から）

1．溝 SD−8003土層（西から）

2．溝 SD−8010（西から）

3．井戸 SE−8001（南から）

4．井戸 SE−8007（東から）

5．井戸 SE−8009（北西から）

6．井戸 SE−8009・地下式壙SK−8008（北西から）

1．地下式壙 SK−8008（北西から）

2．H 区出土遺物（縮尺不同）

第四章　Ⅰ区の調査

1．調査の概要　(Fig. 19～21、PL.6)

Ⅰ区は都市計画道路御供所井尻線予定地にかかる五十川遺跡の南端部に位置する。北側は第10次調査のＡ区と接し、南側は浅い谷部を挟んで井尻Ｂ遺跡が位置する。南北に細長く、排土処理の関係から中央で二分して調査を行った。調査に先立つ地元説明と現地協議を平成17年１月19日に行い、まず北半部分の表土除去を１月24日～27日に行い、４日間を要した。北半部の調査は３月30日で終了し、31日から埋め戻しと南半部の表土剝ぎを４月８日までの６日間で行った。４月11日より遺構確認作業を開始し、５月10日に全景撮影。遺構実測後、地山ローム層を対象に旧石器時代の調査を行い、５月23日から埋め戻しを始め、27日に終了した。その後、６月３日まで調査事務所等の撤収作業を行った。なお、この間の４月25・26日には調査を一時中断し、福岡城肥前堀第７次調査を行った。

Fig. 19　第14次調査区（Ⅰ区）の位置（1/300）

道路予定地は幅22mであるが、隣地との間に引きを取ったため調査区の東西幅は約19mである。南北長は50.4mを測り、北端はA区と重複させて調査した。北西部は現道路への取り付き部分があるため、一部が西へ突出した形状をなす。地表面の標高は11mでほぼ平坦だが、遺構面は南へ緩やかに下っており、標高10.6～10.2mを測る。遺構面までの深さは、北端では50cmと浅いが、南半部では140cmと深い。地山は鳥栖ロームで、南半部は開田により削平されて0.6mの段差があり、遺構はほとんど残っていない。この段落ちは削平を受けているとはいえ、本来段丘崖であったものが後世の改変を受けたものと考えられる。鳥栖ロームの直上を黒色粘質土が覆うが遺物はほとんど含まない。調査区内には畑耕作によるとみられる深耕溝が南北方向へ走っていたが、遺構面の残りは良い。当初は南側の水路までの1,200㎡を調査対象としていたが、調査に先立ってトレンチを入れたところ、低地部分には遺構がほとんど認められないため調査区を縮小し、960㎡の面積に留めた。

検出した遺構は、掘立柱建物３、井戸１、貯蔵穴１、土坑13、及び倒木痕と無数の木根痕である。貯蔵穴は弥生時代かと思われるが疑問が残る。井戸１と土坑８は古墳時代前期で、うち土坑６は配置からみて落とし穴の可能性がある。掘立柱建物３と土坑２は中世で時期差がある。その他の遺構は出土遺物が少なく、詳細時期不明である。また、出土遺物に黒曜石が含まれていたため、地山の鳥栖ロームを掘り下げて旧石器時代の調査を行った結果、ナイフ形石器、台形石器などが出土した。

遺物は弥生土器、古式土師器を中心にコンテナケース９箱が出土した。

遺構実測の基準線は予定道路軸線を基準に設定し、後に『博多区・南区内（那珂～井尻地区）遺跡基準点測量委託　四級基準点測量成果簿（平成６年２月）』の成果データから公共座標に位置付けた。標高は第10次調査で設定したものを引き続き使用した。

２．検出遺構と出土遺物

⑴　掘立柱建物

掘立柱建物 SB－9020（Fig. 22、PL. 7）

調査区の中央付近のやや東寄りに検出した。木根とは明らかに異なる明確な柱穴がほぼ等間隔に並んでおり、確実に掘立柱建物であると判断できる。東西方向に長く、梁行２間、桁行３間を数える。梁行全長は380cmで、柱間は190cmの等間である。桁行全長は721cmで、柱間は東から225cm、250cm、246cmである。主軸方位は磁北から70°東偏する。柱穴掘方の平面形は円～楕円形で、径32～65cm、深さ35～62cmを測る。柱痕跡は平面では検出することができなかったが、土層断面観察により６つの柱穴で確認した。

SB－9020出土遺物（Fig. 24）

各柱穴から、須恵器、土師器（小皿・坏他）、石製品、鉄片が極く少量出土した。

1 は土師器小皿で、摩滅した小片である。底部ヘラ切り。淡橙褐色で、細砂粒を含み、焼成良好。SP−9253の柱痕跡から出土した。**2** は土師器小片で、椀か。口縁端部は僅かに外反する。淡黄褐色で、胎土精良、焼成良好。SP−9255掘方から出土。**3** は黒色土器Ｂ類の椀で、小片。内外と口縁端部にミガキを施し、光沢がある。黒色で胎土精良、焼成良好。SP−9255柱痕跡から出土した。

中世前半の建物と考えられるが、遺物が少なく詳細は決めがたい。SK−9001と同時期か。

掘立柱建物 SB－9024（Fig. 23）

SB−9020の西側に４ｍ離れて位置する。南北１間、東西２間の東西にやや長い掘立柱建物に復元したが、西側は調査区外に伸びていく可能性もある。南北長は462cmを測る。東西全長は518cmで、柱

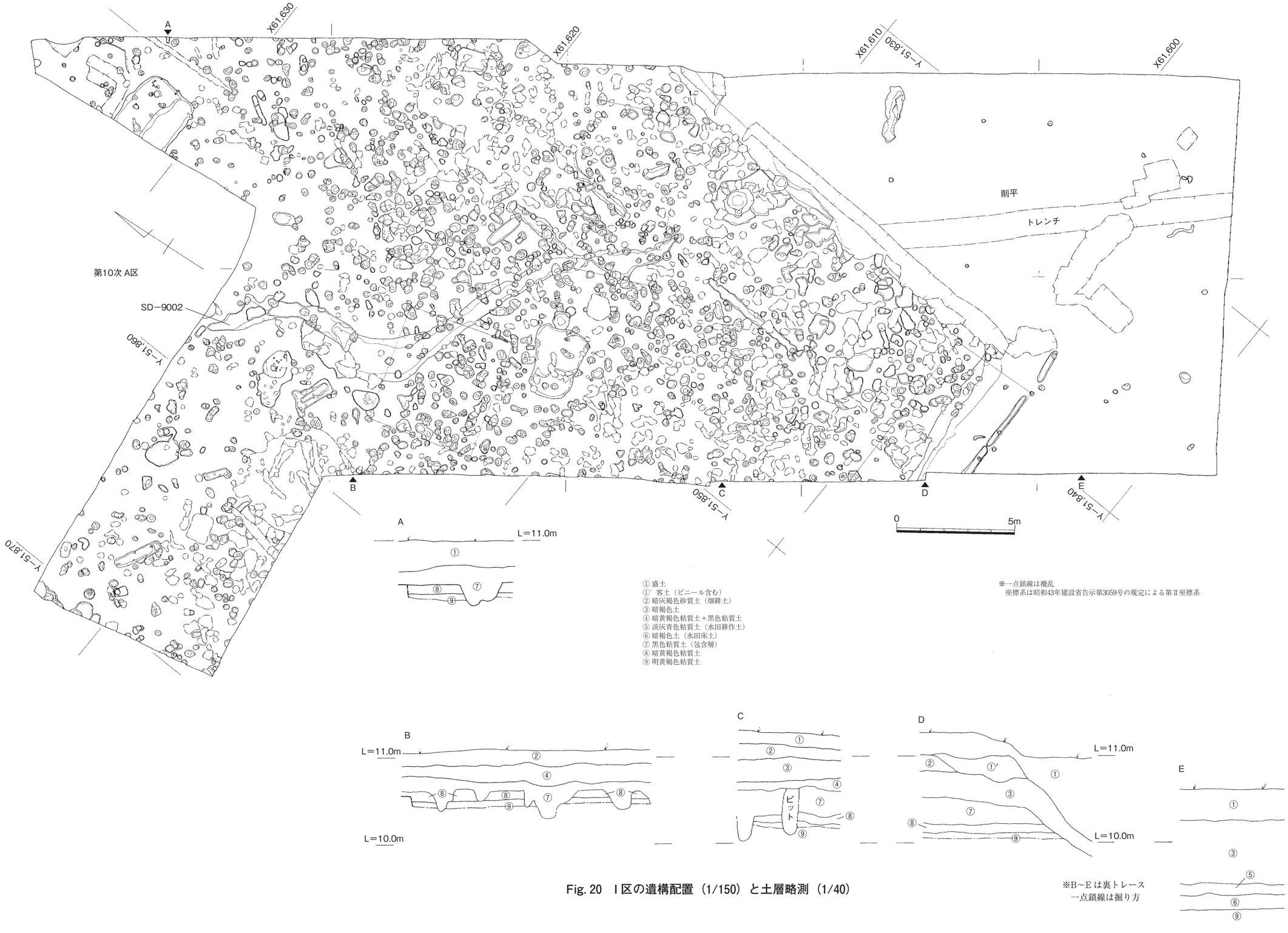


Fig. 20　Ⅰ区の遺構配置（1/150）と土層略測（1/40）

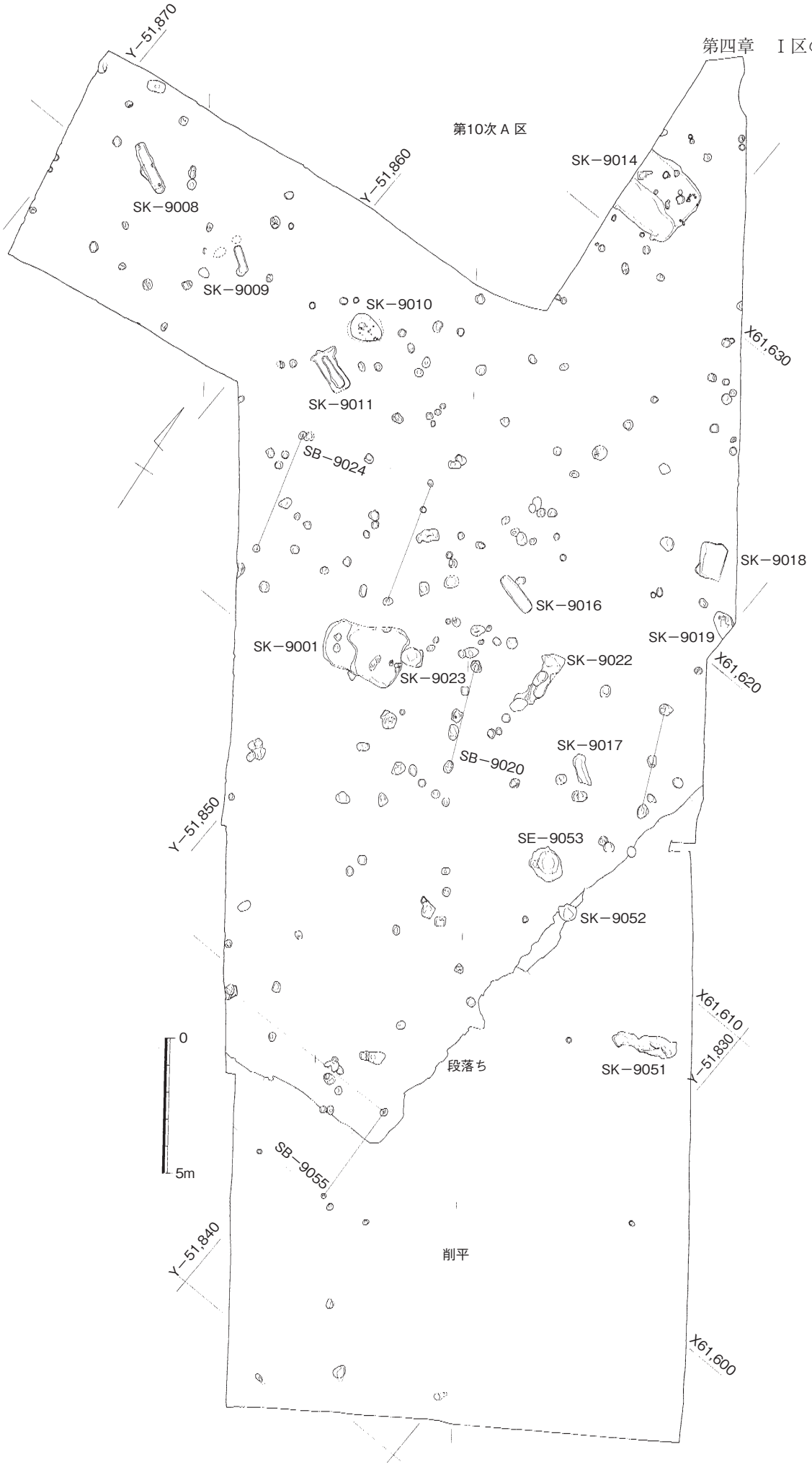
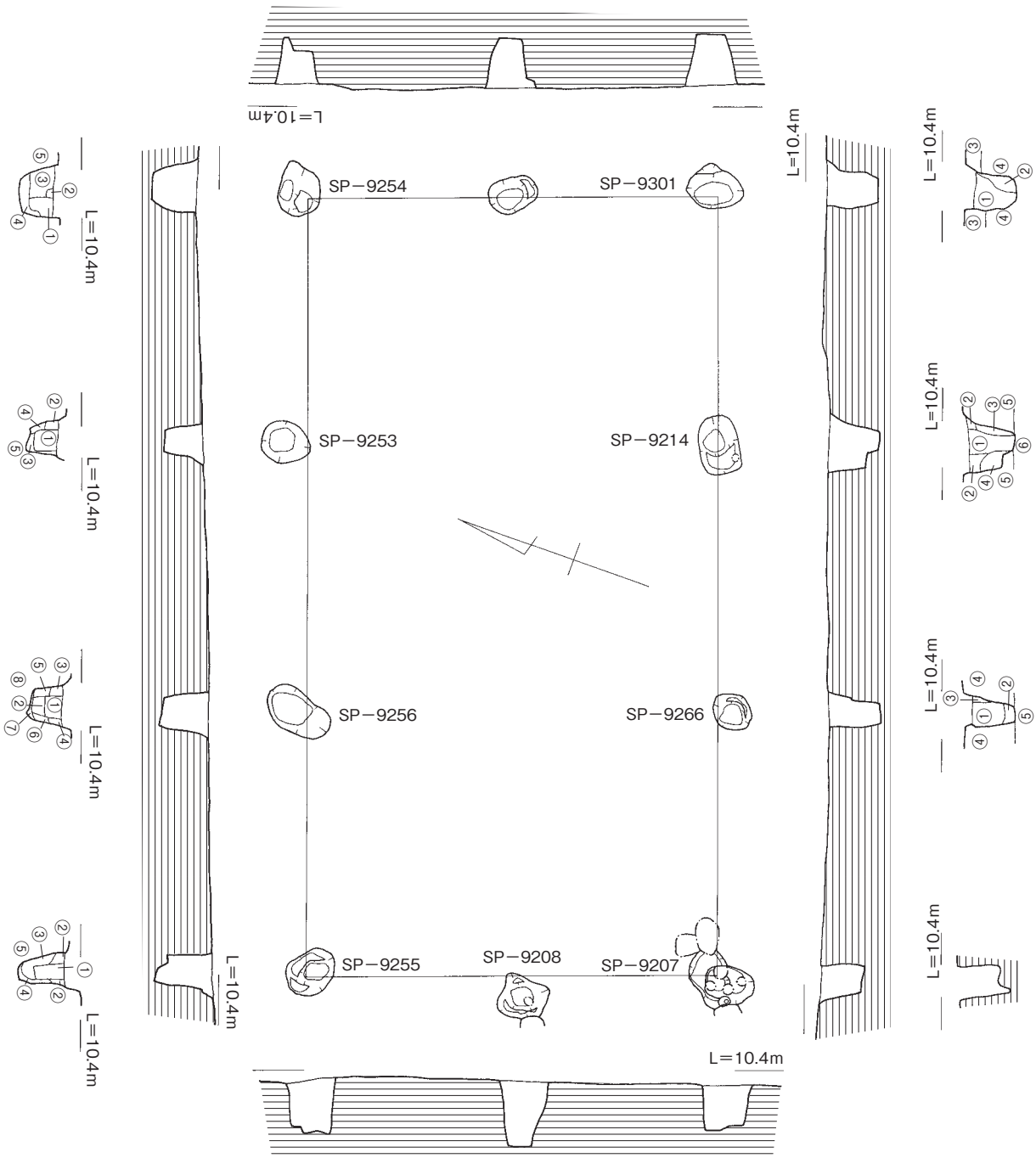


Fig. 21　Ⅰ区の主要遺構配置（木根を除く）（1/200）



SP－9254
①黒色粘質土（黄褐色粘土粒含む）　柱痕跡
②黒色粘質土（締まりがない）
③黒色粘質土（黄褐色粘質土粒含む）
④黄褐色粘質土（地山ほぐし土）
⑤黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）

SP－9253
①黒色粘質土（黄褐色粘土粒含む）　柱痕跡
②黒色粘質土（黄褐色粘土粒多く含む／締まる）
③黄褐色粘質土（黒色粘質土粒含む／締まる）
④深黒色粘質土（黄褐色粘土粒含む／締まる）
⑤黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）

SP－9256
①黒色粘質土（黄褐色粘土粒多く含む）　柱痕跡
②深黒色粘質土（黄褐色粘土粒少し含む／締まる）
　柱痕跡
③黒色粘質土
④黒色粘質土（黄褐色粘土粒含む）
⑤深黒色粘質土（締まる）
⑥深黒色粘質土（黄褐色粘土粒含む／締まる）
⑦黄褐色粘質土（地山ほぐし土）
⑧黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）

SP－9255
①黒色粘質土　柱痕跡
②黒色粘質土（黄褐色粘土粒少し含む）
③深黒色粘質土（黄褐色粘土粒多く含む／締まる）
④黄褐色粘質土（地山ほぐし土）
⑤黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）

SP－9301
①黒色粘質土（黄褐色粘土粒含む）
②黄褐色粘質土粒（黒色粘土粒含む）
③暗黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）
④明黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）

SP－9214
①黒色粘質土（締まりなし）　柱痕跡
②黒色粘質土
③黄褐色粘質土（地山ほぐし土）
④深黒色粘質土（黄褐色粘土粒少し含む／締まる）
⑤暗黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）
⑥明黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）

SP－9266
①黒色粘質土（黄褐色粘土粒少し含む）
②深黒色粘質土（締まる）
③①に近似し暗い
④暗黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）
⑤明黄褐色粘質土（鳥栖ローム／地山）

0　2m

Fig. 22　掘立柱建物 SB－9020（1/60）

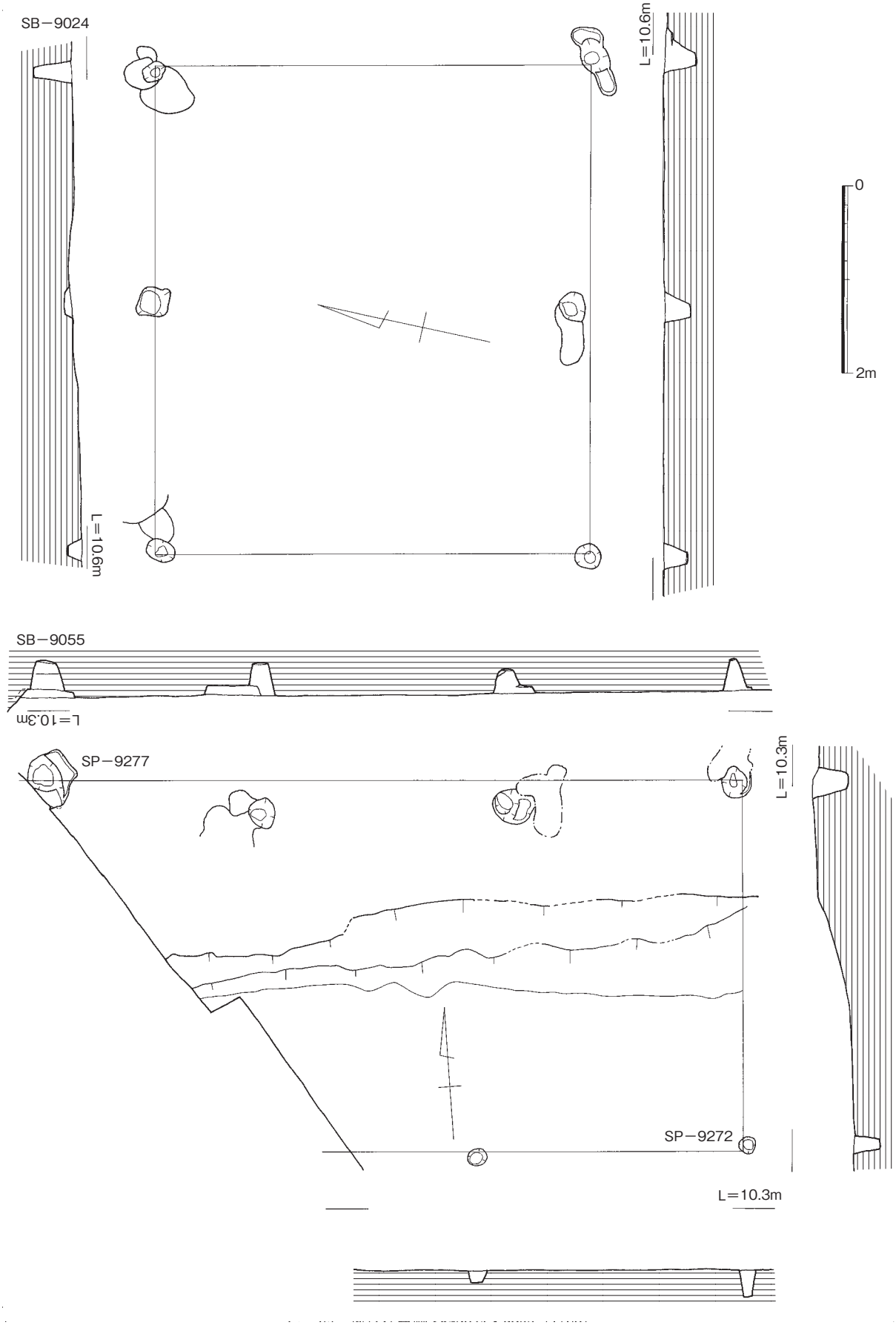


Fig. 23　掘立柱建物 SB－9024・9055（1/60）

間は東から257cm、261cmである。主軸方位は磁北から78° 東偏する。柱穴掘方の平面形は円～楕円形で、径25～38cm、深さ10～40cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

土器小片が１点出土しているが、図示できるものではない。

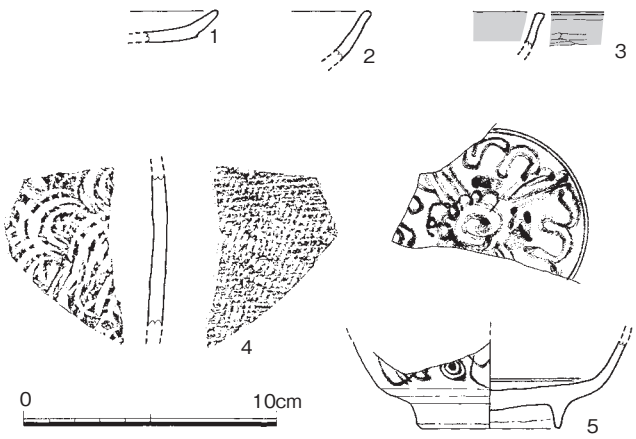


Fig. 24　SB－9020・9055出土土器（1/3）

掘立柱建物 SB－9055(Fig. 23)

調査区南端の段落ち付近に検出した。現状で１間×３間の東西方向の建物であるが、調査区の西外へ進展する可能性がある。梁行１間で、桁行は現状で３間である。梁行全長は394cm。桁行全長は742cmで、柱間は東から270cm、245cm、227cmで、柱間の寸法はSB−9020に近いと言えよう。主軸方位は磁北から86° 西に偏し、ほぼ東西方向を指す。柱穴掘方の平面形はおおむね円形で、径20～55cm、深さ15～40cmである。建物の南半分は段落ちにより削平されているが、柱穴基底面のレベルも下がっていることから、もともと斜面に立てられた建物であったと考えられる。柱痕跡は確認できない。

SB－9055出土遺物(Fig. 24、PL. 9)

遺物は須恵器、陶磁器などが少量出土した。

4 は須恵器甕の胴部小片である。外面は擬格子タタキか。上から疎らなカキ目を加える。内面は同心円文の当て具痕が残る。外面黒色、内面淡黄灰色をなす。胎土に砂粒はほとんど含まないが粗く、焼成良好。SP－9277出土。**5** は明代青花碗の底部片である。見込みと体部外面に施文する。胎土は僅かに灰色がかった白色で、精良磁質である。青味の強い透明釉で、全体に施釉し、畳付を拭き取る。15世紀代。SP−9272から出土した。

中世後期の建物であろう。

⑵　溝状遺構

溝状遺構はSD−9002のみである。他に、黒色粘質土（包含層）の上から切り込む直線溝が４条あったが、畑作時の深耕によるものと思われたため記録はとっていない。

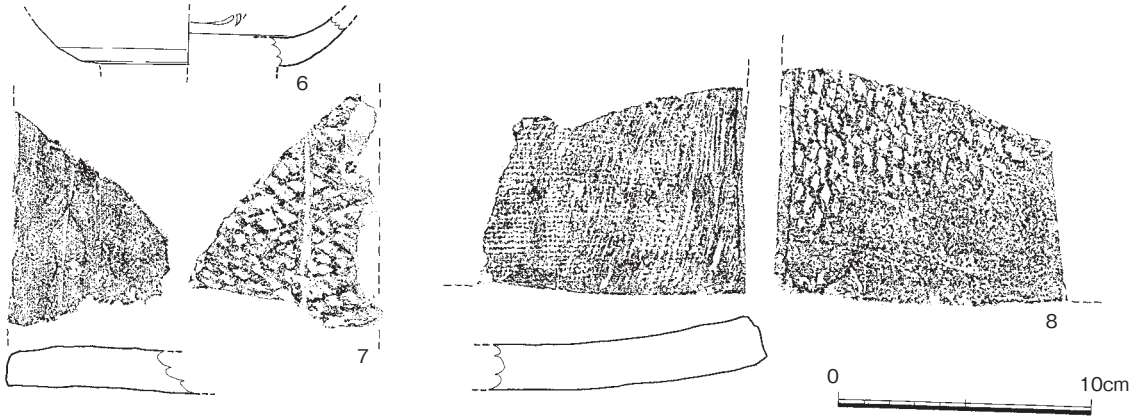


Fig. 25　溝状遺構 SD－9002出土土器（1/3）

溝状遺構 SD－9002(Fig. 20)

調査区北半部の中央を蛇行して南北に伸びる浅い窪みである。南北端は調査区壁際で浅くなり消滅している。水路ではなく、道である可能性が考えられる。最も幅の広い中央部で幅２m、最も深い部分で0.5m である。掘立柱建物や土坑などの他の遺構とは異なる土質の覆土であり、時期的に他より下る遺構と考えられる。

SD－9002出土遺物(Fig. 25)

弥生土器、須恵器、土師器（小皿・坏・甕類）、須恵質土器、中国産陶磁器（南宋竜泉窯系青磁）、瓦、石製品が少量出土した。

6 は南宋竜泉窯系青磁碗の小片で、内面に劃花文を入れる。胎土は淡灰色で精良磁質、釉は暗灰青色で透明である。**7** は平瓦の小片。湾曲がなく平坦で、やや逆に反る。上面はヘラ状工具によるナデ調整で布目痕は残らない。下面は不鮮明な斜格子タタキで、降灰を被る。灰青色で、胎土に細かい白色粒を少量含み、焼成良好、瓦質である。**8** も平瓦片で、凹面は布目痕の上から軽いヘラ削りを加える。凸面は斜格子タタキで一部をナデる。側面は雑に面取りする。凹面灰黒色、凸面灰色をなし、胎土に径５㎜までの白色粒を少量含み、焼成良好で瓦質。小口面に炭素が吸着する。

出土遺物は中世前半を主体とするが、覆土の異なりから近世以降に下る遺構の可能性が強い。

⑶　井戸状遺構

井戸状遺構SE－9053(Fig. 26、PL. 7)

Ⅰ区南半部東半に検出した。北西－南東に長い楕円形プランを呈し、長径1.3m、短径1.05m を測る。断面逆台形をなし、開口部でラッパ状に開く。底面は径45㎝の円形を呈し平坦である。遺構検出面から底面までの深さは1.5m である。橙色ローム層中で掘削が留まっており、井戸ではなく深めの土坑である可能性も考えられる。なお調査時に湧水は認められなかった。

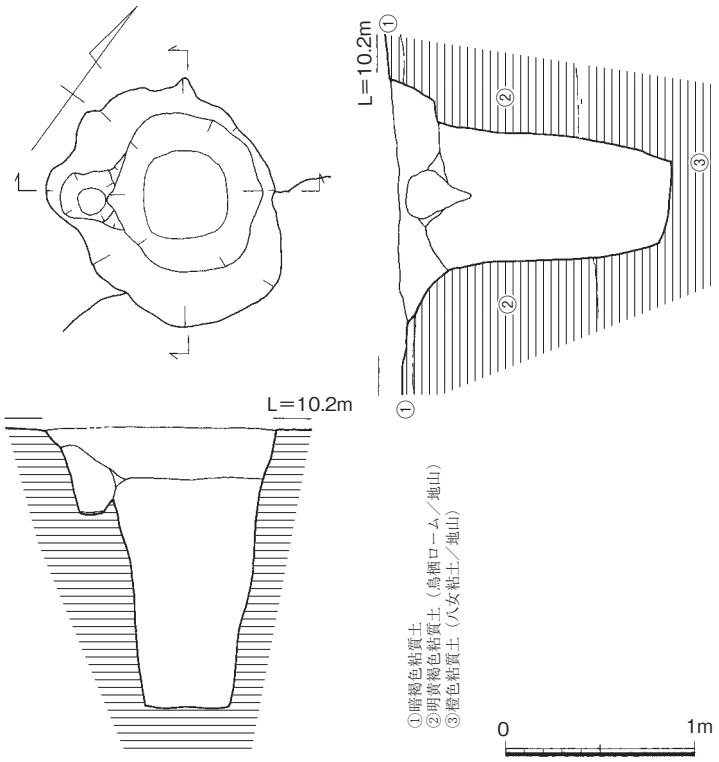


Fig. 26　井戸状遺構 SE－9053（1/40）

SE－9053出土遺物(Fig. 27)

弥生土器、土師器、石製品がコンテナ 1/4 箱出土した。

9 は古式土師器の布留系甕である。口縁部小片で、摩滅が著しく調整不

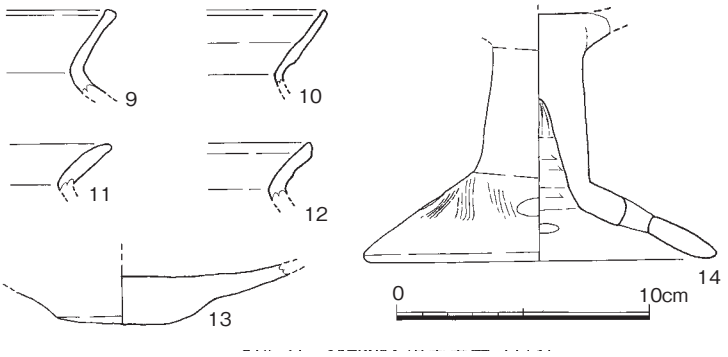


Fig. 27　SE－9053出土土器（1/3）

明。灰白色で、胎土に細砂粒を少量含み、焼成良好。**10**は古式土師器の二重口縁壷か。口縁部の小片で、横ナデ調整。淡黄褐色で、胎土に細砂粒を少量含むが精良、焼成不良。**11**は在来系甕の口縁部小片。横ナデ調整。黒～褐色をなし、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。**12**は古式土師器の小形甕か。口縁部の小片で、横ナデ調整。橙褐色で、径３㎜以下の砂粒を少量含むが精良、焼成良好。**13**は底部片で、凸状に厚みを持たせた不安定な平底をなす。摩滅が著しいが外面ナデ調整か。橙褐色で、径２～３㎜の砂粒と細砂粒を少量含み、焼成良好。**14**は古式土師器の高坏で、脚のみ完存する。外面は刷毛目調整だが残りが悪い。脚筒内面は横にヘラ削り調整。裾部の四方に穿孔する。淡黄褐色で、胎土に径４㎜までの粗砂粒を少量含むが精良、焼成良好。

古墳時代前期の遺構である。

⑷ 貯蔵穴

貯蔵穴 SK－9010(Fig. 28、PL. 7)

Ⅰ区北半部の北西部に検出した。平面形は東西に長い不整楕円形をなし、長径1.2m、短径0.95m を測る。底面は北東－南西に長い楕円形を呈し、長径1.3m、短径0.9m である。壁面は南西側の孕みが大きいが、他は概ね断面逆台形をなす。遺構検出面から底面まで深さ90cmを測る。底面は平坦面をなし、小さく浅い窪みが14個認められた。覆土は概ね黒色粘質土である。袋状をなす断面形と覆土から貯蔵穴と判断したが、若干の疑問が残る。

SK－9010出土遺物(Fig. 29)

図示した土器が出土遺物の全てである。

15は須恵器甕の胴部小片で、摩滅している。外面格子タタキ、内面ナデ調整。淡灰色で胎土精良、焼成良好。**16**は内外を黒色に燻した黒色土器Ｂ類椀である。摩滅した口縁部小片で、内面にヘラミガキを施すが、ミガキの単位と方向は不明である。胎土に細砂粒を少量含むが精良、焼成良好。

遺構の形状と覆土から弥生時代前期の貯蔵穴と考えた。しかし、出土遺物には古代のものが含まれており、木根などからの混入遺物と考えることもできるが、古代の土坑あるいは落とし穴の可能性も残しておきたい。

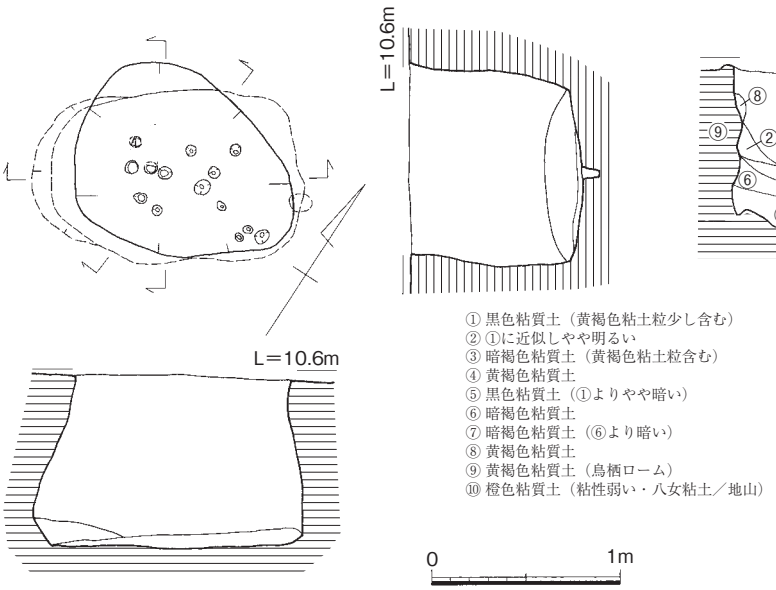


Fig. 28　貯蔵穴 SK－9010（1/40）

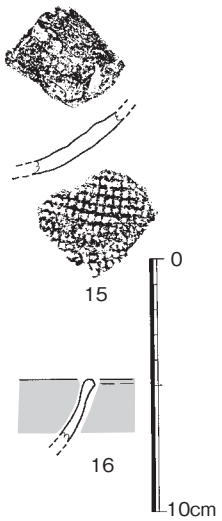


Fig. 29　SK－9010 出土土器（1/3）

⑸　落とし穴状遺構（土坑）(Fig. 30)

Ⅰ区の北半部を北西～南東に斜断するように弧状に並ぶ土坑を検出した。あたかも、けもの道に沿うように並ぶこと、周囲に木根状の小ピットが群在すること、底面が平坦でなく傾斜するものがあることなどから、落とし穴ではないかと考えた。検出した遺構の状況では落とし穴とするには深さが不足している感があるが、検出面は鳥栖ローム上面であり、この上層には黒色粘質土と、黒色土からロームへ漸移する層がかなり厚く堆積していることから、本来は少なくとも現在の倍以上の深さを有していたものと想定される。各土坑の出土遺物には一部中世土器が混入するが、おおむね古式土師器で占められており、古墳時代前期の遺構と考えられる。

土坑SK－9008(Fig. 31、PL. 8)

調査区の西端に検出した。一連の遺構の北西端に位置する。北西－南東方向に長い隅丸長方形プランで、長径2.1m、短径0.5m を測る。断面逆台形をなし、南東側短辺および南西側長辺の一部が段をなして落ちる。遺構面から底面までの深さ40㎝、底面は平坦で、壁沿いに４つの浅い小穴があるが木根であろう。遺構覆土は黒色粘質土で自然に埋没したものと考えられる。

SK－9008出土遺物(Fig. 32)

弥生土器、古式土師器、石製品、鉄片がコンテナ 1/2 箱出土した。

図示した土器は全て古式土師器である。**17**は小形の甕か。胴内面ヘラ削りで、口縁内外横ナデ調整。暗橙色をなし、細砂粒を少し含むが精良、焼成不良で破面が黒色をなす。**18**は布留系甕の口縁部小片。外面に横ナデ痕が残るが、内面は器壁が一枚剝落し本来の厚みではない。黒～淡灰色で、細砂粒多量と雲母粒を含み、焼成良好。**19**は甕である。頸部から丸く屈曲して口縁が開き、やや外反する。胴内面ヘラ削り調整だが、他は器壁が完全剝落し調整不明。橙褐色で、胎土に径４㎜までの粗砂粒や雲母粒が混じった細砂粒を多量に含み、焼成良好。**20**は二重口縁壷とみられる。摩滅するが端部に剝落痕が認められ、すぐ内側を横ナデし窪ませる。頸外面の一部に刷毛目痕が残るが、他は摩滅して調整不明。橙褐色で、胎土に細砂粒多量とカクセン石を含み、焼成良好。**21**は壷で、口縁が外反して伸び、頸部に三角形突帯を貼付する。摩滅のため調整不明だが、肩部内面に指押え痕が残る。外面黄褐色、内面黒色。径４㎜以下砂粒多量と暗赤色粒を含み、焼成不良。**22**は高坏の口縁部で、小片のため図の傾きは不確実。外面に指押え後、刷毛目調整を加える。内面は摩滅する。淡橙褐色で、胎土精良で植物繊維の圧痕が残る。焼成やや不良。**23**も高坏の口縁部小片。外面は摩滅するがヘラミガキ又は丁寧なナデ調整か。内面は粗い刷毛目でヘラミガキを加えたか。口縁端部は横ナデ調整。橙色で胎土精良、焼成良好。**24**は高坏の脚部である。脚を坏底に差し込んで接合する。外面は摩滅。内面は筒部がシボリ→ヘラ整形、裾部に微かに刷毛目痕が残り、四方に透孔がある。透孔は外から開けている。赤橙色で胎土精良、焼成良好。**25**は鉢で厚手。1/2 弱が残る。底部は丸く、体部との境に稜をつくる。外底刷毛目調整で、体部との境にヘラ削りを施す。他は調整不明。橙褐色、細砂粒を多量に含み、焼成やや不良。**26**は小形丸底で、小片のため図の傾きは不確実。外面を荒いヘラ削り、内面を刷毛目後ナデ調整、口縁内外を横ナデ調整。口縁内面に横のヘラミガキを加える。にぶい淡橙色、胎土精良で細砂粒を少量含み、焼成不良で破面が黒色をなす。胴下半に黒斑がある。**27**は鉢か。口縁部小片で、緩く外屈して開く。摩滅するが横ナデ調整で、外面に軽くヘラミガキを加える。褐色で、胎土に細砂粒を少量含み、焼成良好。

古墳時代前期の遺構である。

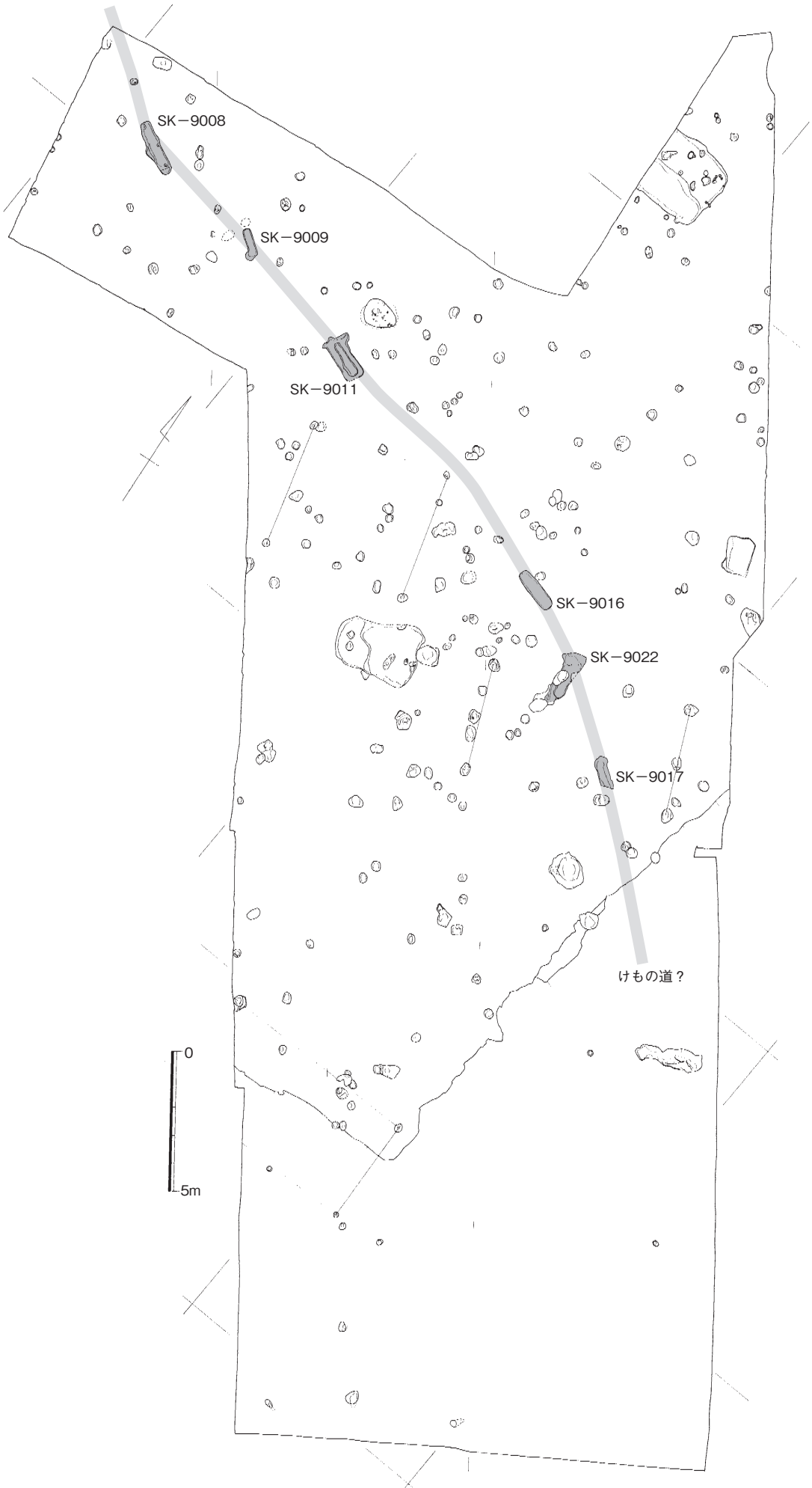


Fig. 30　落とし穴状遺構の配置（1/200）

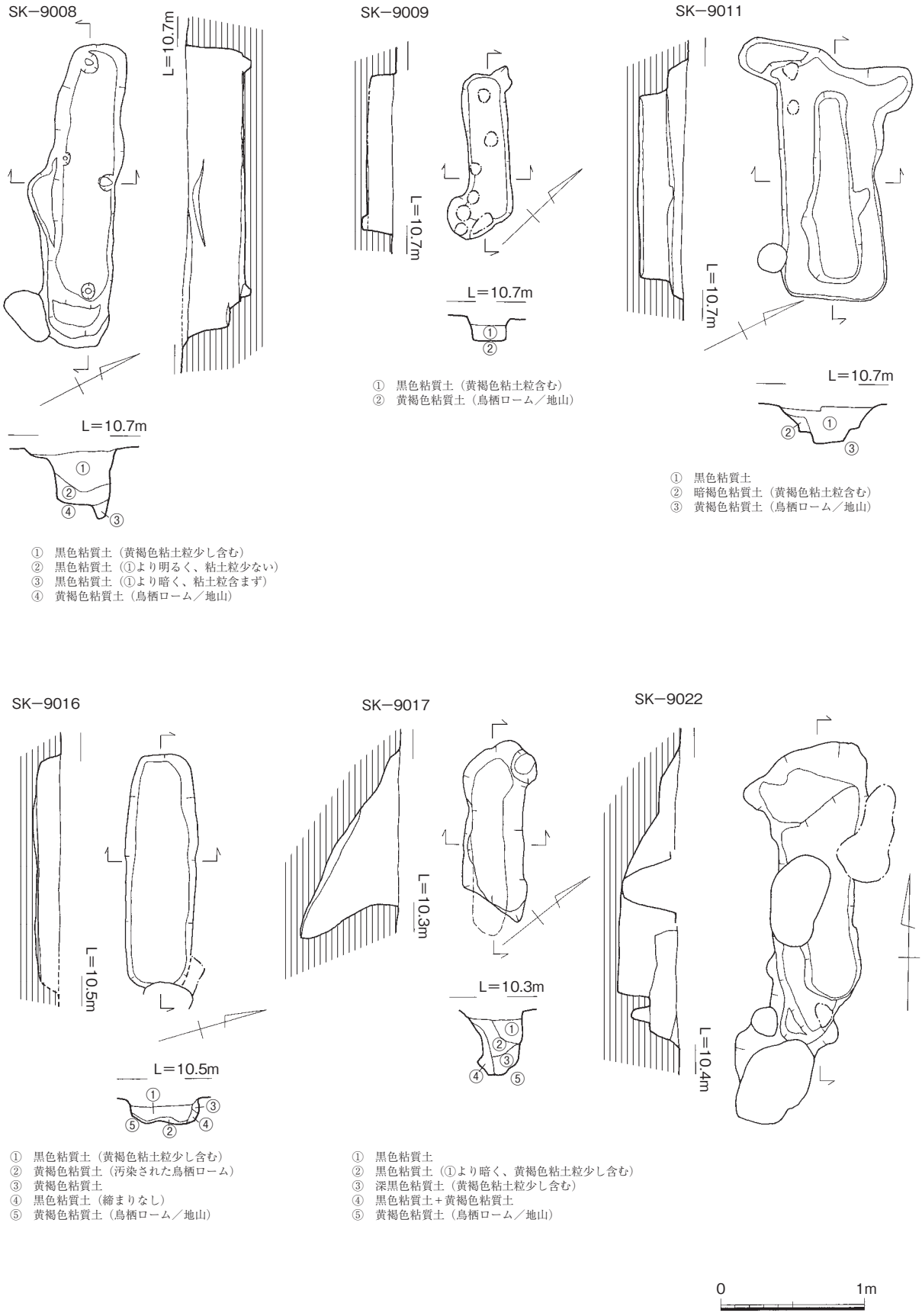


Fig. 31　落とし穴状遺構 SK−9008・9009・9011・9016・9017・9022（1/40）

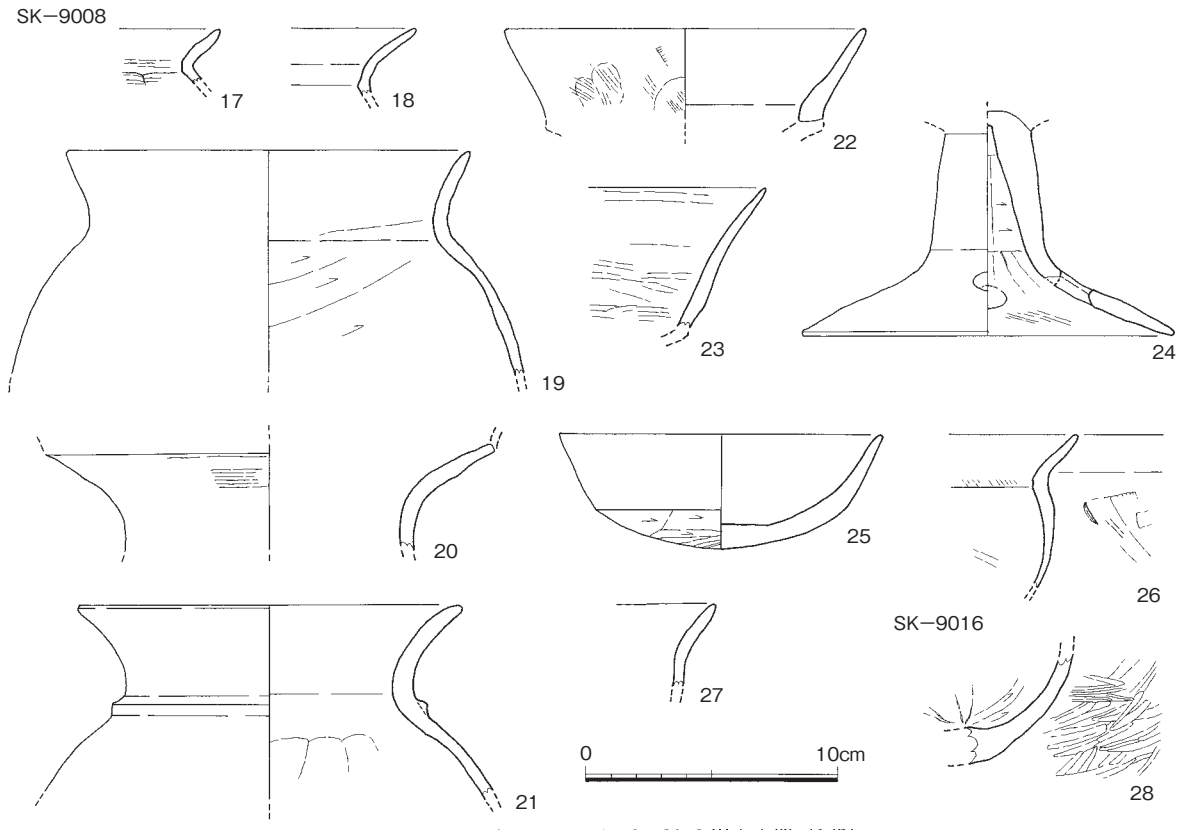


Fig. 32　SK－9008・9016出土土器（1/3）

土坑SK－9009(Fig. 31、PL. 8)

SK−9008の南東に3. 3m の間を置いて位置する。北西－南東の隅丸長方形プランで、南東短辺は木根により荒らされている。長径1. 1m、短径0. 3m。断面逆台形をなし、深さ20cm。底面は平坦で、小ピットがあるが木根であろう。遺構覆土は黒色粘質土である。土器小片 6 点が出土したが、図化できるものはない。

土坑SK－9011(Fig. 31、PL. 8)

SK−9009の南東に3. 9m の間隔を置いて位置する。隅丸長方形プランで北西－南東に長く、北西短辺は木根により荒らされている。長径1. 6m、短径0. 7m。中央の1. 3×0. 3m の範囲が20cmほど低い。遺構検出面から底面までは30cm。遺構覆土は黒色粘質土を主体とする。中世土師器小皿・坏や石製品等が 9 点出土したが図示できない。中世土師器は木根からの混入品か。

土坑SK－9016(Fig. 31、PL. 8)

SK−9011南東に9. 0m とやや間隔を置いて位置する。東西方向に長い隅丸長方形プランで、東短辺は木根に荒らされている。長径1. 6m、短径0. 5m。断面逆台形で、深さ20cm。底面はほぼ平坦で、小ピット等はない。遺構覆土は底面近くにロームほぐし土が薄く堆積するほかは黒色粘質土である。

SK－9016出土遺物(Fig. 32、PL. 9)

図示した 1 点のみが出土した。**28**は器種不明の土器片。壷の底部に似ているが、内底にシボリ痕がある。内面は指頭によるナデで、シボリ痕にヘラナデを加える。外面はかなり精緻なヘラミガキを施しており、炭素が吸着して黒色をなす。内面暗橙褐色。胎土に細砂粒を少量、カクセン石を僅かに含み、焼成良好。器種不明ながら、朝鮮半島系の無文土器の可能性もあろう。

土坑 SK－9017(Fig. 31、PL. 8)

SK−9016の南東に5.5m の間隔を置いて位置する。北西－南東方向に長い不整楕円形プランで、長径1.3m、短径0.4m。底面は南東に傾斜して深く、横穴状をなす。遺構面から最深部まで70㎝と一連の遺構中では最も深い。遺構覆土は黒色粘質土を主とする。土器小片が３点出土したが、図示できない。

土坑 SK－9022(Fig. 31)

SK−9016とSK−9017の間に位置する。他の一連の土坑と主軸を異にし、落とし穴状遺構に含まれない可能性もある。南北に長い不整な隅丸長方形プランで、木根による攪乱が著しい。長径2.1m、短径0.5m。断面形は南に深い逆台形状を呈し、遺構面から底面まで40㎝を測る。遺構覆土は他の落とし穴状遺構と同じく黒色粘質土を主体とする。土器小片が２点出土したが図化できる土器はない。

⑹　その他の土坑

土坑 SK－9001(Fig. 33、PL. 7)

調査区の中央西よりに検出した。土坑 SK−9023を切る。東西に長い不整な隅丸長方形プランで、長径3.0m、短径1.9m。断面逆台形で、深さ15㎝。底面平坦で西側が一段高い。底面に浅い小ピットがいくつかあるが、木根である可能性が強い。遺構覆土は黒色粘質土である。

SK－9001出土遺物(Fig. 34、PL. 9)

須恵器、土師器（小皿・坏・丸底坏他)、中国産陶磁器（宋代白磁、陶器)、石製品、鉄片がコンテナ１箱出土した。

29～**34**は土師器小皿で底部ヘラ切り離し。一部を除き胎土精良で、焼成は全て良好。**29**は炭素が吸着して全体が黒色をなす。口径9.4cm、器高1.0cm。**30**は淡黄褐色。口径9.6cm、器高1.3cm。**31**は淡灰色で胎土に細砂粒を少量含む。口径10.0cm、器高1.3cm。**32**は淡灰色で炭素吸着し外底が黒色をなす。口径10.0cm、器高1.0cm。**33**は淡黄褐色。口径10.4cm、器高0.9cm。**34**は外底に板状痕があり、淡黄褐色、胎土精良、焼成良好。口径10.4cm、器高1.1cm。**35**～**40**は土師器椀で底部ヘラ切り。撥形に開く高台を付け横ナデ調整する。一部を除き胎土精良で、焼成は全て良好。**35**は高台が細く高い。淡灰～淡黄褐色。**36**も高台が細く高い。淡黄褐色、細砂粒を多量に含む。**37**は内面にヘラミガキがあるが不明瞭。淡黄褐色。**38**は淡黄褐色、胎土精良で細砂粒を少量含む。。**39**は摩滅が著しい。淡灰色。胎土精良で細砂粒を少量含む。**40**も摩滅著。高台は低い。径２～３㎜砂粒を少量含むが精良。

41は宋代広東産白磁鉢小片で、体外面に蓮弁文、内面に片切り彫りの劃花文を施す。胎土は白色で黒色微粒子含むが精良磁質。僅かに黄緑がかった透明釉を表裏に施す。**42**は無釉陶器の底部で、植木鉢か。混入遺物であろう。

11世紀後半の遺構であろう。

土坑SK－9014(Fig. 33)

調査区北東隅に位置する。第10次調査Ａ区検出の SK−1051・SK−1057（中世）と同一の遺構で、アミ部は調査済みである。同調査では SK−1051→ SK−1057の切り合いと報告されているが、今回の調査では範囲が狭く切り合いは不明。隅丸方形の整ったプランをなし、東西3.0m、南北2.6m を測る。深さは15㎝と浅く、底面は平坦である。南側（第10次調査の SK−1051）が一段低い。

須恵器、土器小片が計４点出土しているが図化可能なものはない。第10次調査では、南側の SK－1051(古)から中世土師器皿と同安窯系青磁皿、北側の SK－1057(新)から須恵器片が出土している。

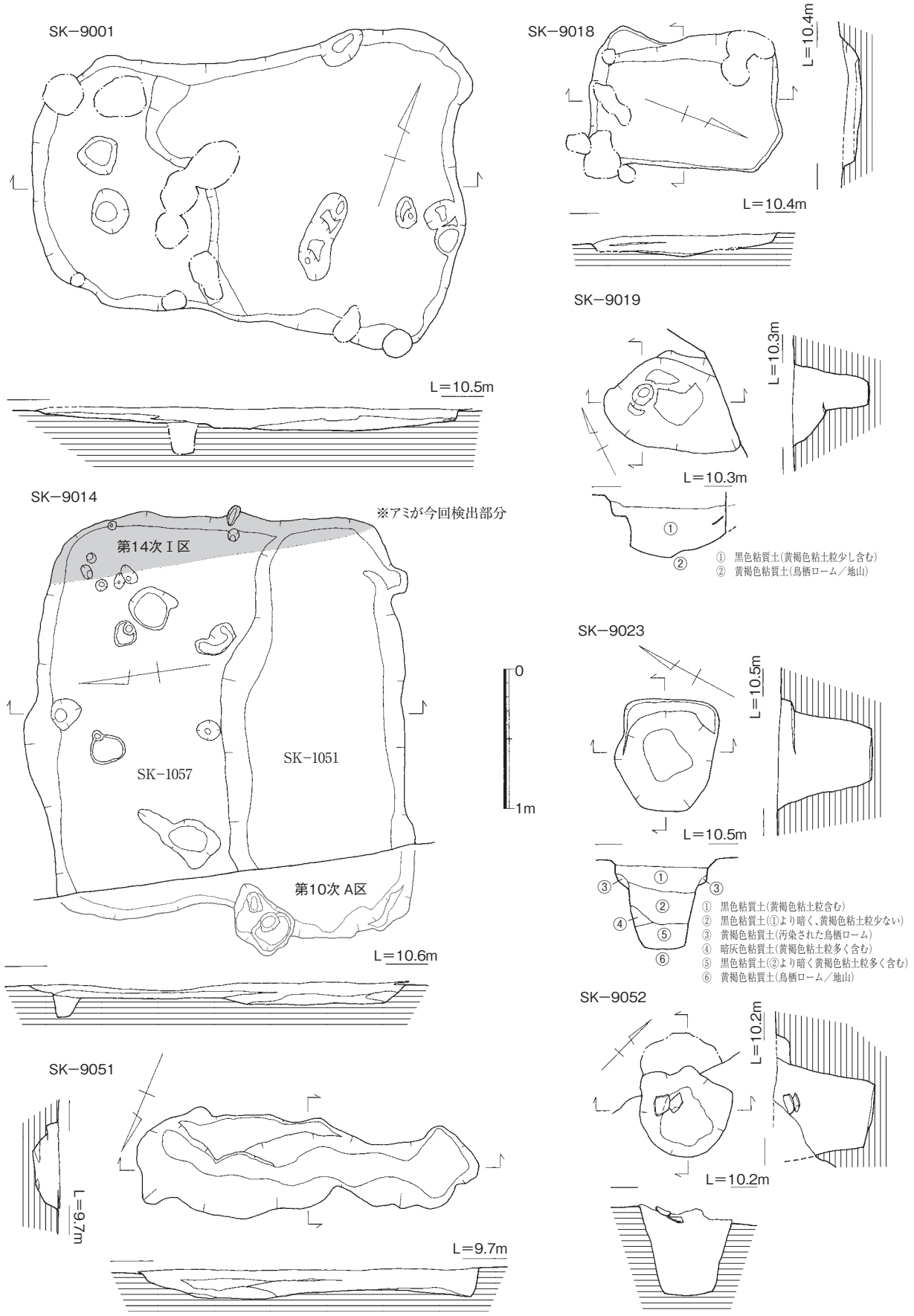


Fig. 33　土坑 SK−9001・9014・9018・9019・9023・9051・9052 (1/40)

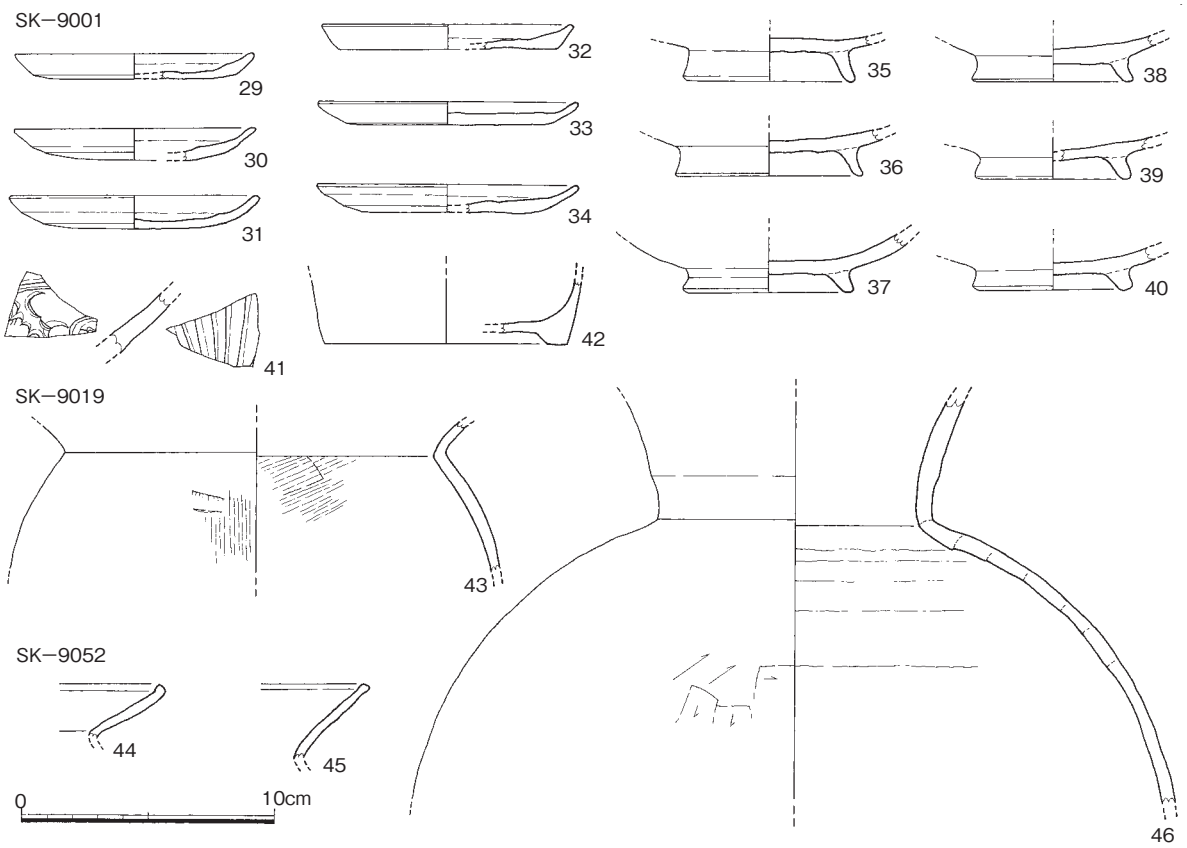


Fig. 34　SK−9001・9019・9052出土土器（1/3）

土坑SK−9018(Fig. 33)

調査区中央の東壁際に検出した。隅丸長方形プランで、1.3m×0.9m。断面逆台形で深さ15cm。底面は南側へ僅かに傾斜する。遺構覆土は黒色粘質土。土器小片３点が出土したが、図示できない。

土坑SK−9019(Fig. 33、PL. 8)

SK−9018の南東１ｍの調査区壁際に位置する。北西－南東に長い楕円形プランとみられるが、東側は調査区壁にかかる。現状で長径1.4m、短径0.7m。底面は皿状に窪み、北西側が深く、ピットが重複する。底面の深さ35cm、ピットの深さ55cm。遺構覆土は黒色粘質土の単純層である。

SK−9019出土遺物(Fig. 34)

弥生土器など５点が出土した。**43**は甕の頸部片で、「く」字形に屈曲し、内外とも明瞭な稜を持つ。胴外面は縦刷毛目にナデを加え、内面は斜刷毛目。口縁は内外とも横ナデ調整。淡黄褐色で、細砂粒を極めて多く含み、焼成良好。弥生時代後期～古墳時代前期の在来系甕であろう。

土坑 SK−9023(Fig. 33)

調査区のほぼ中央、SK−9001の東に接し、これに先行する。不整円形プランを呈し、径0.7～0.8m。東辺が一部段状に下がるが断面逆台形をなし、遺構検出面から底面までの深さ60cmで、底面は平坦。遺構覆土は黒色粘質土を主体とする。遺物は全く出土しなかった。

土坑 SK−9051(Fig. 33)

調査区南端部の削平された一段低い面に検出した。位置的には一連の落とし穴状土坑の延長線上に

あるが、レベル差があること、主軸が異なることから除外した。東西に長い不整な楕円形プランで、2.4m×0.7m。遺構面から底面まで20cmで、底面にはゆるい起伏がある。遺構覆土は黒色粘質土である。石製品１点が出土したのみである。

土坑 SK－9052(Fig. 33、PL. 7)

調査区南東部の段落ち際に位置する。東側は削平され木根により攪乱されるが、おおむね円形プランで、径65cm。断面逆台形をなし、遺構面から底面まで深さ60cmで、底面平坦である。遺構の上層から古式土師器片がまとまって出土した。遺構覆土は黒色粘質土であった。

SK－9052出土遺物(Fig. 34、PL. 9)

古式土師器が13点出土した。図示した土器は全て古式土師器である。

44は布留系甕で、口縁部小片。口縁は内湾し、内外横ナデ調整。淡灰褐～淡橙褐色で、胎土に細砂粒・雲母粒を含み、焼成良好。**45**も布留系甕の口縁部小片。器壁が完全に剝落する。黄白色で細砂粒を含むが精良、焼成良好。**46**は頸の締まった壺で、摩滅が著しい。胴外面は板状工具によるナデ調整か。内面はヘラ削りとみられ、粘土帯の積み上げ痕が残る。橙褐色で、径２～３㎜の粗砂粒と細砂粒を少量含み、焼成良好。SE−9053出土遺物と接合する。

古墳時代前期の遺構である。

⑺　その他の出土遺物

土器(Fig. 35)

47は弥生土器甕の口縁部小片で、口縁は断面逆三角形をなし上面平坦。頸部に沈線１条を回す。摩滅が著しい。SP−9167出土。**48**は古式土師器甕で、口縁端部が内に肥厚する。胴内面ヘラ削り、頸内面横刷毛目→横ナデ。胴外面から口縁内面にかけて横ナデ調整仕上げ。SP−9245出土。**49**は古代の土師器甕の口縁部小片で、体部内面ヘラ削り、口縁内外横ナデ調整か。SP−9112出土。**50**は古式土師器の高坏で、脚のみ残る。坏底に差し込み接合し、裾部の四方に外から透孔を入れる。外面全体と底部内面に粗刷毛目調整を施した後、底端部に横ナデを加える。脚筒内面はシボリ痕をヘラ状工具で調整する。SP−9007出土。**51**は土師器の把手か。小形品。摩滅しており調整不明。南東部検出面出土。**52**は古代の土師器甑把手で、摩滅する。SP−9206出土。

53は須恵器坏蓋で、口縁端部は丸い。天井部はヘラ切り離し後、1/2 強に回転ヘラ削りを施す。短い沈線で４本以上のヘラ記号を加える。ロクロ回転は時計回り。SP−9232出土。**54**も須恵器坏蓋で、小片。端部は丸い。SP−9137出土。**55**も須恵器坏蓋小片で端部は丸い。SP−9220出土。**56**も須恵器坏蓋小片で端部は丸い。天井部はヘラ切り離しのまま未調整か。SK−9021出土。**57**は須恵器坏身で小片。蓋受けの返りは短く内傾する。外底回転ヘラ削り。北半検出面出土。**58**は須恵器甕の口縁部小片。SP−9161出土。**59**は赤焼け土器か。口縁端部もしくは脚端部の小片。横ナデ。SP−9274出土。**60**は土師器小皿で、底部ヘラ切り。SP−9215出土。**61**も土師器小皿で、底部糸切りで板状痕残る。口縁部に油煙が付着し灯明皿である。SP−9308出土。**62**は土師器椀で、底部のみ完存。底部ヘラ切りで、高台は細く高く撥状に開く。SK−9015出土。

石器・銅製品(Fig. 36)

63～**66**は打製石鏃である。**63**は縄文時代早期の鍬形鏃で、左脚を欠損後に再加工を施している。表裏に素材となった剝片の剝離面を僅かに残し、縁辺から細かく丁寧な剝離を施す。漆黒色半透明黒曜石。SP−9276出土。**64**も早期の石鏃か。脚は鋭利な三角形をなす。漆黒色でやや半透明の黒曜石。

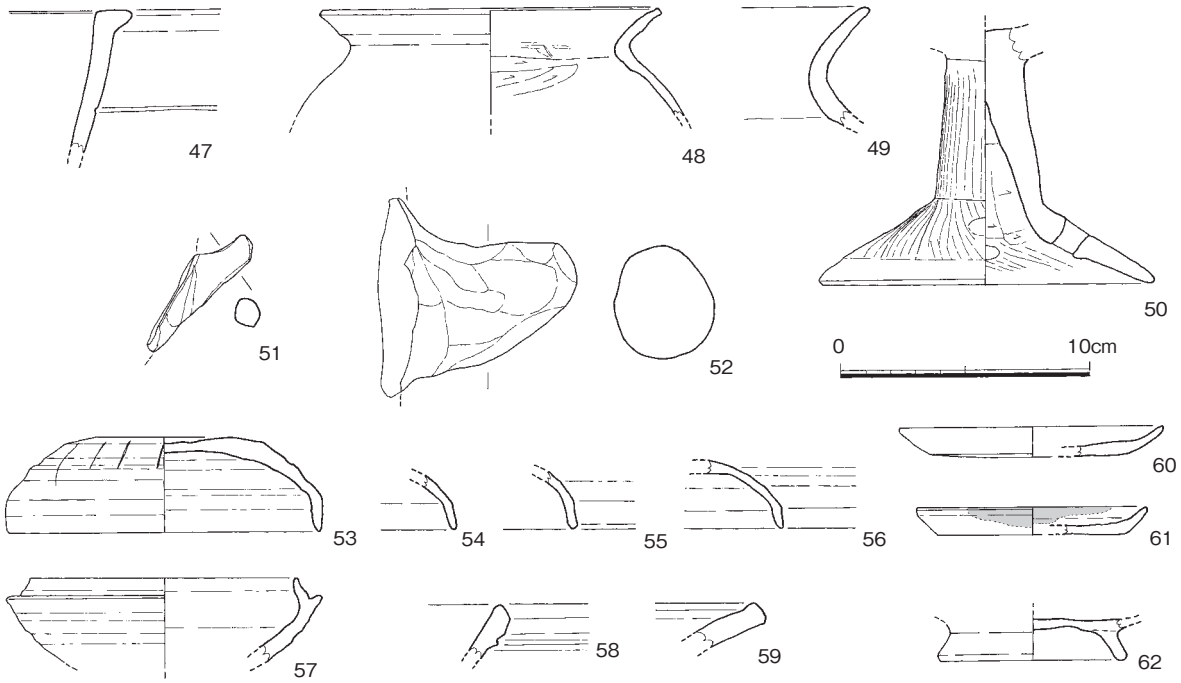


Fig. 35　その他の出土土器（1/3）

SP−9105出土。**65**は素材となった剝片のエッジを大きく残す狭義の剝片鏃である。縦長剝片の打面側を基部に加工し、先端にも加工を施す。漆黒色半透明黒曜石。北西部検出面出土。**66**は表裏に素材の剝離面を残すが。エッジは左下の一部にしか残らない。漆黒色半透明黒曜石で節理が入る。Ⅰ区南半部の黒色粘質土から出土した。**67**は砥石で、正面の砥面以外は全て破面である。SE−9053出土。

68は銅製品で、外径８㎜の環状をなすが、左上に１㎜ほどの間隙があり閉じていない。上側と右側に突起を付け、右側の突起は手前に突出する。何らかの製品の一部と考えられる。SP−9139出土。

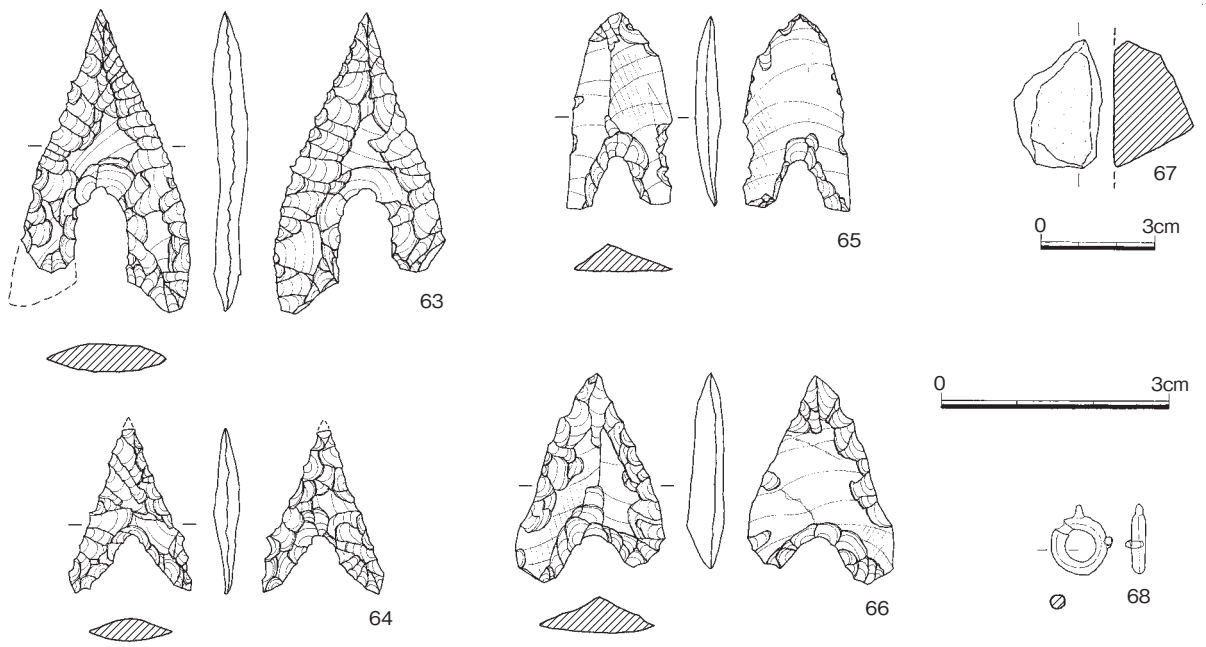


Fig. 36　Ⅰ区出土の石器・銅製品（67は1/2、他は1/1）

⑻ 旧石器時代包含層の調査（Fig. 37・38、PL. 9）

Ⅰ区北半部において、柱穴などから黒曜石チップが出土したため、地山土である鳥栖ロームを掘り下げて旧石器時代の調査を行った。グリッドは５×５ｍを基本として、５ヶ所に設定した。Fig. 20の土層図に示すように黒色粘質土の下に鳥栖ローム上位の暗黄褐色粘質土が厚さ10cmほど残っており、遺物はこの直下の明黄褐色粘質土の上部から出土した。出土レベルは図に標高で示した。出土した石器はナイフ形石器１、原の辻型台形石器２、細石刃？１、スクレイパー１、使用痕のある剥片２、剥片３、及びチップ４で、剥片２とチップ２以外は全て黒曜石である。ただし、他にも陶磁器片を含む土器小片等がロームから出土しており、木根等による攪乱を受けていると考えられる。

79は原の辻型台形石器である。素材は寸詰まりの短い剥片とみられる。剥片の打面を基部の右側とし、背面から急角度の剥離で打面を除去し、対面の左側は腹面から急角の剥離を施す。基部は平坦剥離で整える。上辺は素材剥片のエッジが残り、菱形を呈する。漆黒色の半透明黒曜石を用いる。**80**も原の辻型台形石器である。素材は打瘤の厚い短い剥片か。打面側は背面から、対面は腹面から急角剥離を施し、基部背面に打面側から平坦剥離を加える。上辺は素材のエッジが残り、使用によると見られる刃こぼれがある。パティナが厚いが、僅かな破損部から漆黒色黒曜石と思われ、流理が入る。**81**はナイフ形石器である。上半部を失うが縦長剥片を素材に用い、左側辺に腹面側からブランティングを施す。右側辺には使用によると思われる軽微な刃こぼれが認められる。漆黒色の不透明黒曜石で、灰褐色帯が入り節理がある。パティナは薄い。**82**は細石刃か。上下を折り取っており、上端は腹面側から加力して折るが下端は方向不明。背面の稜に擦痕がある。左側辺は発掘時の破損である。薄い黒色の黒曜石でパティナが著しい。**83**はスクレイパーである。左側辺から下辺にかけて角度のある二次調整を施し、主要剥離面を平坦剥離により薄く剥ぎ取る。漆黒色の不透明黒曜石でパティナが著しい。**84**は使用痕のある剥片である。分厚い縦長剥片で、右側面は礫面が残る。打面は残らない。左側辺の上部に使用痕がある。漆黒色半透明黒曜石で弱いパティナを被る。**85**も使用痕のある剥片である。縦長の剥片で、上部は折られている。左側辺の上半に使用痕がある。漆黒色不透明黒曜石。**86**は剥片である。小さな打面が残り、下端は腹面から力を加えて折っている。漆黒色半透明黒曜石。**87**も剥片で、上部は折られる。左側面は礫面が残る。安山岩でパティナが著しい。**88**は小剥片である。打面調整がある。サヌカイトでパティナがかなり発達する。図化していないが、他に４点のチップ（砕片）がある。以上の旧石器時代遺物については吉留秀敏氏のご教示を得た。

３．小結

調査区は北西～南東に長い方形で、南端部は台地が落ち、開田時に削平されて遺構はほとんど残らない。大半の遺構は台地上で検出しており、弥生時代とみられる貯蔵穴１（SK－9010）、古墳時代前期の井戸１（SE－9053）、隅丸長方形プランの落とし穴と考えられる土坑６（SK－9008・9009・9011・9016・9017・9022）・土坑２（SK－9019・9052）、中世前半の掘立柱建物１（SB－9020）・土坑２（SK－9001・9014）、中世後半の掘立柱建物１（SB－9055）の他、出土遺物が少なく詳細時期不明の掘立柱建物１、土坑３がある。掘立柱建物は全て中世に属する可能性が高いと考えている。これらの遺構以外に台地上全域に小ピットが多数あるが、これらは形状から木根と考えられ、倒木痕とみられる大型土坑も確認している。これらの木根や倒木痕は、一帯がかつて森林であった景観をうかがわせ、この中に一列に並ぶ古墳時代前期の規格的な長方形土坑は、けもの道に仕掛けられた落とし穴と考えることもできよう。中世の土坑や掘立柱建物柱穴はこれらの木根を切っており、古代末から中世には森林樹木が伐採されて、集落が開かれたと考えられる。

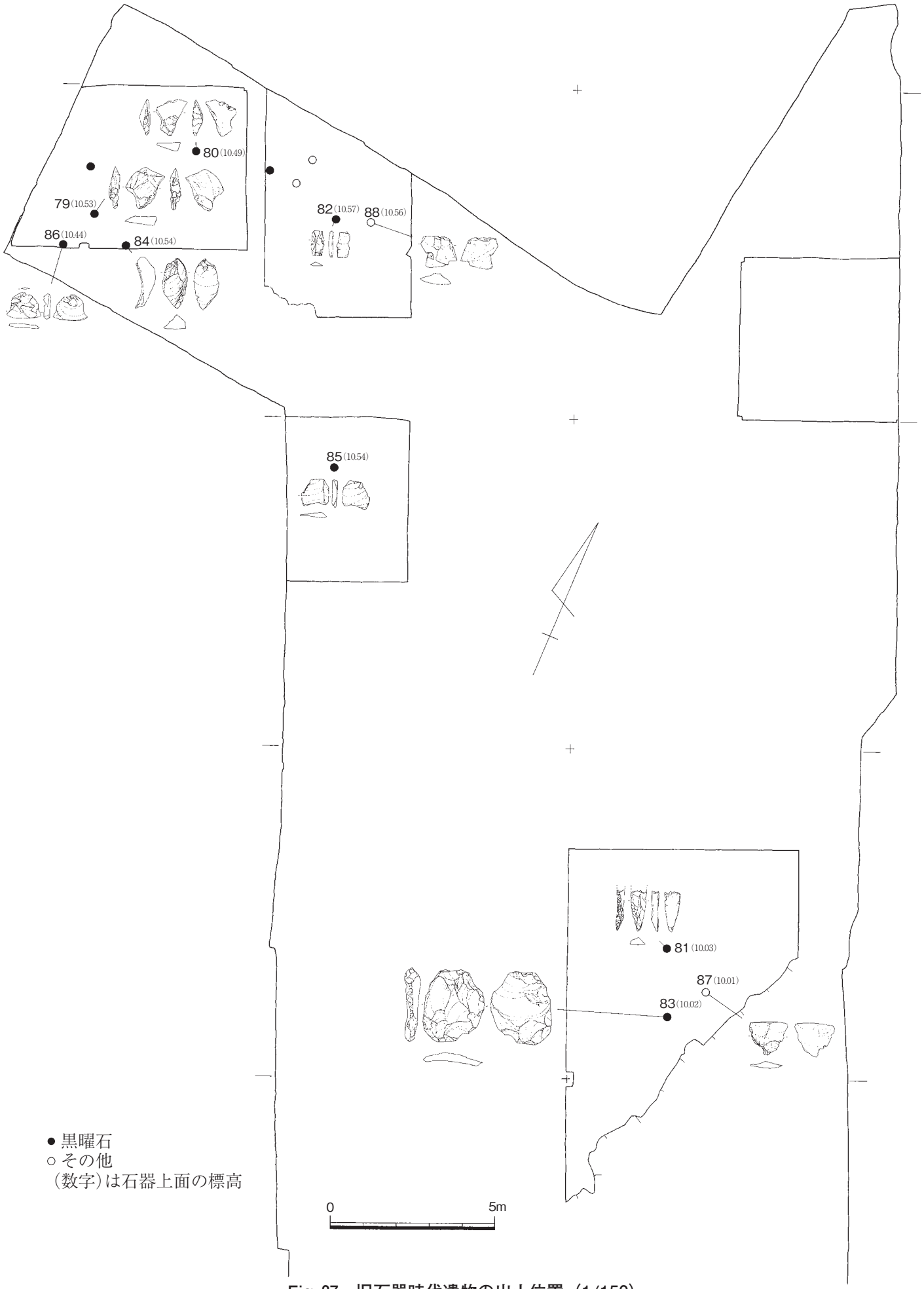


Fig. 37　旧石器時代遺物の出土位置（1/150）

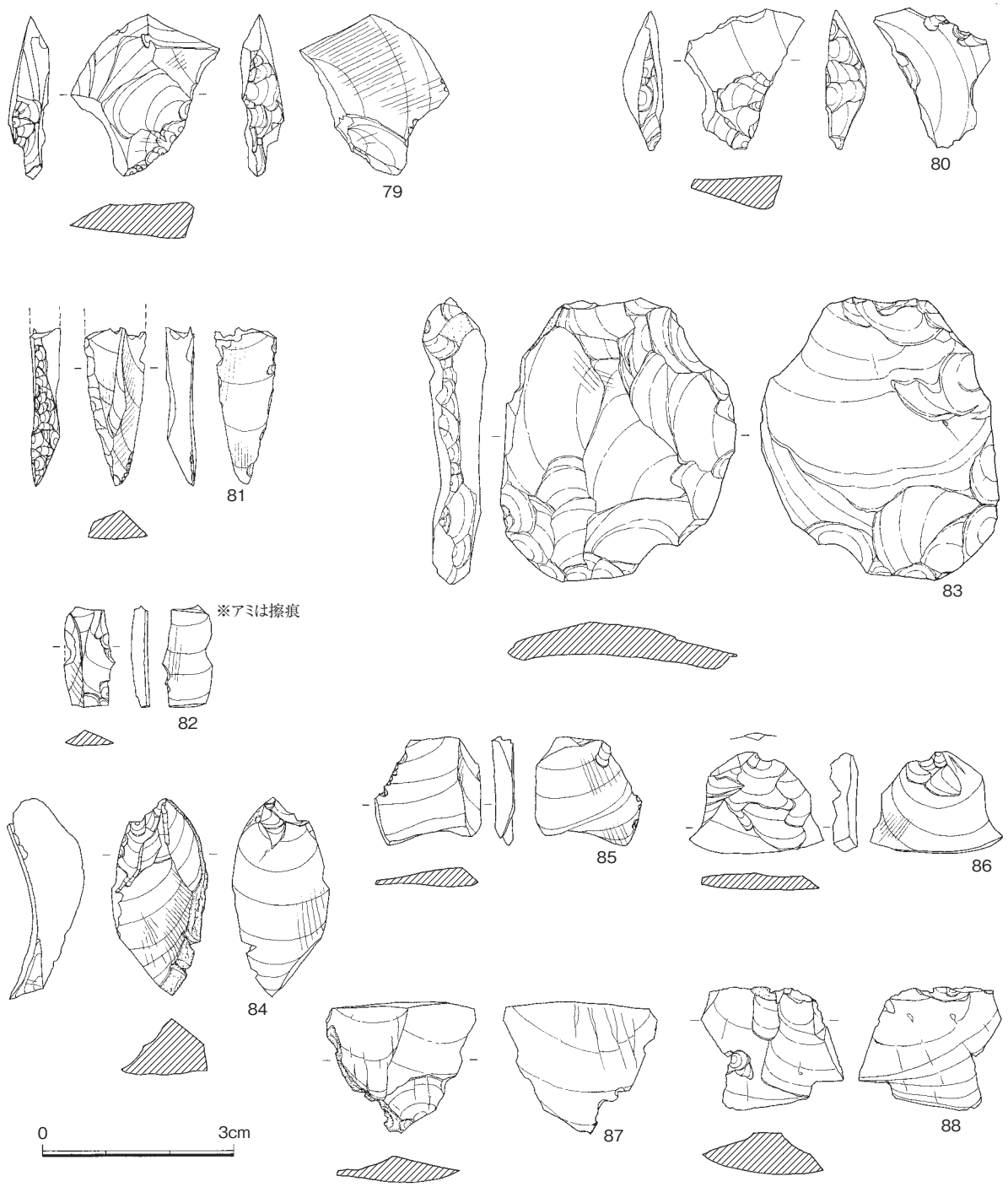
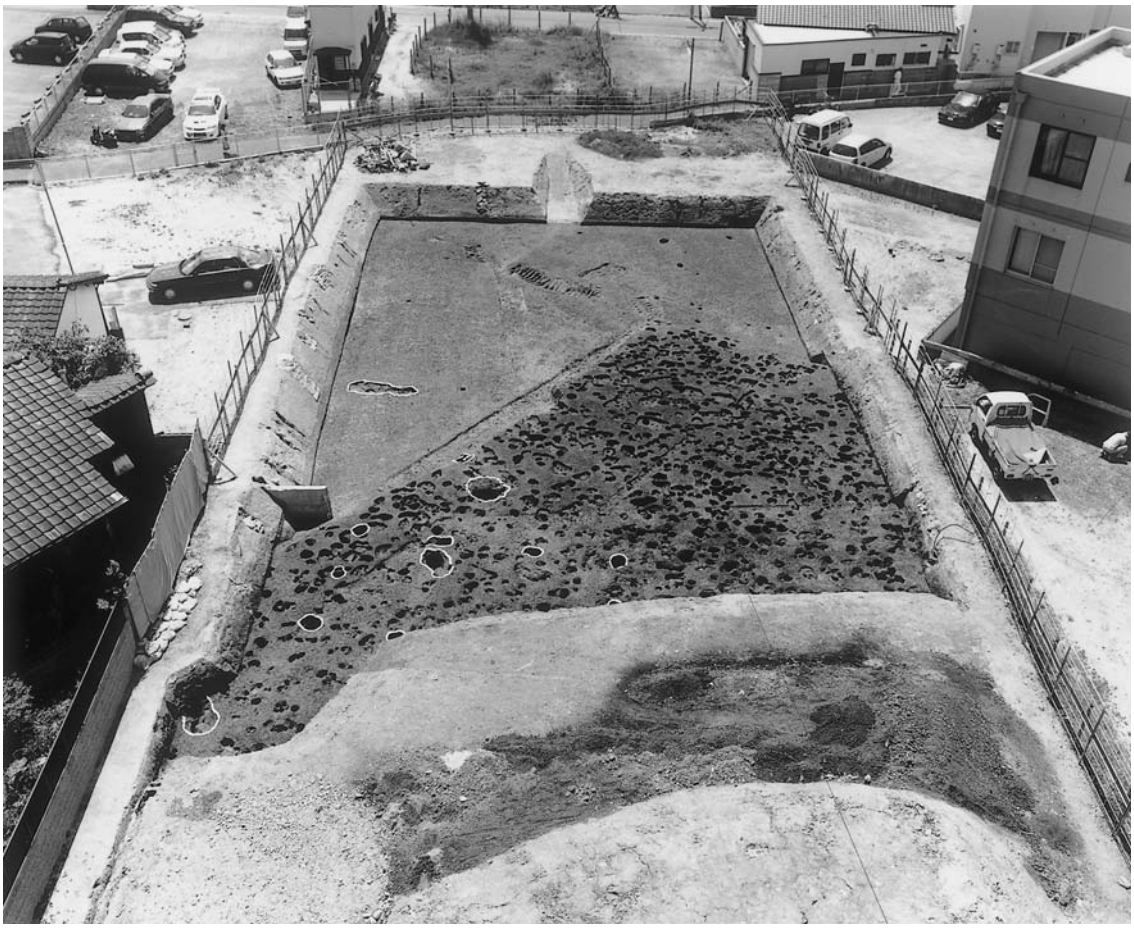


Fig. 38　旧石器（1/1）

また、台地部分に残る鳥栖ロームの一部を掘り下げた結果、黒曜石や安山岩の石器類が少量出土した。黒曜石製石器にはナイフ形石器や原の辻型台形石器などがあり、ＡＴ降灰後の後期旧石器時代後半期のものと考えられる。また１点のみだが旧石器時代終末期の細石刃の可能性のある石器も出土した。旧石器時代遺物は第10次Ｂ区、第11次Ｆ区（Fig. 39－89のナイフ形石器）でも出土しており、五十川遺跡の台地南端縁辺部を中心に当該期の遺跡が展開する可能性が高い。

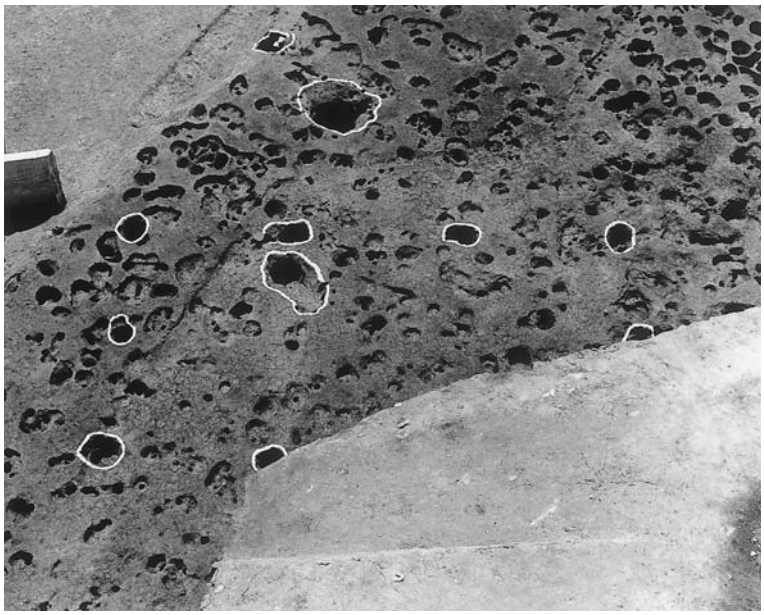
PL. 6



1．Ⅰ区南半部全景（北西から）

2．Ⅰ区北半部全景（北西から）

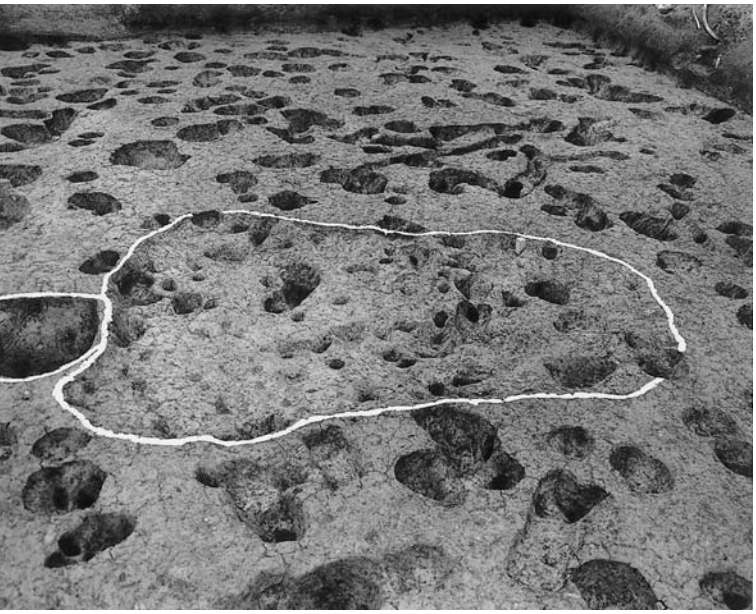
1．掘立柱建物 SB－9020北半部（北西から）



2．掘立柱建物 SB－9020南半部（北西から）

3．井戸 SE－9053（南西から）

4．貯蔵穴 SK－9010（東から）

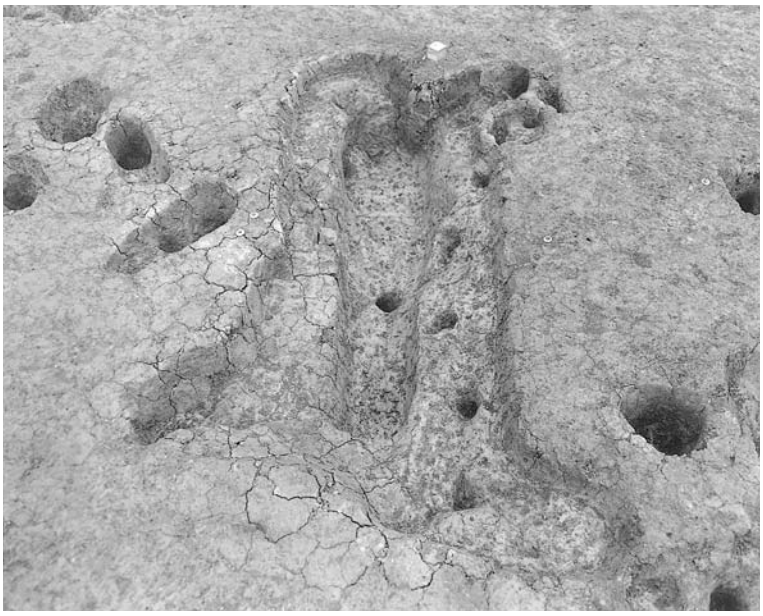


5．土坑 SK－9001（北から）

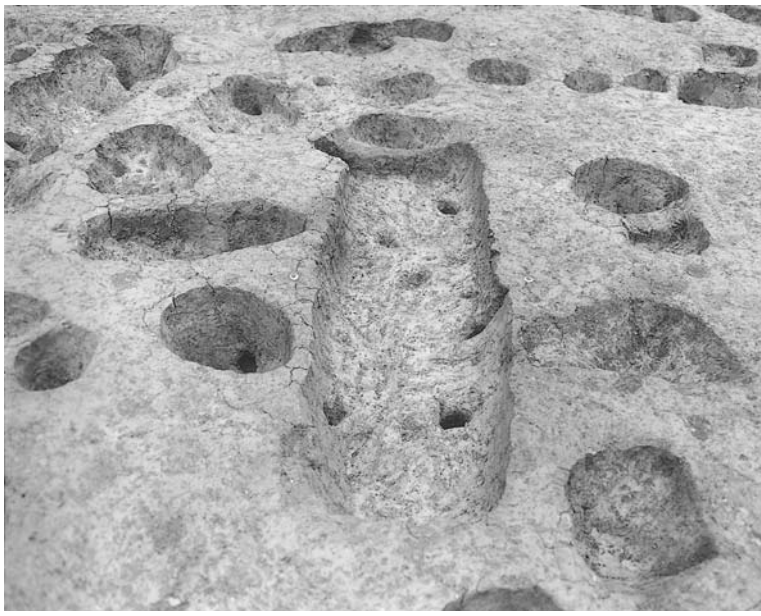
6．土坑 SK－9052（東から）

1．落とし穴状遺構 SK－9008（南東から）

2．落とし穴状遺構 SK－9009（北西から）



3．落とし穴状遺構 SK－9011（北西から）



4．落とし穴状遺構 SK－9016（北西から）

5．落とし穴状遺構 SK－9017（北西から）

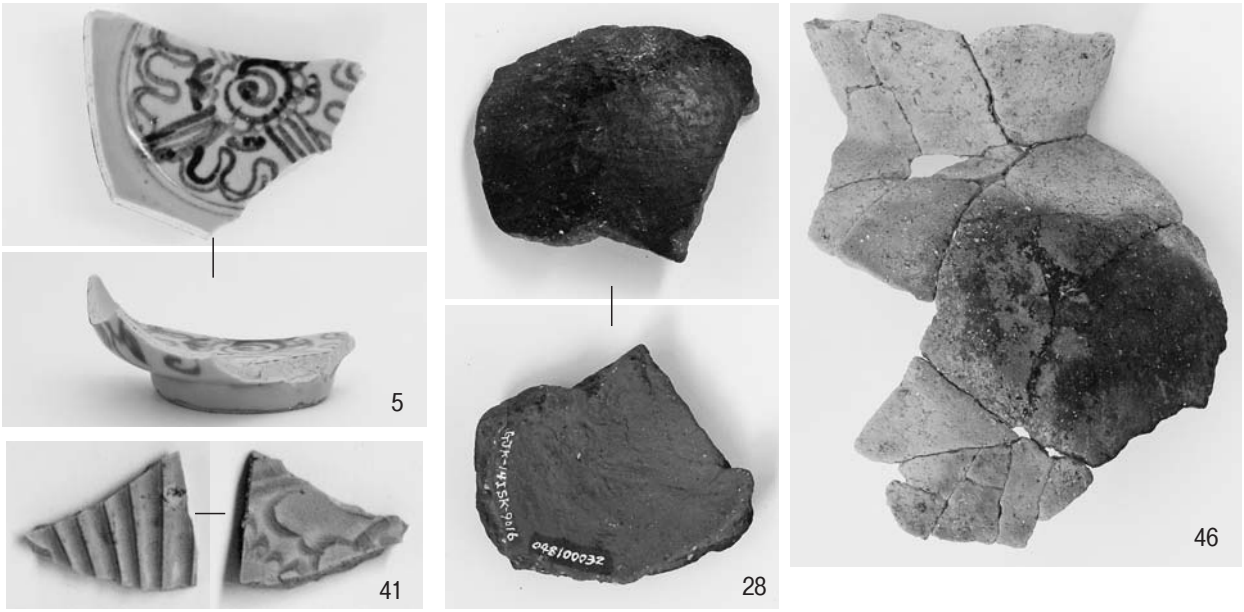
6．土坑 SK－9019（南西から）

1．旧石器時代包含層グリッド（北から）

2．旧石器時代包含層グリッド（北から）

3．Ⅰ区南端のトレンチ調査（南東から）

4．Ⅰ区作業風景（北西から）



5．Ⅰ区出土遺物（縮尺不同）

第五章　F・G区の調査（補遺）

1．調査の概要（Fig. 5）

第11次調査F・G区については前年度に調査報告書を刊行し、F区では弥生時代の集落と墓地、古墳時代前期の集落（竪穴住居、土坑）、古代の溝、中世の集落、G区では弥生時代前期後葉～中期初頭の円形竪穴住居などについて報告を行った。しかしながら、各遺構から出土した石器のうち黒曜石製石器については紙数と整理期間の関係で掲載することができなかったため、本年度に追加して報告するものである。

黒曜石製の剥片石器は、弥生時代～中世にわたる各遺構から出土しているが、本来は弥生時代の遺構に伴うものと考えられる。F・G区の弥生時代遺構は、①前期前葉（板付Ⅰ式新段階）から中葉（板付Ⅱａ式）に貯蔵穴・土坑などの遺構が出現し、②前期後葉（板付Ⅱｂ式）をピークとして貯蔵穴が環状に多数造られるとともに、竪穴住居・土坑からなる集落と木棺墓・土壙墓からなる墓地が営まれ、③前期末・中期初頭～前葉に竪穴住居・小溝・土坑からなる集落と甕棺墓が近接して営まれる、という推移をたどる。この後、弥生時代中期中葉から後期の遺構・遺物は全く見ることができず、次の古墳時代前期まで空白期間がある。よって、黒曜石製石器は弥生時代中期前葉以前の遺構に伴うものと考えられる。

なお、F区・G区は調査区画が分かれたが近接する一連の遺跡であり、遺物はまとめて報告する。

2．黒曜石製石器（Fig. 39～50）

出土した黒曜石は、遺構ごとに小袋に入れ、深さ10cmのコンテナにぎっしり詰めて11箱を数える。そのほとんどは不整形の剥片と砕片（チップ）である。これら全てを観察し、石鏃など二次加工のある石器は全て選出し、一部を除いて図化した。剥片と石核については、弥生時代前期～中期の遺構に伴ったものを優先的にピックアップして一部を実測したが、全体量からみればごく一部にすぎず、資料が膨大な量にのぼるため、実測していない遺物については詳細な検討を加えることができなかった。実測・掲載した石器は106点である。

石材は全て漆黒色の黒曜石で、不透明なもの、半透明なもの、帯状に半透明なもの等があり、不純物や節理の有無など小異があるが、原礫表皮などの肉眼観察では全て腰岳産の黒曜石と見られる。一部に長崎産と思われるやや白濁した黒曜石があるが１％未満（コンテナ11箱の内３点）と極めて少ない。また、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期と見られる石鏃などがあり、古い時期の黒曜石が若干混入している。黒曜石製石器には石鏃・石錐・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片があり、その他に剥片・砕片・石核がある。

89はナイフ形石器である。縦長剥片の右辺に腹面側から急角度のブランティングを加える。打面は小剥離を加えて除去する。左辺の下半に微細な刃こぼれがある。F区南端部のピットから出土した。**90**は表裏に平坦剥離を加えて形を整えた石器で、パティナの具合から旧石器の可能性が強い。F区北半部のピットから出土した。

91～**122**は打製石鏃である。**91**は縄文時代早期の石鏃で、基部の抉りが深く、脚端が尖る。パティナが著しく剥離の観察が困難である。石鏃は全体的にみても小さなものが多く、特に**92**～**94**は先端部を欠損するが長さ1.6～1.8cmと小さい。**106**～**112**は基部の抉りがほとんどない平基式で、**113**・**114**は逆に基部が若干突出する。**115**～**121**は素材となった剥片の剥離面を表裏に残す広義の剥片鏃、**122**は

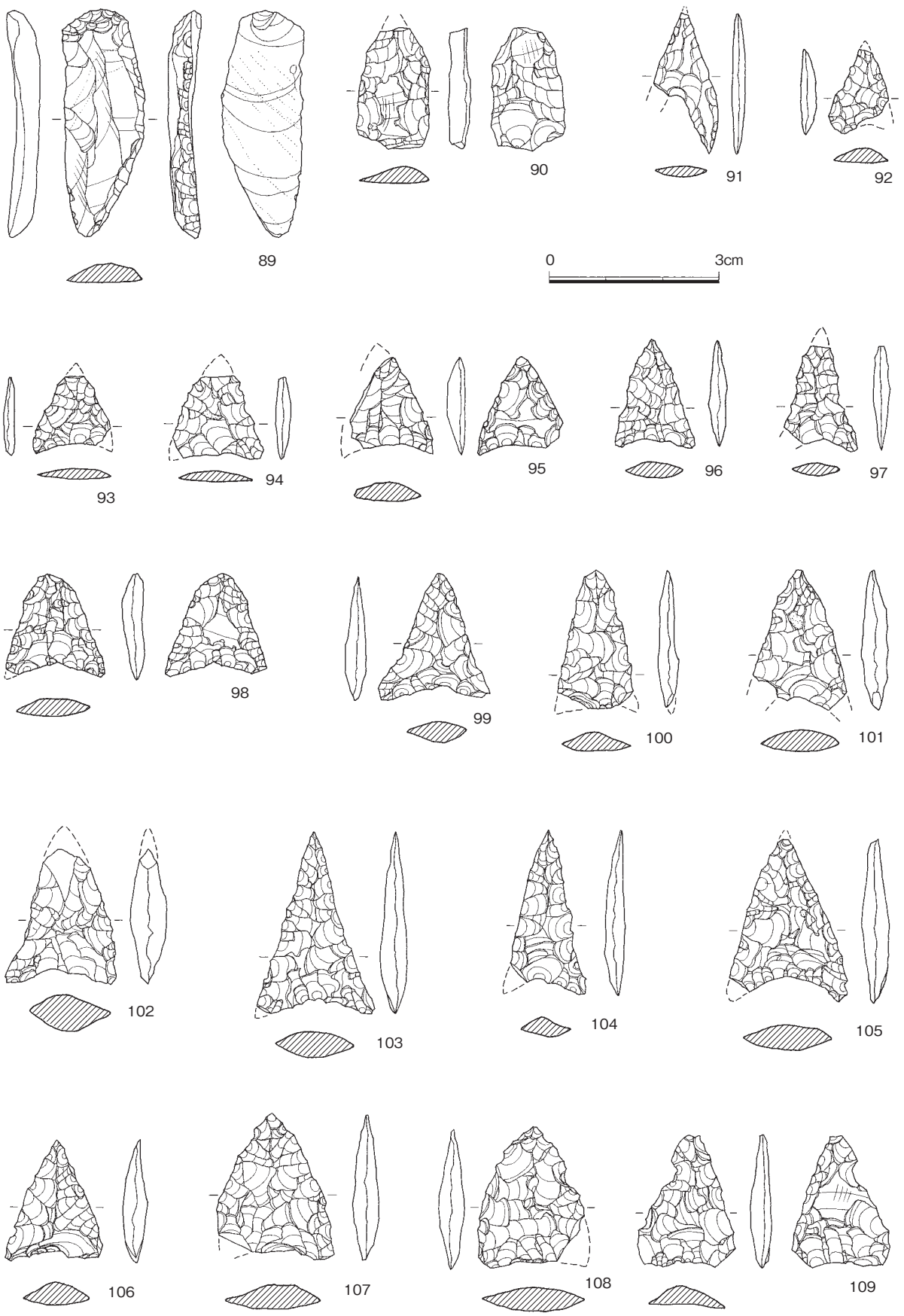


Fig.39　黒曜石製石器Ⅰ（1/1）

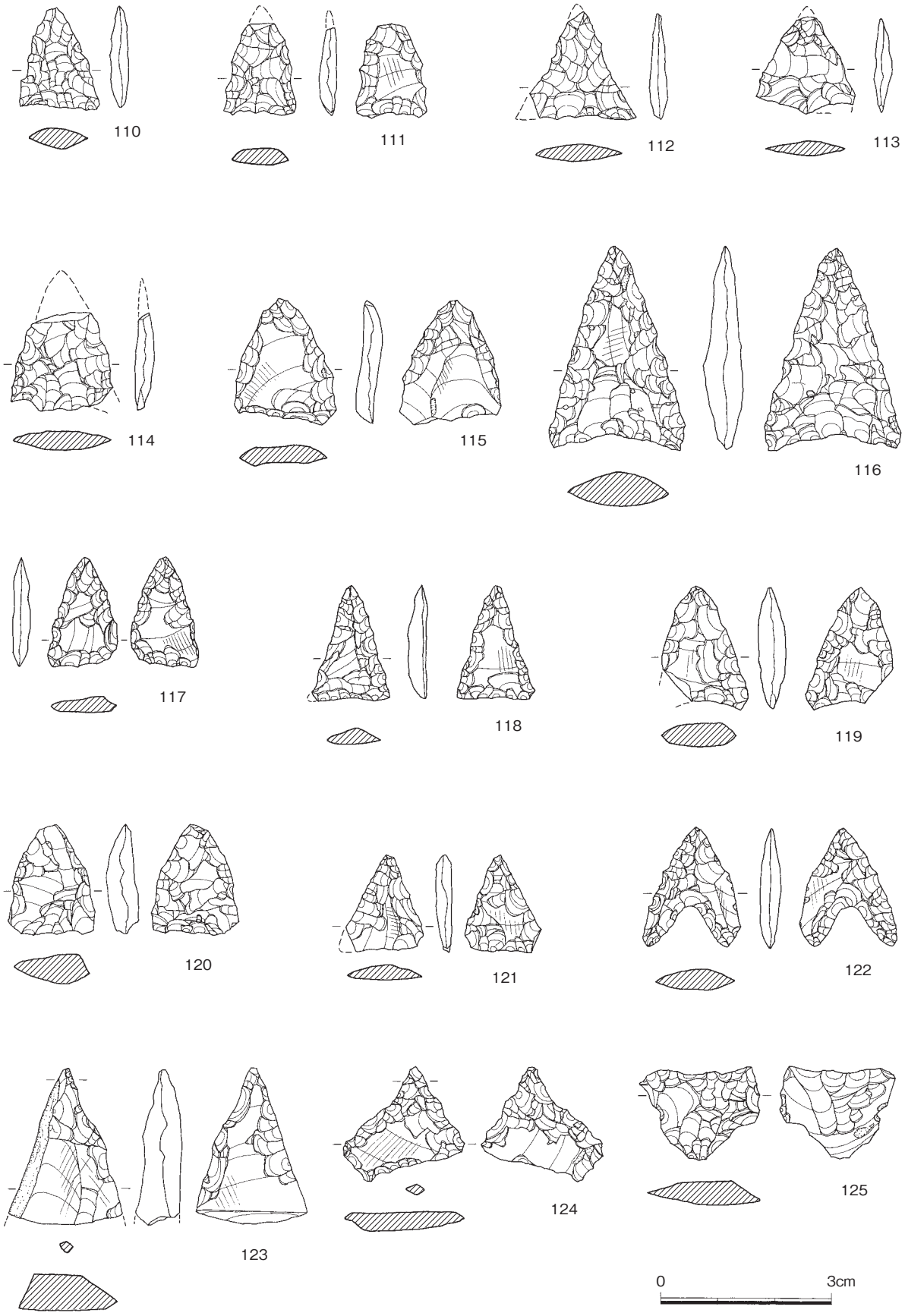


Fig.40　黒曜石製石器Ⅱ（1/1）

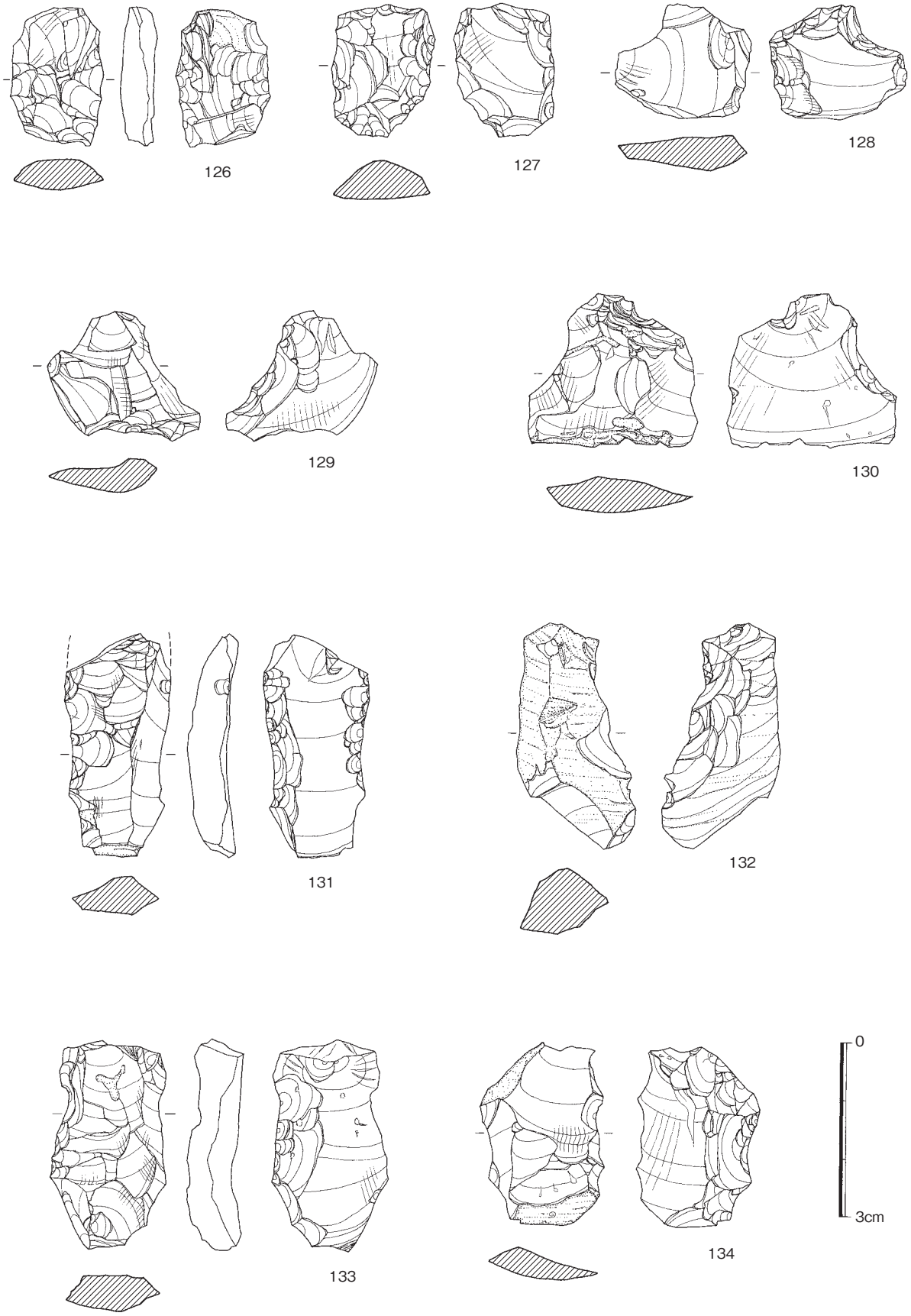


Fig.41　黒曜石製石器Ⅲ（1/1）

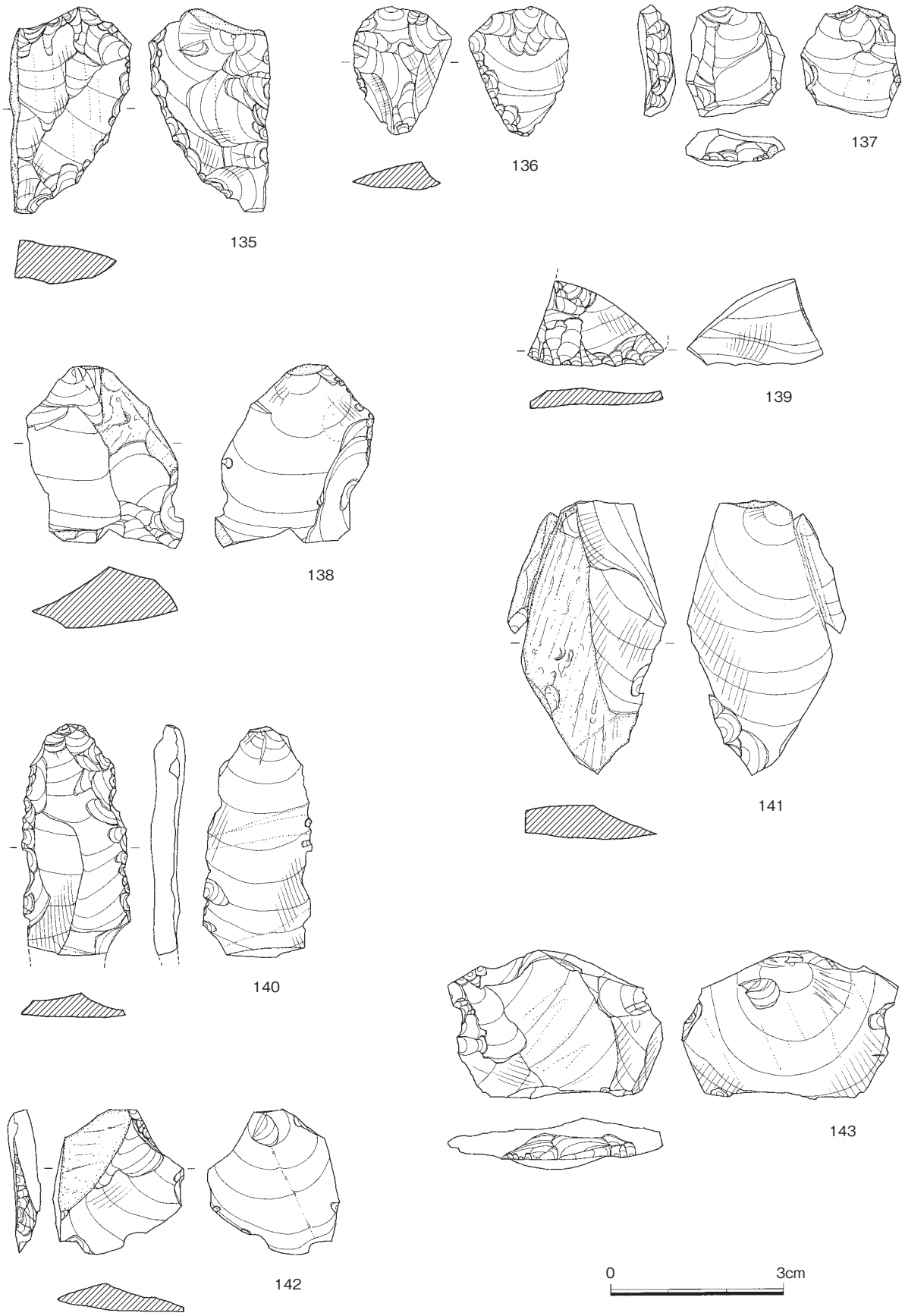


Fig.42　黒曜石製石器Ⅳ（1/1）

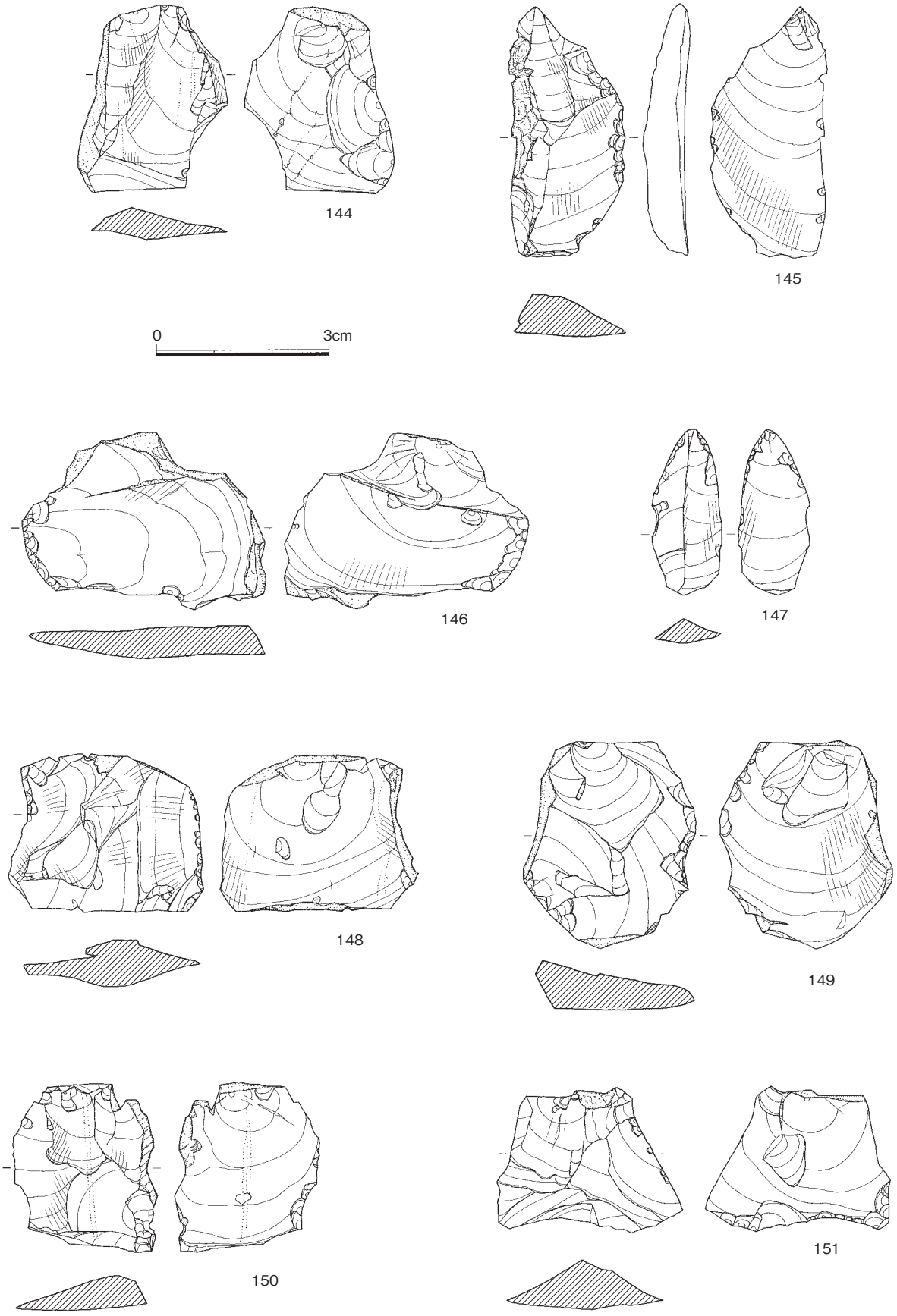


Fig.43　黒曜石製石器Ⅴ（1/1）

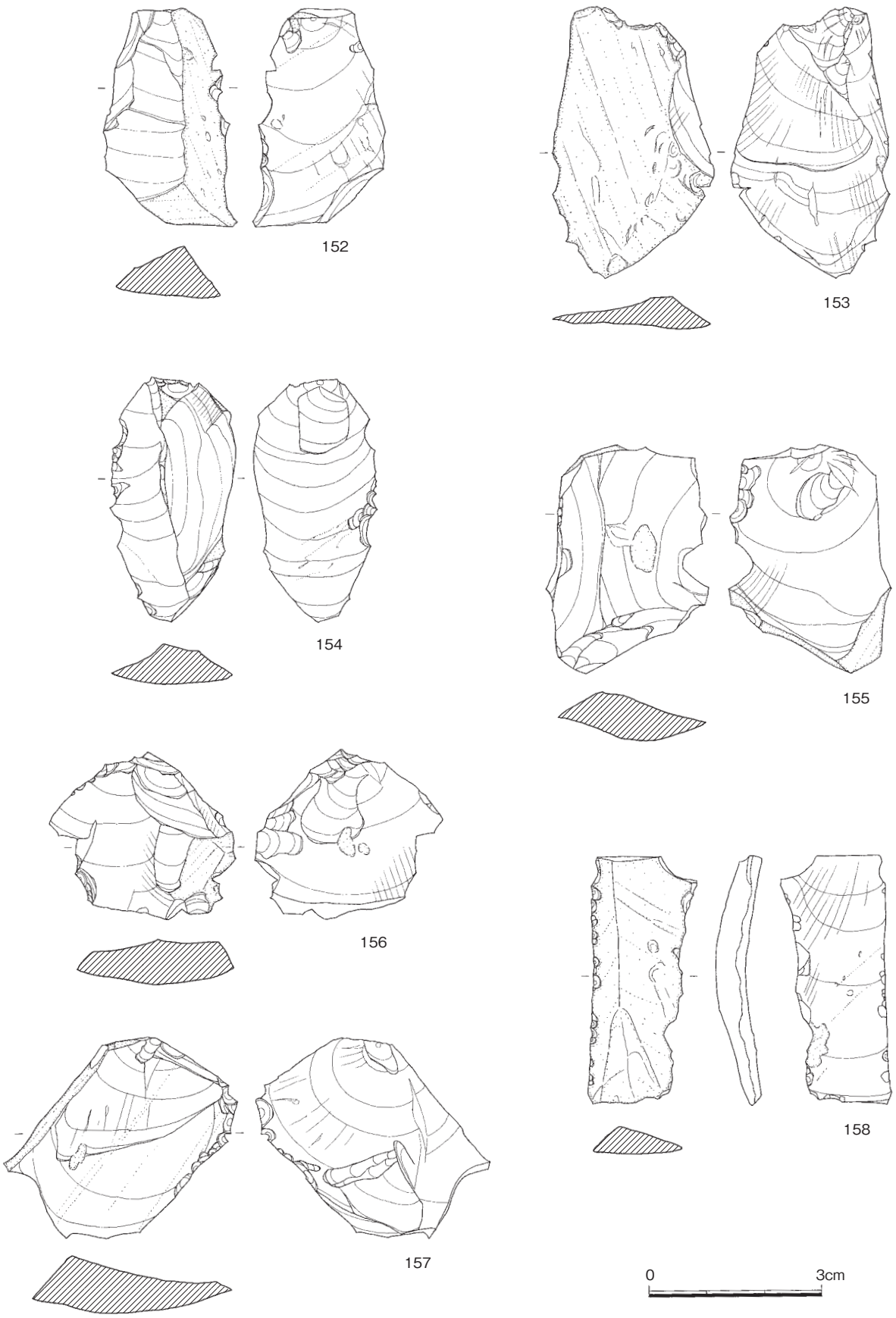


Fig.44　黒曜石製石器Ⅵ（1/1）

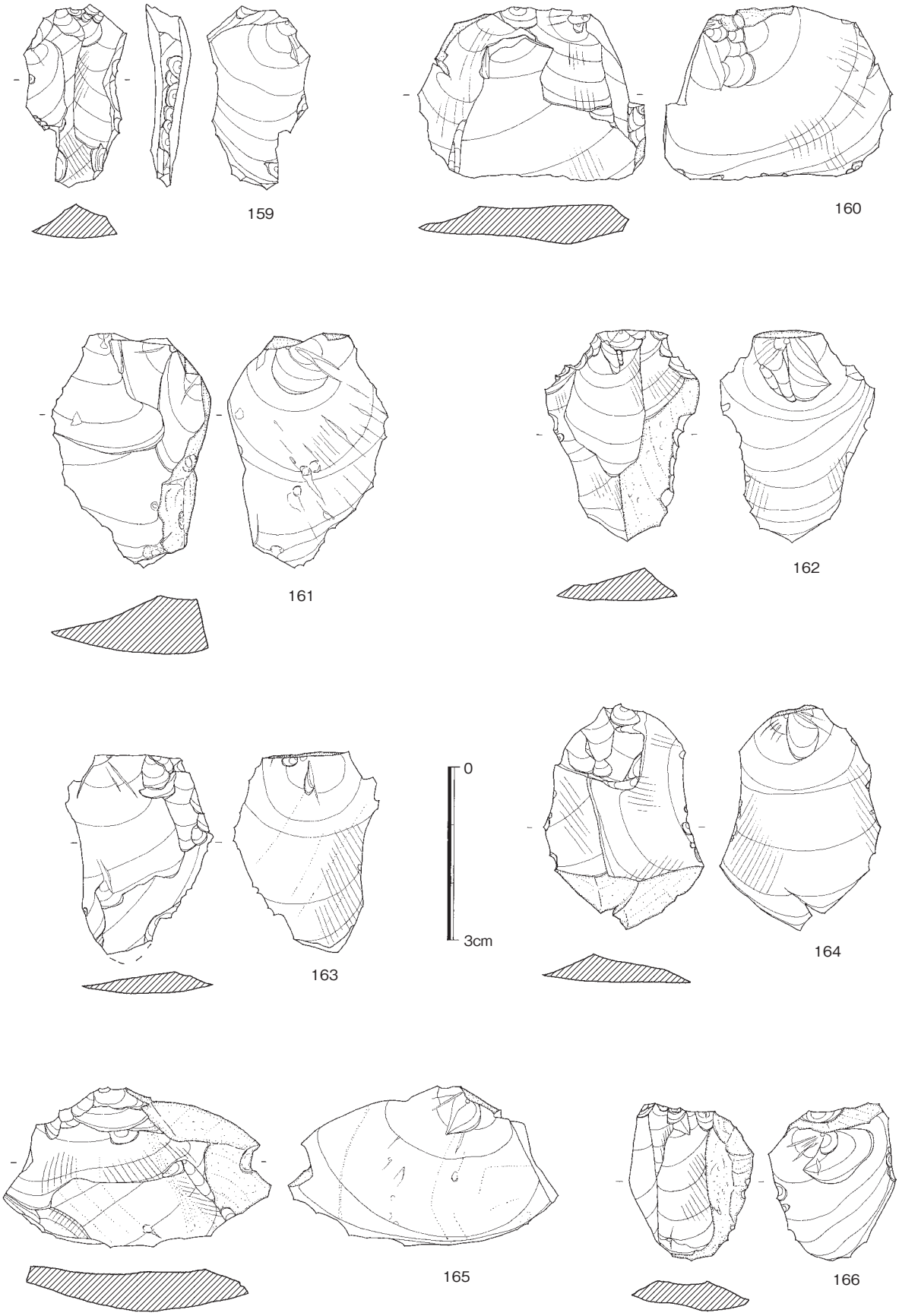


Fig.45　黒曜石製石器Ⅶ（1/1）

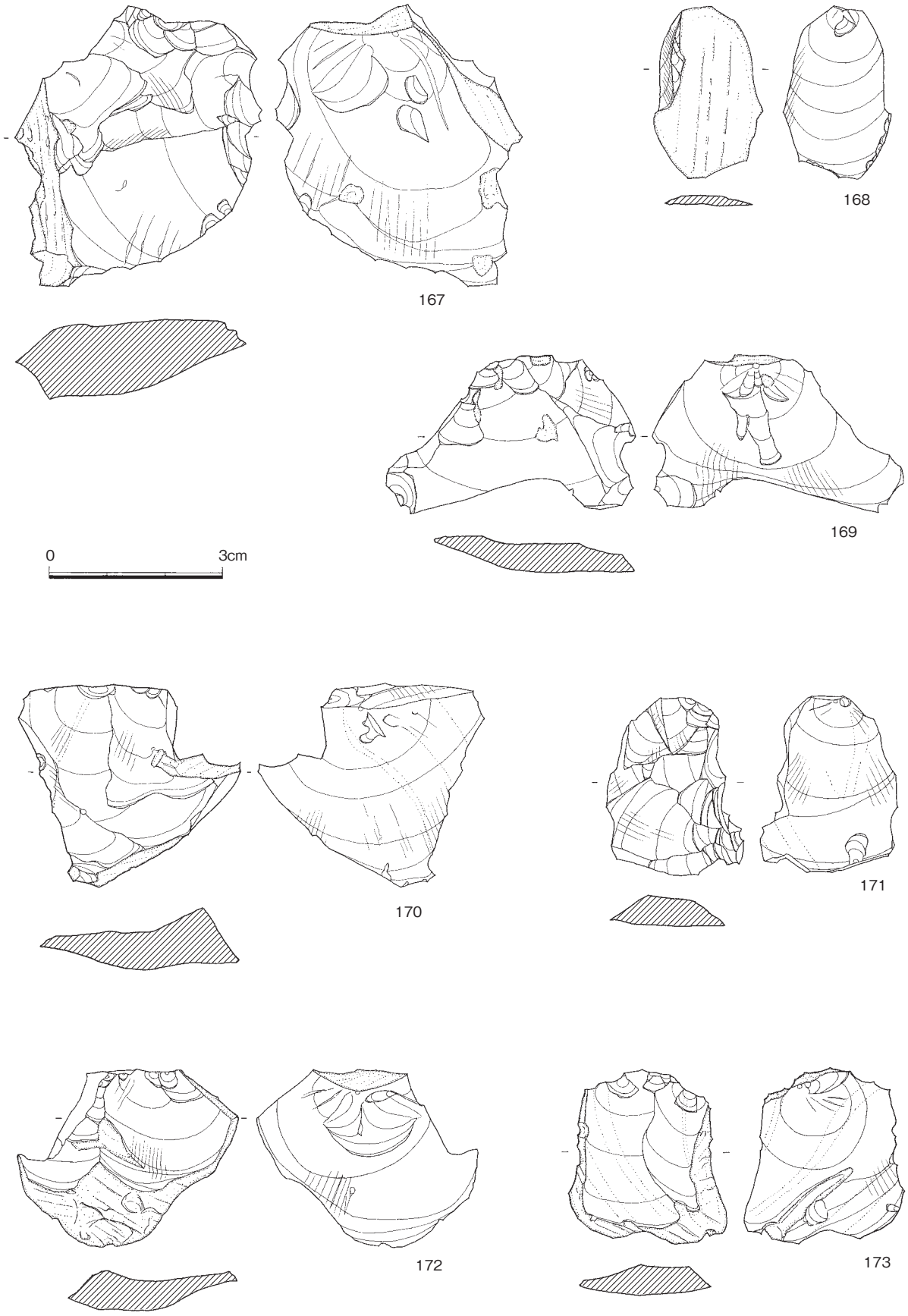


Fig.46　黒曜石製石器Ⅷ（1/1）

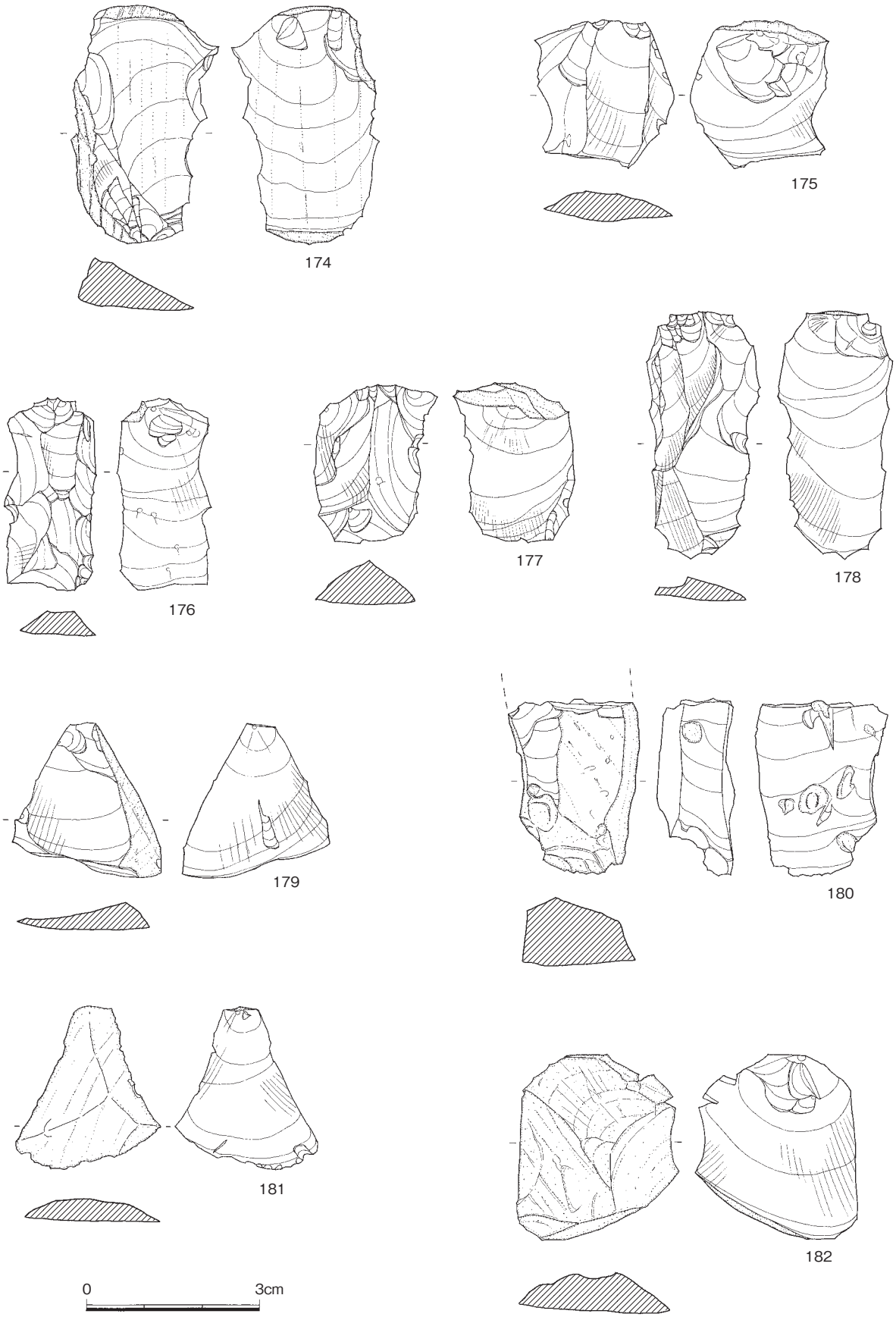


Fig.47　黒曜石製石器Ⅸ（1/1）

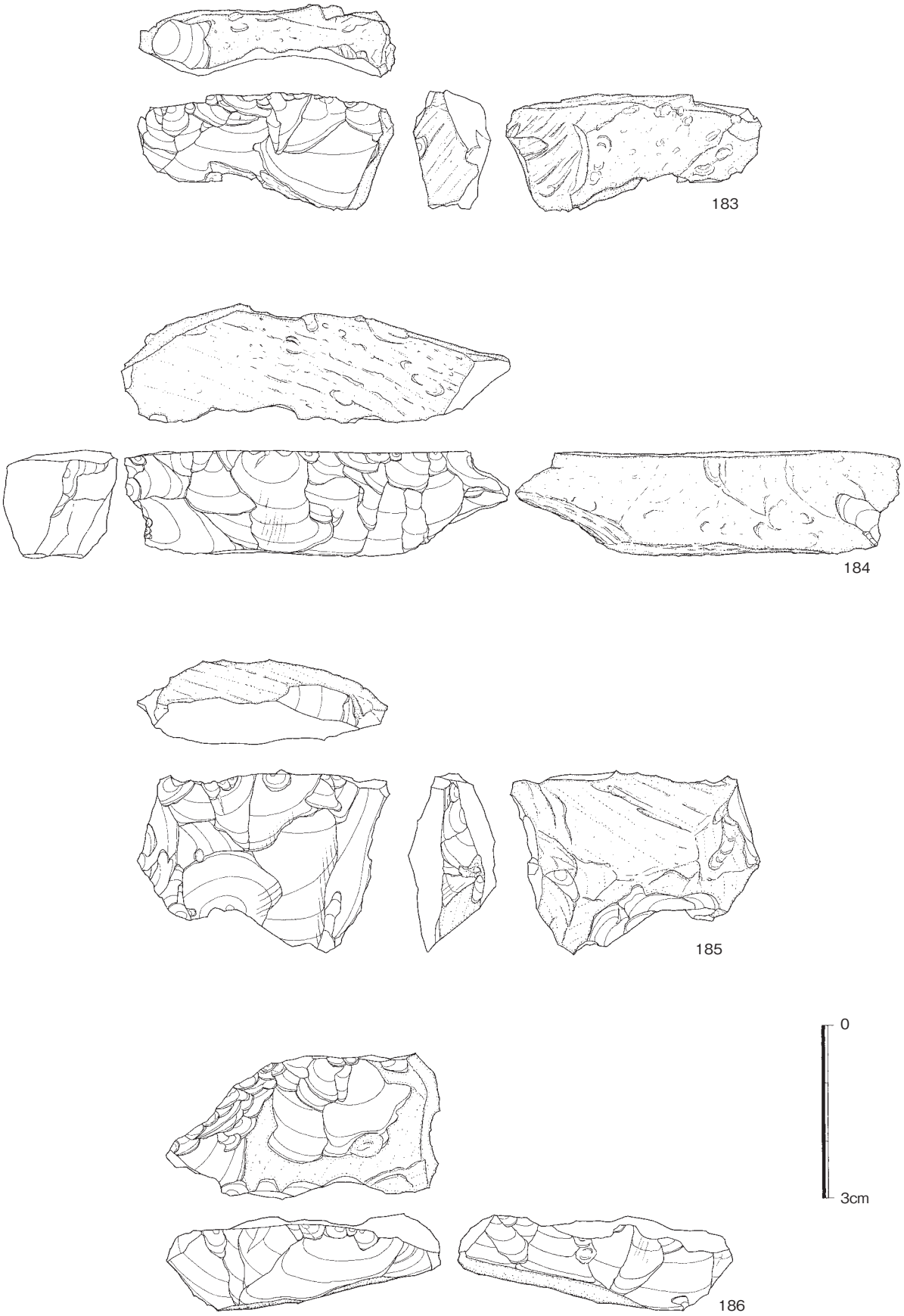


Fig.48　黒曜石製石器X（1/1）

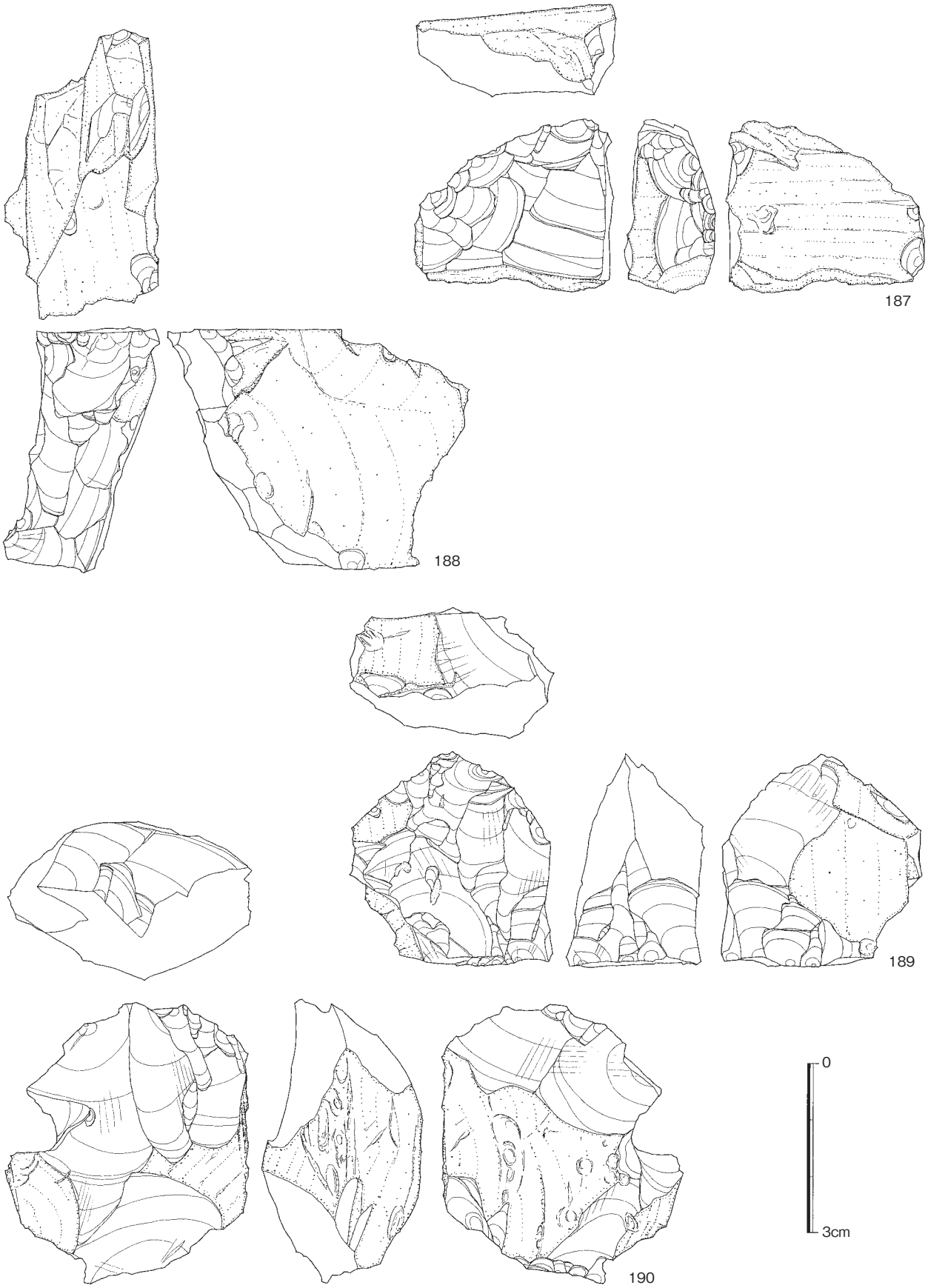


Fig.49　黒曜石製石器Ⅺ（1/1）

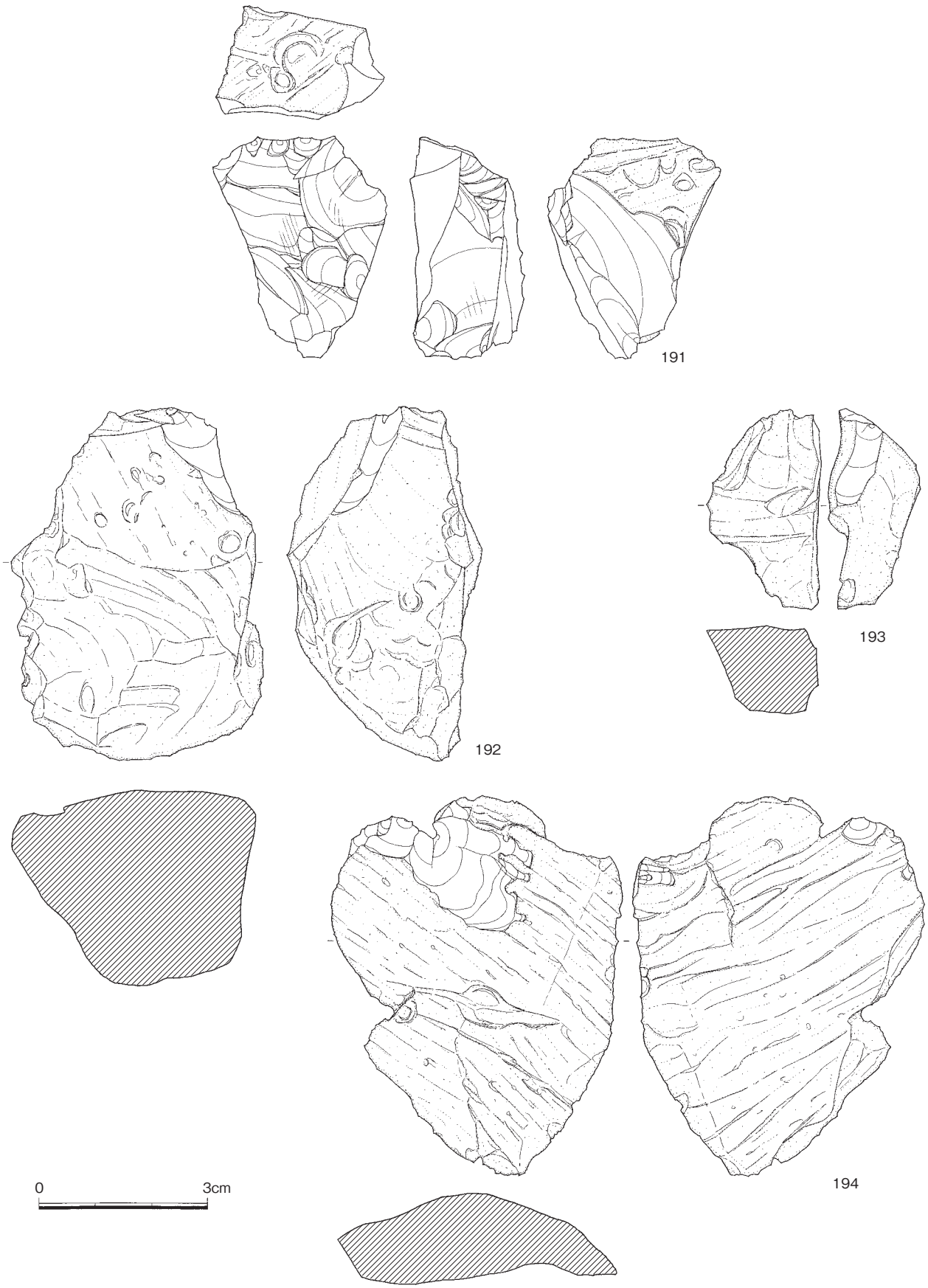


Fig.50　黒曜石製石器Ⅻ（1/1）

剝片のエッジを残す狭義の剝片鏃で縄文時代後・晩期の石器である。図化していない石鏃が10点あり、石鏃は計42点を数える。未図化の石鏃は全て破損品である。また、91・122以外にも縄文時代の石鏃が含まれている可能性がある。

123・**124**は石錐で、123は背面に原礫面を残す厚い剝片を、124は薄い剝片を用いる。

125～**144**は二次加工を施した剝片である。**125**は小剝片の表裏に平坦剝離を施したもので、不整三角形だが鏃に含めてよいかもしれない。**126**は剝片の表裏に二次小剝離を加えて長方形に整えた製品で、裏面に表皮を残す。**127**も表裏に二次剝離を加えるが、素材の剝離面が残り湾曲する。**128**は腹面の三方に剝離を加え打面は除去し、上辺はノッチ状にする。**129**・**130**は下辺の背面側に急角剝離を加え、側辺の腹面側を加工してノッチ状とする。**131**は左右側辺の腹面側に、**132**は右側辺の腹面側に小剝離を施す。**133**は左辺が背面、右辺が腹面に加工する。**134**は主に腹面に平坦剝離を入れる。**135**は右辺の表裏と左辺腹面に、**136**は右辺の腹面に小剝離を入れる。**137**は左・下辺に急角の剝離を施す。**138**は左辺腹面に二次剝離をひとつ入れ、右辺と下辺には使用痕がある。**139**は剝片下辺の背面に、**140**は左右辺の背面に、**141**は右辺下端のみに二次加工を施す。**142**は左辺と右上辺に急角の剝離があり、他の辺には使用痕がある。**143**は下辺の腹面側から急角剝離を入れ、使用痕が重なる。**144**は左辺の腹面側に平坦剝離を施す。**145**～**159**は使用痕のある剝片である。147は二重パティナを被る。**160**～**171**は縁辺に僅かな刃こぼれがあるが、使用痕か疑わしい。**172**～**182**は剝片で、181・182はファーストフレイクである。145～182の剝片は膨大な量の出土品の中から任意に選出した。

125～182の剝片のうち、打面が観察できるものは44点で、うち37点が自然面打面、１点が自然面の点打面、６点が平坦打面で、打面調整を行うものは全くない。剝片の最大長は2.5cm以下が３点、2.6～３cmが９点、3.1～3.5cmが13点、3.6～４cmが同じく13点、4.1～4.5cmが７点、4.6～５cmが４点である。未図化の剝片を含めた全体的な特徴として、きれいに抜けたフリーフレイキングの剝片が少なく、階段状剝離を起こすか途中で折れているものが目立つ、分厚い剝片が多い、寸詰まりの剝片が多い、原礫表皮の付いた剝片が多い、などの点があげられる。

183～**191**は石核である。石核は約200点が出土している。任意に選出して分類し９点を図示した。原材となった黒曜石は角礫とみられ、石核の大半には原礫の表皮面が残り、残らないものは僅かである。打面調整を加えるものはなく、最初に礫面を打面として剝離作業を行い、次いでその剝離面を打面として別方向へ剝離を行うという作業を繰り返したと考えられ、結果として複数の打面・複数の剝離作業面を有するものが多い。189～191はその典型であり、特に191は上→右上→左下と打面を頻繁に変えて剝離作業を行い、最後は左側面が折れて石核を廃棄している。この他に剝離面の中央に打撃を加えた無法な石核も数点ある。しかしながら、183～185、187・188のように側面に残るチップ状の小剝離を除けば、背面を意識して主に片側から剝離を連続して行ったものもあり、一方向に剝いでいこうとする意識を持った剝片剝離も行われたと考えることができる。

192～**194**は原礫である。いずれも１ヶ所に打ち欠きがあり、採集時等に材質のチェックを行ったのであろう。192は長さ6.2cmと大形で、194も剝片状だが長さ6.7cmを測る。しかし193のように長さ3.5cmの小振りのものもあり、他に２cm大の原石も出土している。

石核と剝片に見られる剝片剝離の進めかたは１点１点が異なり、打面転移を繰り返して剝片が取得可能なところは全て叩いている感がある。生み出された剝片は長さ３cm前後のものが最も多く、石核の大きさに対応しており、これらの剝片は石鏃・石錐・二次加工のある剝片、使用痕のある剝片などに使用されている。しかしこれとは別に、183や184・186のように方形角礫を故意に横位に用いて短辺を作業面とし、長さ２cm未満の短い剝片を取った石核が存在している。これらは長辺を作業面にす

れば縦長剝片の取得も可能であろうと思われるので、明らかに短い剝片を取得することを目的にしたと考えられる。最も小さい石鏃は長さ1.6cmのものがあるが、この石核から得られた剝片ではこの素材にすら適さないであろう。

3．その他の石器（Fig. 51）

195～**201**は安山岩製の剝片石器である。**195**・**196**は打製石鏃で、195は左脚端を僅かに欠く。**197**は長身の石鏃もしくは石錐、**198**は石槍か。**199**は表裏両面に小剝離を施した石器で、下端は少し折れている。**200**は寸詰まりの剝片の上下に二次剝離を加え、打面は除去する。スクレイパーか。**201**は縦長剝片で、右側辺に軽微な使用痕がある。

202は磨製石鏃である。小剝離で形を整えた後、アミで示した部分に研磨を施している。頁岩か。F区出土の磨製石鏃はこれを加えて３点となった。**203**は石庖丁の小片である。F区出土の石庖丁は、この１点を加えて13点、未製品２点を数える。

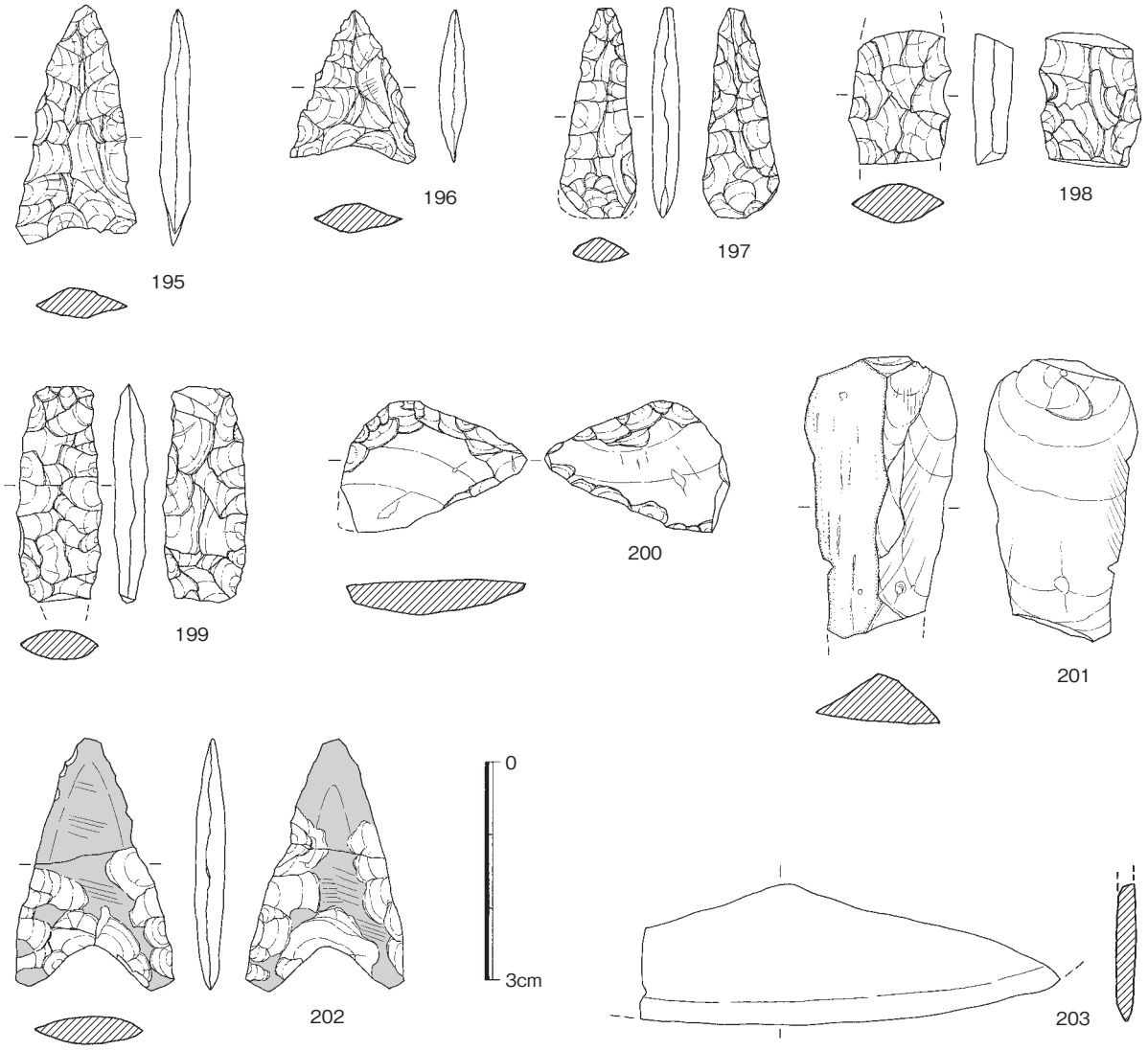


Fig.51　その他の石器（1/1）

第六章　おわりに －都市計画道路　御供所井尻線建設地内の調査から－

五十川遺跡第10・11・13・14次調査の概要はTab. 1にまとめたが、ここでは各時期に分けて遺構の概要を整理しておきたい。

旧石器時代・縄文時代

Ｂ区、Ｆ区、Ｉ区で旧石器が出土した。Ｂ区では剝片類、Ｆ区ではナイフ形石器が後世の遺構から出土した。Ｉ区では黒曜石が出土した地点を中心にグリッド５ヶ所を設けた結果、ローム層から原の辻型台形石器・ナイフ形石器・細石刃？・スクレイパー等が出土し、特に北西部に原の辻型台形石器や剝片類が集中する傾向が伺えた。各調査区は台地の南端部分に相当しており、おそらく五十川遺跡では台地縁辺に沿って旧石器時代遺跡が展開していると考えられる（ただしＥ区ではロームを掘り下げたが成果なし）。これらの石器群はAT降灰後の後期旧石器時代後半期のものと考えられるが、細石刃の可能性のある石器も１点出土しており、終末期にも遺跡が展開した可能性がある。

縄文時代の遺物には、早期とみられる黒曜石製打製石鏃（Ｉ区）、中期頃の蛇紋岩製磨製石斧（Ｆ区）、後期を中心に盛行する黒曜石製剝片鏃（Ｉ区）、晩期の粗製深鉢形土器（Ａ・Ｃ区）等が出土したが、明確な縄文時代遺構は認められない。

弥生時代（Fig. 52）

弥生時代遺構は今回調査の主体をなすものである。まず前期の遺構を北から見ていくと、Ｅ区・Ｃ区・Ｆ区北半では貯蔵穴・方形住居が点在する状況を示すが、調査区が細長いため本来の遺構の分布状況は分からない。貯蔵穴はいずれも２基がペアとなり、多量の炭化米を出土するものがある。Ｆ区南半には貯蔵穴が環状ないし馬蹄形に集中する部分が認められ、この環状貯蔵穴の周りには円形住居があり、北西側には木棺墓を主体とする墓地がある。墓地は沖積地に面する丘陵端部に造られている。未調査区を挟んだ南側のＢ・Ｄ区では断面逆台形の溝をそれぞれ検出しており、つながって環溝となる可能性が強い。この環溝の内部では貯蔵穴３基を確認している。さらに遺構は環溝の南側にも点在するが極めて薄く、前期遺構の分布は環溝以北が中心となるとみられる。これらの遺構の出土遺物には板付Ｉ式新段階の土器も含まれるが、本格的な遺構の開始時期は次のⅡａ式段階に位置づけられ、Ⅱｂ式段階の遺構が最も多い。貯蔵穴から出土した炭化米や石庖丁などから周辺低地に水田を開き生活基盤とした集落と見られ、黒曜石製の剝片石器を多用する特徴がある。

以上の集落・墓地は中期にも継続する。Fig. 52では前期に比べると遺構の数が少なく見えるが、貯蔵穴の一部は中期初頭まで継続する。中期遺構は円形住居４、弧状の溝・土坑のほか、木棺墓を継続する形で甕棺墓が同じ場所に営まれている。これらの遺構は中期前葉までにおさまり、次の中期中葉には集落・墓地とも廃絶している。Ａ区に弥生時代後期とみられる土坑がひとつあるが、以後は古墳時代前期に至るまで遺構は皆無に近く、南北に隣接する那珂遺跡群や遅れて井尻Ｂ遺跡にこの時期の遺構が盛行することと好対照をなしている。

古墳時代前期（Fig. 52・54）

集落遺構はＦ区南半部で竪穴住居４棟を検出した。いずれも方形住居である。これに対応する埋葬遺構として、北端のＥ区・Ｃ区で計３基の方形周溝墓を確認した。南側のSD－3006は溝の内法で東西11m、南北推定12mを測り、北側のSD－5001も溝幅から同程度の規模と考えられる。西のSD－3028は南北内法8. 3mで一回り以上小さい。主体部はいずれも調査区外にある。また、SD－3028の南で石棺墓を確認しており、周溝墓と同時期の可能性が考えられる。集落からこれらの墓群まで60m離れているが、調査区が細長いため、この間の遺構の有無については今後の調査に期待するほかない。

また、竪穴住居から南へ約100m離れたＡ区・Ｉ区では列状の土坑群を検出している。土壙墓の可能性も考えられるが、底面が傾斜するなど墓とは見なし難い遺構が含まれており、一帯に木根状の小ピットが多いことから森林のけもの道に仕掛けられた落とし穴の可能性を考えた。更なる検討を要する。この他、Ａ区・Ｉ区では井戸状の深い土坑を検出している。

古墳時代後期～古代（Fig. 52）

古墳時代後期の遺構には、Ａ区検出の古墳周溝とみられる６世紀末の弧状溝がある。径10～12mの円墳とみられ、近くに同時期の東西方向の溝１条と方形竪穴住居１棟がある。その他、北端のＥ区で土坑２基を確認したが、全体的に見てこの時期の遺構・遺物は極めて少ない。

奈良時代の遺構にはＢ区とＦ区東端で確認した溝がある。幅２～2.5m、深さ0.9～1.3mの断面逆台形ないしＶ字形をなし、Ｂ区では掘り直しの痕跡を確認している。ふたつの溝は連続すると考えられる位置関係にあり、磁北から４°東の方向に直線的に伸びていくと予想される。７世紀後半から８世紀代の遺物が出土した。古代の遺構には、他に奈良時代ではＨ区の井戸、平安時代のものとしてＣ区の土壙墓、Ａ区の土坑があるが、古墳時代後期に続いて遺構は希薄であると言えよう。

中世（Fig. 53）

中世の遺構は、前半期（13～14世紀）の遺構群と、後半期（15～16世紀）の遺構群に２大別される。前半期の遺構には、Ｆ区南半に検出した浅い溝２条と土坑、Ｈ区の井戸、Ａ区・Ｉ区で検出した溝・土坑・掘立柱建物などがある。出土遺物から13世紀中頃～14世紀前半頃を中心としよう。

中世後半期の遺構は、弥生時代遺構と並んで本調査の主要を占めるものである。北半のＣ区・Ｅ区・Ｆ区・Ｇ区では、台地縁辺を巡る環溝（SD－6010）、陸橋を有する堀（SD－6040）、その陸橋へ入っていく浅い溝などを検出しており、第15次調査においてもその延長を確認している。環溝はＦ区南半に直角に曲がるコーナー部があり、北はＥ区を越えて更に台地縁辺に沿って伸びていき、延長77m以上に達する。他方、コーナーから東へはＧ区を経て更に東へ伸びる。このコーナーの南には幅4.7mの陸橋を置いて、断面逆台形の大溝（堀）が掘られており、陸橋に向かって切り合う２条の浅い溝が南から東へ折れながら入っていく。この切り合う浅い溝は道路痕跡と考えられ、Fig. 53の昭和初期の旧地形図においても、この部分が引き続き道路として残っていたことが分かる。この道路の東側は40mほど伸びたところで北に折れ、台地状の高まりの裾に沿って伸びているが、地元の古老によると、この道路は五十川から曰佐方面へ行く通学路であったと言い、切り通しの崖面には甕棺が多数露出していたらしい。ともあれ環溝もおそらくこの道の北側に沿って伸びて行くと考えられ、台地状高まりの縁を取り囲むように巡らされていた可能性が高い。他方、南半のＡ区・Ｂ区・Ｄ区・Ｈ区でも中世後半の溝を検出した。これらは南北、あるいは東西に縦横に伸びているが、旧地形図に対比させれば、Ｈ区の溝（SD－8010）を除いて台地縁を巡る溝であることが分かる。SD－8010は台地上を東西に走る溝と思われ、埋没後に道路へと変えられた可能性がある。

特に北半部の中世後半期の遺構群は明らかに室町時代から戦国時代の居館に関連すると考えられる。既に他の五十川遺跡の報告書でも述べられているように、15～16世紀には大内・大友氏の家臣団の知行地との関連が考えられるが、最も問題となるのは遺構の詳細な帰属時期である。最も土量の多い堀状の大溝SD－6040でコンテナ５箱、環溝SD－6010でコンテナ３箱の遺物が出土したが、大半は弥生時代前期～中世前半期の遺物で占められ、数点の明代青磁や青花、朝鮮陶器の小片から16世紀代に位置付けているに過ぎない。湾岸部の博多遺跡群などに比べ、出土遺物が極端に少ないことが中世後半期の五十川遺跡の特質とも言えるが、これらの遺構の細かい時期比定は文字資料の出土を待つか、あるいは考古学的手法以外の手段を用いなければ困難かもしれない。

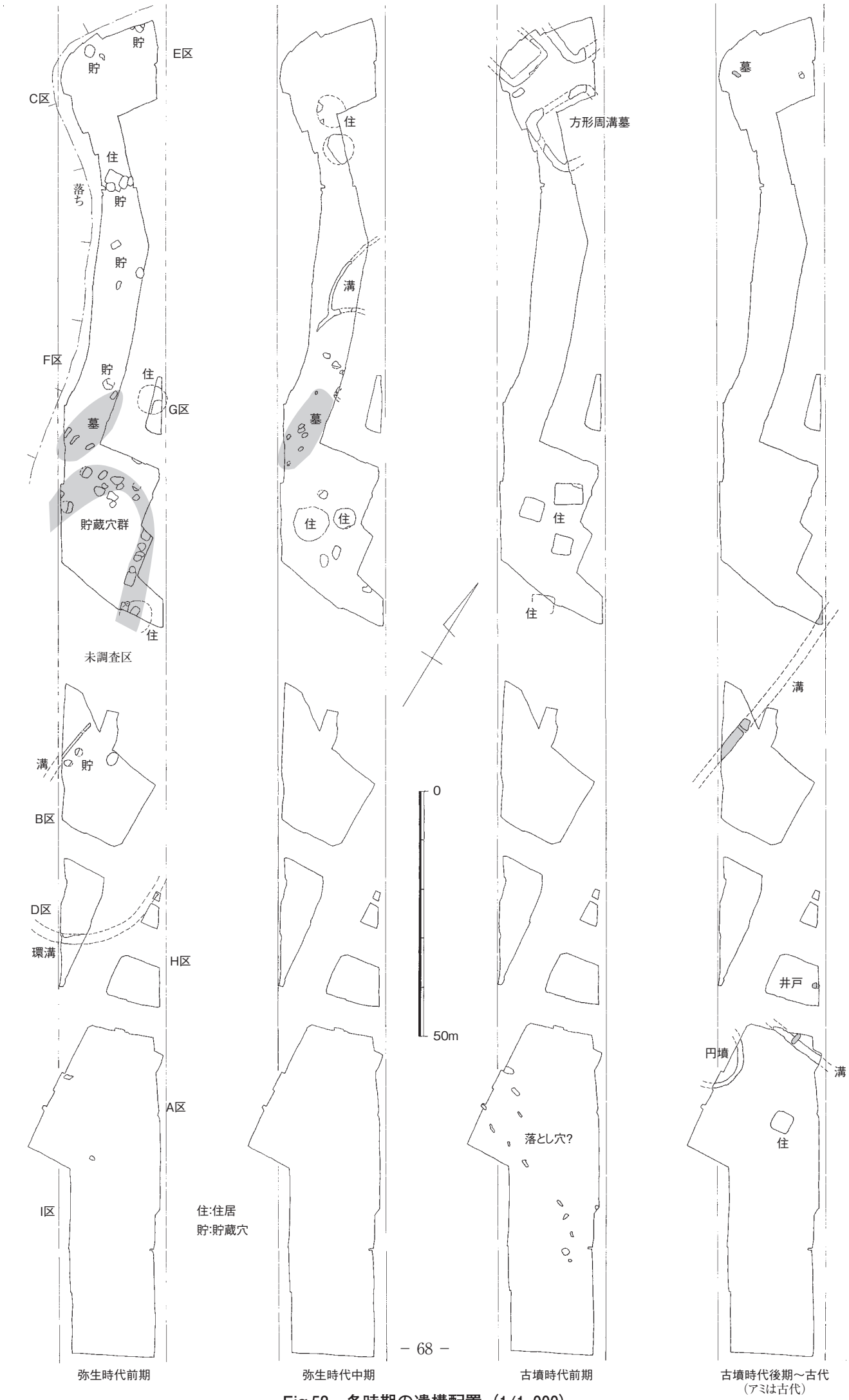


Fig.52　各時期の遺構配置（1/1,000）

Fig.53　中世の遺構配置と古地図との対比（1/1,000）

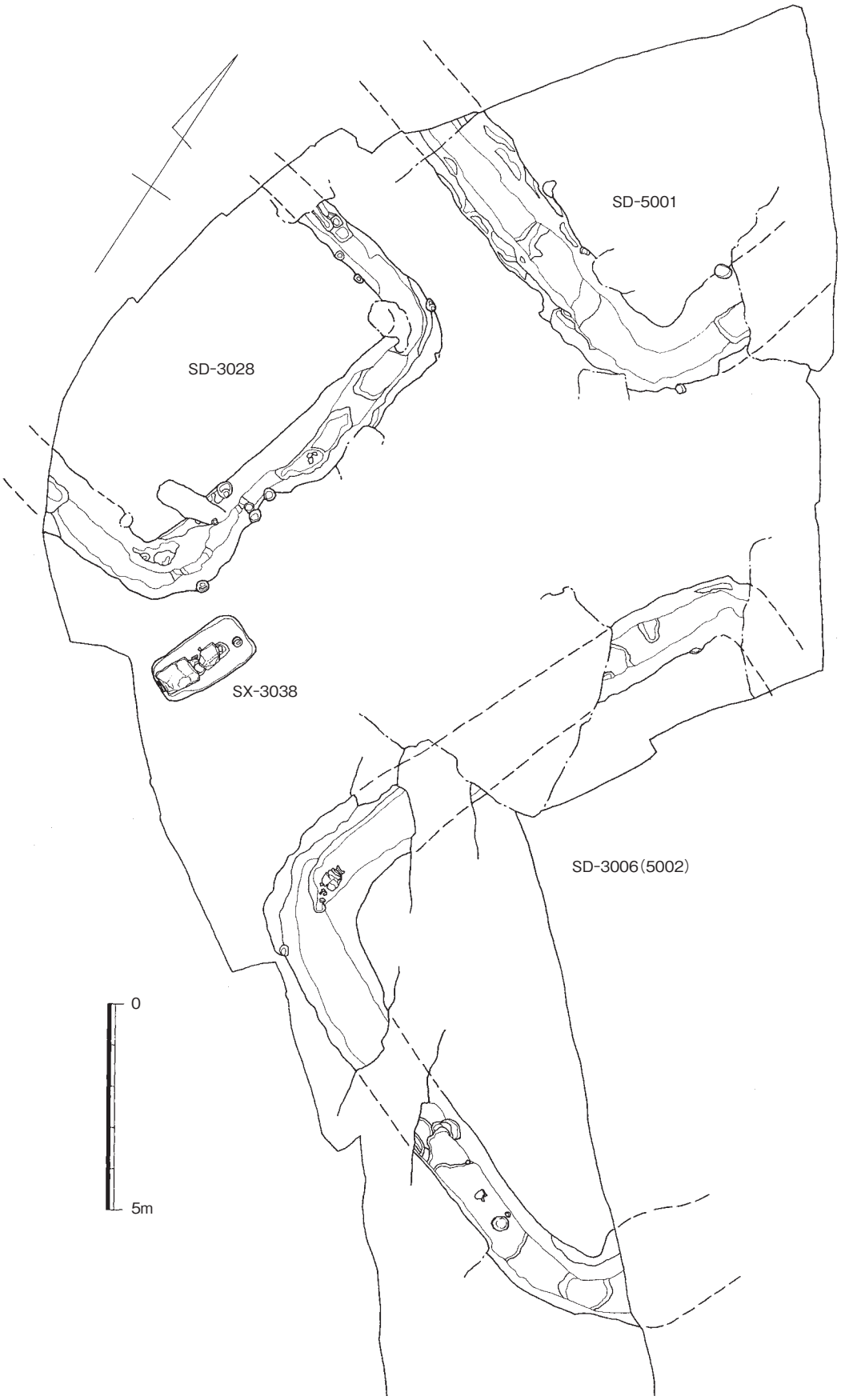


Fig.54　C 区・E 区方形周溝墓合成図（1/150）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ごじゅっかわいせき ろく―ごじゅっかわいせきだい13じ・14じちょうさのほうこく―
書名	五十川遺跡　6 －五十川遺跡第13次・14次調査の報告－
副書名	市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書
巻次	6
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1029
編著者名	吉武学
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8621　福岡市中央区天神１丁目８－１　電話番号　092－711－4667
発行年月日	西暦2009年３月31日

遺跡名ふりがな	ごじゅっかわいせきだいじゅうさんじ	ごじゅっかわいせきだいじゅうよじ
遺跡名	五十川遺跡第13次	五十川遺跡第14次
所在地ふりがな	ふくおかしみなみくごじゅっかわにちょうめちない	
遺跡所在地	福岡市南区五十川２丁目地内	
市町村コード	40130	
遺跡番号	0088	
北緯	33°　33′　28″	
東経	130°　26′　21″	
調査期間	2004.08.02～2004.08.31	2005.01.24～2005.06.03
調査面積（㎡）	129㎡	960㎡
調査原因	道路建設	

遺跡概要

調査地点		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
13次	H区	集落	奈良時代	井戸1	土師器＋須恵器	中世後半期の大溝など
			中世	溝3＋井戸2＋地下式壙1	土師器＋須恵器＋陶磁器＋瓦	
			時期不詳	溝1	なし	
14次	I区	集落	旧石器時代	包含層	ナイフ形石器＋原の辻型台形石器	多数の木根痕からかっては森林であったと思われる。
			弥生時代？	貯蔵穴1		
			古墳時代前期	井戸1＋落とし穴6＋土坑2	古式土師器	
			中世	掘立柱建物3＋土坑3	土師器＋須恵器	
			時期不詳	土坑3		

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書　Ⅵ

五十川遺跡　6

－五十川遺跡第13次・14次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1029集

2009年（平成21年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　高松印刷有限会社
　　福岡市東区松島１丁目４－10